

2022 年度 学位論文（博士）

釣竿に見る「用の美」—明治以降の六角竿、その興隆と衰退そして可能性—

The "Beauty based on Utility" in Fishing Rods

—The Flourishing, Decline, and Potential of Hexagonal Bamboo Rods since Meiji Era—

指導教員

仲 隆裕 教授

松井 利夫 教授

京都芸術大学大学院

芸術研究科芸術専攻

手塚 一佳

目次

目次	1
初出一覧	4
序論	5
第1章 遊び仕事としての伝統釣法「テンカラ」ーその伝承と道具に関する研究及び制作ー ¹	8
はじめに	8
第1節 遊び仕事とテンカラ釣り	9
第1小節 文化の消費による伝承文化の断絶の危機とその地域継承の問題	9
第2小節 テンカラ釣りと、その実態	10
第3小節 遊び仕事としてのテンカラ釣りと、その伝承	12
第4小節 民具としての釣具	13
第5小節 道具による生活の形勢と伝承	14
第2節 和竿制作手法とテンカラ竿	15
第1小節 和竿の種類と基本的な手法の差異	15
第2小節 テンカラ釣竿の制作過程	17
第3小節 江戸和竿手法によるテンカラ竿作りの実際	18
第4小節 和竿手法によるテンカラ竿の種類ー印籠作りと並継ぎの比較、実釣、修理ー	21
第3節 テンカラ竿試作の成果と、タケフナイフビレッジでの文化伝播	24
第1小節 試作の成果	24
第2小節 タケフナイフビレッジ鍛冶師のテンカラ釣り技法の変化	25
小結	29
第2章 近代日本における釣竿と生活ー敗戦などによる変化と、遊び仕事としての釣りー	

1.	31
はじめに	31
第1節 日本の釣り文化の発展と遊漁	33
第1小節 日本の江戸期までの釣具と発展	33
第2小節 日本の明治期～昭和初期の釣具と発展	34
第3小節 戦中戦後～高度経済成長期の釣具と発展を探るに当たって	37
第2節 管理釣り場から見た戦後の釣り文化	38
第1小節 日本の管理釣り場とフライフィッシングの始まり（養沢毛鉤専用釣場の事例から）	38
第2小節 一般日本国民向け釣り場の始まり（早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸の事例から）	41
第3節 釣具製造販売店から見た戦後の釣り文化	44
第1小節 進駐軍とお土産竿（櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」の事例から）	44
第2小節 六角竿とフライフィッシングロッド（株式会社レオン フライロッドビルダー三浦洋一氏の事例から）	47
小結	50
第3章 和製六角竿から見た 20 世紀日本における釣竿と生活 ¹	52
はじめに	52
第1節 本邦における戦前の六角竿の発展	53
第1小節 昭和初期の第一次六角竿ブーム	53
第2節 戦後六角竿ブームと米軍	58
第1小節 戦後、進駐軍に向けての六角竿制作の興隆	58
第3節 六角竿の実際	61
第1小節 ゲイシャロッドと野鯉竿	61

第2小節 2種類の「トンキンケーン」	62
小結	64
結論 釣竿に見る「用の美」 ―明治以降の六角竿、その興隆と衰退そして可能性― ¹	67
第1節 遊びと仕事との関連性から見る釣りの「用の美」	67
第1小節 釣りの「用」とはなにか	67
第2小節 「釣りの用」における「振動」という鑑賞	68
第3小節 六角竿の興隆と衰退	69
第2節 六角竿の可能性	70
第1小節 六角竿の製法と新しい六角竿製法の試行	70
第2小節 孟宗竹による竹害と、孟宗竹による六角竿の制作	72
第3小節 民具としての釣竿、その「用の美」	73
謝辞	74
註釈	75
参考文献	85
図版一覧	98
図版	102
発表論文リスト及び研究業績一覧	114

初出一覧

第1章 「遊び仕事としての伝統釣法「テンカラ」ーその伝承と道具に関する研究及び制作ー」『京都芸術大学大学院紀要』第1号、2021年、京都芸術大学、pp. 488-530 を加筆修正。

第2章 「近代日本における釣竿と生活ー敗戦などによる変化と、遊び仕事としての釣りー」『京都芸術大学大学院紀要』第2号、2021年、京都芸術大学、pp. 87-100 を加筆修正。

第3章 「和製六角竿から見た20世紀日本における釣竿と生活」『民具研究』164号、日本民具学会、2022年、pp. 37-52 を加筆修正。

結論 「日本における六角竿の製法と変遷ー漆を使った新しい竹フェルール手法ー」『京都芸術大学大学院紀要』第3号、2022年、京都芸術大学、pp. 52-65 に図版や内容の一部を基づく。

序論

釣りは、天の星座や日本神話を始めとする様々な神話が指し示すように太古の昔からの食料獲得手段であり、また太公望の例を出すまでもなく古来親しまれる遊戯でもあり、その道具である釣竿は庶民貴人の境無く身近な存在であった。一方で釣竿は大変な価値を持つとされる事もあり、例えば江戸期庄内藩など時代や場所によっては、釣竿は「名竿は名刀より得がたし」とされ、一族郎党の命運をも左右する大切な道具として取り扱われた例すらもある¹。

「民藝」運動の祖である柳宗悦はその著書『手仕事の日本』において、釣竿については埼玉県の川口竿を例示して「川口では釣竿を作ります。おそらく仕事が栄えている点では日本一ではないでしょうか。そのあるものは念入の作で、日本の手技に最も適した品ともいえましょう。もとより竹細工であります」と述べているように²、釣竿は生活用品である「民具」でありながらも、その技術也仕上がりの美しさが評価されている。

前述の様に釣竿は漁具としては生活と趣味との間に立つ存在であり、高級品としての扱いも受ける場面もある。「民具」あるいは「民藝」というと、敢えて意図的に高級品を除いた、柳のいうところの「下手物（げてももの）」を指さす事が一般的であろう。こうした観点からは高級品を含む釣竿に関して、これが「民藝」といえるのか、という疑問も生まれる。しかし、そもそもそうした、高級品は民藝の範囲から外さなければいけない、ということ自体を問い直す必要があると思われる。柳がその著書『民藝とは何か』で記すところを要約すれば「もとより直観の前には上下の差別は」無く、「上等品の中、美しい作を取り上げて」みたときに「実にそれ等の美しいものに限って、その所産心が全く民藝品と同じ基礎に立っているのを発見」しなければならず、あくまでも高級品やその反対の安価な物という思い込みを外して見る事が大切である³。「民衆の器物が、受くべき価値以下に忘れられているのに対し、富貴な品は、受くべき価値以上に認められているのです。これは修正されねばならぬというのが、私の主張」であり、あくまでも値段に影響されずに人の生活に密着した道具の価値を冷静に見つめる技術こそが、まさに「民藝」の一つの有り様を指し示す、ということになるろう。

柳の提唱する「民藝」概念の中で、「用の美」という実作品の価値のありかたは重要だ。「用

の美」について考えるとき、柳がその著書『民藝四十年』中でふれた「工芸の美」について考える必要があるだろう⁴。筆者の読解では、柳の語る「工芸の美」とは、「社会美」であり「多の美」であり「器の美」であり、また「器の美」は「信用の美」である。つまりは、そうした「工芸の美」から点じた「用の美」とは、器の様に実用において常に使われ、日常の年月や時に手荒な扱いによって芸術のレベルにまで選別され磨き込まれた機能美の高さや使いやすさを重要な要素としてこの語を指し示している、と捉えられる。あるいはここでは使った時の美、手に触れた時の美、側に置いた時の美、を指し示していると言い換えてもいいだろう。いずれにしても

「美」という言葉を単に「見た目が美しいもの」と指し示すのではなく「機能的なもの」「使いやすいもの」など、見た目のみに囚われずに「感動を与えるもの／現象」についての形容詞として使っているものと捉えるのが自然だ。

そこで、本論文においては、釣竿の中にあるそうした「用の美」、即ち見た目のみでない、例えば「釣り味」や「魚を釣り上げた時の振動の善し悪し」といった「竿から伝えられる感動」に着目し、その歴史的経緯を経て、明治以降の六角竿、その興隆と衰退そして将来的な可能性について調査検証した。また、同時にそうした「用の美」に主眼を置いた釣竿の制作も行っており、理論と実制作両面からのテーマ探究を目指した。

本論文の第1章では「遊び仕事としての伝統釣法「テンカラ」ーその伝承と道具に関する研究及び制作ー」として日本古来の和竿とその製法のうち、筆者に縁の深い信州テンカラ釣りの竿について、「遊び仕事」という仕事と遊びの中間的な食糧確保手段としての釣り及びその道具という「用」の視点から、調査報告を行った。

続く第2章では「近代日本における釣竿と生活ー敗戦などによる変化と、遊び仕事としての釣りー」として日本を中心に戦前戦後～昭和経済成長期にかけての釣りとその道具の歴史について、和竿洋竿を問わない「レジャー」という戦後の新しい「用」の視点から、特に戦後期～高度経済成長期直前に活躍したメーカーや釣場に対する調査とその報告を行った。

第3章においては「和製六角竿から見た20世紀日本における釣竿と生活」として、釣竿のレジャーの「用」の中でも、特に割り竹製の貼り付け竿である「六角竿」について、その日本への

導入とブームの発生、その衰退についての調査報告を行った。

これらを総じて結論において、本論文のタイトルでもある「釣竿に見る「用の美」——明治以降の六角竿、その興隆と衰退そして可能性——」について総合的な考察を行った。

各章はいずれも事前に学会や大学紀要などで発表したものである。その後の研究で判明した事象や重複のある記述などについては最低限の加筆修正を行っている。

本論文により、昭和期の日本の釣り文化を解き明かし、特に昭和初期～高度経済成長直前期にかけての伝統的な釣り竿の製法や文化と、そこから転じてグラスロッドなどの化学材料竿に変化するまでの間大きく花開き、第二次世界大戦の影響で揺らぎ、そして占領軍やその後の駐留米軍向けのお土産物として大ブームになった後に、日本の再成長とともに消えていった竹製六角竿の文化と製法、そしてその「実用性」⇔「用の美」について改めて光を当てた。また、ただ文献や取材研究を行うのみでなく、それらの研究成果により現代でも実用的な「現代の民具」として通用する高性能な六角竿実制作を通じて得た知見を加えることにより総合的な研究を目指した。

第1章 遊び仕事としての伝統釣法「テンカラ」ーその伝承と道具に関する研究及び制作ー¹

はじめに

余暇などを生かした伝統文化の継承や日本旧来の食生活などを重視する生活の形成は、現代社会を生きる者にとって、価値のある課題だ。そこで近現代の釣竿制作手法である六角竿の研究に先立ち、長野県中部信州木曽地方での伝統釣法であるテンカラ釣りに着目し、それを継承・教育する道具の在り方をその代表例として探り、旧来の江戸和竿手法やその他伝統手法でのテンカラ釣り用の和竿制作手法の調査を行った。

現代の問題として、民間行事や地域生活習慣などの伝統文化伝承の断絶の進行がある。そうした伝統文化に関わる製作者側の意識の変化が断絶の原因と考えられる。「道具と風習との関係がなくなったこと」に危機感を持たず、道具作りそのものの継続にこだわるのが原因で、道具自体の生産活動の元文化からの独立が起き、文化の断絶が発生したのではないか。また、こうした文化の消失を道具や行事の商品化による「文化の消費」の問題もある。

道具を経ない伝統文化単独での維持は困難であり、しかし、伝統道具単独をつくるだけでは売り上げ重視の商品化が進んで肝心の伝統文化自体を見失いやすい。そこで、道具を作り出し売り出す側が道具に文化伝承の付加価値を付け、文化維持の視点を持ち、伝承に用いる道具の授受による非言語的、あるいは言語超越的な伝承保存や文化の継承の強化を製品製作に絡めて行うことが、効果的に伝統文化継続に役立つのでは無いかと考えられる。

テンカラ釣りを振り返ったとき、実際には木曽川の漁獲量は乏しく、この釣法は催事的に客人を歓迎し、あるいは何かしらの出来事で鮮魚を必要とした場合に行われたと考えられる。これは日常の職業的生業とは別に、催事的／祭事的場面で伝統的・副業的に行われる生活仕事「マイナー・サブシステム」即ち「遊び仕事」のようなものだったのではないかと推測され、この推測を元に遊び仕事としてのテンカラ釣具の制作及び試用、修理を行った。

制作に当たっては、江戸和竿手法の伝統的手法からスタートし、そこから、現代材料や現代手法を使うなどして、後世に残り得る「自らテンカラ釣りがしたくなる」道具作りを目指した。また、この制作物を自ら試用する他、タケフナイフビレッジの和式ナイフ鍛冶師複数名にも実際に試用して頂き、実釣でも木曽テンカラ釣りの釣法を伝承する成果を得た。

第1節 遊び仕事とテンカラ釣り

第1小節 文化の消費による伝承文化の断絶の危機とその地域継承の問題

本研究の背景となる現代の問題として、民間行事や地域生活習慣などの伝統文化伝承の断絶がある。今までは当たり前のよう存在し、特に手段を講じることなく継続すると思われてきた各地域独自に特徴のある文化だが、残念ながら現代においてはそうした地域文化の継続自体が困難になりつつある。岡山の郷土玩具を調査していた岡本憲幸はこの継続の困難を「過去にも政治的・社会的文脈の中で再構築されて」きた、とそもそも過去の伝承が断絶再構築されたものであることを指摘し、そうした伝統文化に関わる民具製作者側の意識の変化を「(道具と)風習との関係がなくなったこと」に危機感を持たず、道具作りそのものの継続にこだわることを「継承(そのものに)価値を見出す、新たに創出された『伝統』である」として、その道具自体の生産活動の独立を、断絶の過程として示した²。

そうした断絶変化の原因の一つとして、金谷美和はその研究で「文化の消費」を挙げた。金谷はそもそもこうした文化の消費は柳宗悦らの民藝運動に端を発しているとし「民芸運動は、『展示』することで、『民芸』という文化の消費形態をとった」と指摘した³。

また本研究に関する例では、本研究にアドバイスをを行った大川清一(清光)和竿師は本研究の制作指導の際、何度も繰り返し「今の若い和竿師は伝統工芸品を作って売ることばかりで実際に釣りをしないから、しなりの無く重い、使えない竿ばかり作っている。ちゃんと魚釣りに使える竿を作らなければいずれ誰も和竿など使わなくなる」と指摘し、和

竿による日本の釣り文化継続への危機感をあらわにしている。

昨今、伝統工芸士などの行政支援制度が盛んであるが、これらもあくまでもこうした道具作りの「生業」を支える為の商業上のものであり、それらの道具を使った地域の文化そのものの継承には残念ながら関与しない。そのことは、福祉雑誌などで地域を越えた広域な就職支援の一環として「目指せ！伝統工芸士」等の就業特集を組んでいることから鮮明に窺える⁴。あくまでも職業、生業としての伝統工芸であり、土産物的な商品製作販売に終始し、伝統工芸品を使う元々の文化の伝承そのものには全く意識が向いていない。

しかし本来、伝統文化に関する道具作りとはあくまでも地域伝統文化を支え、そこで使われるための道具でなければ、単なる変わった土産物に過ぎず、一時的な飾り物としてやがて消失する運命にある。講習会的に文化継承を行ったとしても、それもまた観光客向けの観光ワークショップとして消化されてしまい、地域文化そのものの継承、そして、伝統工芸品の末永い継承に繋がるかは甚だ疑問がある。

そうした、単に伝統の見た目通りに道具を生産し、あるいは講習会のようなものをたまに開く程度で文化伝承があったとするのでは無く、道具の作り手側に、道具そのものやその組み合わせに伝統文化や世界観を伝える為の意図を含めることが必要ではないだろうか。

本章においては、こうした商業的に道具作りが注目されていて、なおかつその道具を使った文化継承そのものが軽視されてきた地域文化の一例として筆者の出身地域である木曽谷地域につたわる「テンカラ釣り」に着目した。

またこの「テンカラ釣り」を支える道具を作成し、使う事によってテンカラ釣りの伝統そのものや、テンカラ釣りの世界観を自然伝承する道具の可能性を探ってみた。

第2小節 テンカラ釣りとは、その実態

テンカラ釣りとは、エッセイスト山本素石の『釣りとは風土』によれば長野県木曽谷地域に伝わる伝統釣法であり⁵、竿と、道糸、テグス、毛だけで溪流魚を釣り上げる、極め

てシンプルな釣法だ。近辺の遺跡からも同様の浮子のないシンプルな仕掛が出土しているところから⁶、古代の釣りが毛鉤かエサ釣りかは不明にせよ、このシンプルな釣り方自体は古代から木曽谷地域で行われてきた釣りである可能性が高い。

パタゴニア社の『シンプル・フライフィッシング』等の紹介で、今や世界的に有名になったこのテンカラ釣りだが⁷、反面、その釣りは日本国内ではメジャーとは言えず、有料釣り場においてもテンカラ釣りが出来る釣り場はまだまだ十数カ所程度なのが現状だ⁸。

前述の山本素石や地元木曽福島の杉本英樹らは、このテンカラ釣りを木曽の伝統的専門漁業者の職業的釣法である、としてその著作物に紹介している⁹。

しかし、実際に訪れてみると、木曽川上流の実情は、増水時以外には川幅数メートル程度の浅瀬なら歩いて渡れる程度の溪流でしかなく、その水産資源は見るからに乏しい（写真 1）。支流など、晴天時平水時にはいずれも勢いを付けて足を濡らさずに飛び越えられる程度の川幅でしかない。とてもではないが専門漁師が生活できるだけの漁獲量は存在していないようにしか見えない。事実、水産資源の大半を放流に頼る現在において、支流を含めた木曽川上流全域を管轄する木曽川漁業協同組合の全放流量は、令和 3 年度放流実績で、成魚：イワナ 3,260 kg・タナビラ（アマゴ） 3,555 kg（漁魚種合わせて 2 万匹前後）、稚魚：イワナ 35,000 尾・タナビラ（アマゴ） 191,000 尾程度でしかなく¹⁰、4～6%前後という溪流域の稚魚生残率を考えると稚魚の生存数は 1 万匹前後を想定していると考えられ、即ち総放流量は 3 万匹と推定される¹¹。こうした放流数に支えられて春先の木曽川は非常に漁業資源豊かな釣りやすい川となるが、現代はつり人の人数が非常に多く、秋口にはこれらの魚はほぼ釣り尽くされてしまう。そこから考えると、支流も含めた木曽川の漁業資源保有可能総量は現実的なラインで 3 万匹前後に過ぎないと推察される。一方、近代開発が始まる直前、昭和 30 年（1955）時点での木曽郡の人口は 66,380 人、平成 26 年（2014）で 29,021 人であり¹²、テンカラ釣りが紹介されはじめたこの時期において、昭和 30 年（1955）で一人あたり二年に一匹、過疎の進んだ現代においても一年に一匹、地元の間人が地域に放流された溪流魚を食べると全て消費する程度に資源が枯渇

する計算となる。放流量は、高度経済成長期以来長年流域資源を計算してその資源量を決定されているため、この数量が地域の水域で抱えられる水産資源量上限に限りなく近い数字だと考えて良いだろう。

江戸期でも、この地域は関所のある木曾福島を中心として街道街として栄えた。例えば、木曾川最上流の藪原宿は江戸中期で 1,493 人の人口であったという^{13,14}。2019 年現在で同地域の人口は 2,721 人なので¹⁵、現在の半分程度の人口であった。ここから、全期を通じて変動こそあれ、常に木曾上流域全体の街道筋で活発な旅行者を除いても 1 万 5000 万人程度の人口があったと類推される。この為、この漁獲量で地域全体の魚食量を支えるのは大変に困難だと思われ、山本や杉本らが紹介した「専門の職業的漁師」という存在自体が疑問に思える。実際、流域人口が 3 万人程度と、最盛期より半減した現代においても、木曾川流域は釣り場ガイドでも「放流直後の 5 月が狙い目の釣り場」とされていて¹⁶、流域全体の漁業資源量が地域人口と同じ 3 万匹の放流と非職業的遊漁とで釣り合う程度でしかないことが推測される。また、これは経験論に過ぎない話だが、筆者の父方は当該木曾日義地域出身であり、その幼少時、昭和 50 年代（1975～）までの記憶においても、木曾川での釣りは日常食ではなく、あくまでも客を特別にもてなすための料理である、という扱いであった点も合わせて指摘したい。

厳しい山間部であり、また木曾福島に関所を置く街道街中心の経済でもある木曾谷地域において、生活のための水産食料は基本的に街道を通じて運ばれるものであり、テンカラ釣りはあくまでも副業的な漁業であったのでは無いかと類推される。もちろん完全な遊びというわけではなく、前述の山本らが言うように職業的漁師としての活動もあったものと考えられるが、あくまでもそれは本業の合間に行うものだったのではなかろうか。

第 3 小節 遊び仕事としてのテンカラ釣りと、その伝承

事実、このテンカラ釣りは業務用に体系化され広く流布された釣法ではなく、杉本もその著作において昭和 30 年（1955）以前に「土地の古老より習った」と個人間での釣法の

授受での伝承である事を明記している¹⁷。地域の生活インフラを支える職業的漁法であればこうした個人間での技能授受をもって伝承を行うのは考えにくいことであり、この点からも、このテンカラ釣りはあくまでも本業の合間に行われていた釣法なのではないかという推測ができる。

こうした、本業の合間に行う催事的／祭事的生活仕事は他所にも例がある。三橋俊雄らはこうした本業の合間の催事的／祭事的生活仕事を「遊び仕事」「マイナー・サブシステム」と命名した¹⁸。

この「遊び仕事」の概念を提唱する一般社団法人農山漁村文化協会では、一例として、福島県郡山市石筵地区の「堰上げ」における、イワナのつかみ取りを挙げている¹⁹。地域住民が年に1度、水を枯らした用水路掃除において、一斉にイワナを手で捕まえ、それをごちそうとしてこの「堰上げ」で地域を訪れた来客と共に食する文化が紹介されている。木曽川流域のテンカラ釣りも、こうした、平和な来客時の催事として、つまり遊び仕事としての漁業であったのではなかろうか。

このことから、本論においては、テンカラ釣りを自然に継承・教育する道具を探究することは、こうした「遊び仕事」「マイナー・サブシステム」としての世界観を持ち、食と遊びを中心とした命に関わる継承・教育を探究することの一環である、と考える。

第4小節 民具としての釣具

さて、テンカラ釣りの主役となる道具は、もちろん釣竿だ。こうした釣具は言うまでもなく民間に広く使われてきた民具であり、生活に合わせ、様々なデザインを試みられてきた。例えば、江戸和竿手法での手の凝った釣竿などには「民藝」の領域を感じざるを得ない。

しかしながら、「民藝」系の博物館や雑誌では、なかなかこうした釣具を見ることはない。柳の文献をあたっても、序論に書いた『手仕事の日本』における川口竿の1例が見当たらないのみである。これは、美術手帳の100年後の民藝特集における沢田の指摘によると、

柳の美と調和の世界へ歩んだ柳の思想と行動の一貫性は沢田が「民藝館に刃物や武具を一切集めない」と指摘した平和主義に明白に表れている²⁰、事実収蔵刃物類はアイヌの短刀（マキリ）等少数に限られており²¹、つまりは人に限らず命を奪う道具を避ける、という平和主義をもっている事に起因している様子だ。民藝の誕生した時代背景として大正末期～昭和初期という時代背景を考えれば、この平和主義が軍部の暴走や国家の拡大傾向を案じたものであることが類推され、事実、柳宗悦らが作ったアジア初の民衆文化博物館は、旧来からの伝統的日本国内ではなく、当時併合されて日本の一部となったばかりの現ソウル、当時の京城の「朝鮮民族美術館」であったところからもこの平和を希求する意図は汲み取れる²²。

かように、柳宗悦らが民藝を唱えたのも、大正から昭和に移る激動期であり、第一次、第二次世界大戦などの大きな戦争の繰り返された動乱期であった。振り返って今の時代を見ると、様々な人種差別発言がネット社会に溢れ、それを元に行動する各国主導者が現れるなど、同様に平和の危ぶまれる状況である。

こうした社会的類似点のある現代にこそ、新しい平和を訴求する民具制作が必要なのではないだろうか。そこで、本研究においては、敢えて柳宗悦らが民藝からそぎ落とした「命を頂く」部分を意識して、現代民具としての釣竿を制作した²³。

第5小節 道具による生活の形勢と伝承

敢えて柳宗悦らが避けた「命を頂く」視点を本研究に組み込んだのには明確な生活密着の意図がある。従来 of 民藝の枠組みを出た新たな民具の在り方を考えると、当然ながら道具や身の回りの物品は生活を形作り、それは文化や人間の生き方そのものを形作る、という点に注目せざるを得ない。奇しくも柳宗悦の民現運動と同時期に、同じ枢軸国である欧州ドイツにおいて、藝術学校バウハウスを中心としたデザイン運動が盛んになったのは決して偶然ではないだろう²⁴。

しかし、民藝運動やバウハウスの時代を振り返るに、日独両国の藝術運動は政治的には

実を結ばず、両国は第二次世界大戦へと突入し、両国の文化のみならず、世界の文化をも大きく毀損する結果となった。これは、道具による豊かで文化重視の生き方の形成が、地に足が付いていなかった、少なくともそうした寄与が力及ばなかったことを指し示す。

無論言うまでも無く、人はその食性上血を流して何者かを殺傷せずには生きられない。親鸞が語ったように「仏は悪人こそを救い」²⁵、ネラン神父がバー・エポペ設立時に語ったように「神は最も汚れたところに居る」²⁶。そうした民衆の生活を見捨て、敢えて生命を傷つける可能性のある刃物を見捨てたことは、民衆を芸術文化から遠退けてはいなかっただろうか。

特に、魚を殺生することは、即ち日常の食事であり、それは民衆の生活そのものと言って良いだろう。現代でも、昨今各地の小学校でニジマスを用いて行う「命を頂く教育」が子供達の情操教育に役立ち、命を大切にする事を伝える教育として大いに役立っていることは大変に広く知られていることだ^{27, 28}。

地に足が付いた道具のデザインを考えたとき、生活の中でも、命を頂くという行為に関する部分を書かすことは出来ないだろう。

上記から、前述の長野県木曽谷地域に伝わる伝統釣法テンカラ釣りを選択し、その伝承をもって、生活を形作る道具の成立と伝承を目指した。

テンカラ釣りを、命を大切に、文化を希求する「遊び仕事」として、現代やその先に伝える為の未来の道具として関連釣具の制作を行い、その釣具が伝統文化や日本旧来の食べかたなどを重視する生活の形成に関与し得ることとして捉え直して後述の制作に当たった。

第2節 和竿制作手法とテンカラ竿

第1小節 和竿の種類と基本的な手法の差異

研究制作を行うテンカラ釣竿には、日本古来の竿である「和竿」の手法での制作を選択した。

和竿とは、主に竹で作る日本古来の竿のことを指し、多くは漆、絹糸で補強をして作られる。代表的な和竿は地域ごとにいくつか残存しているが、この内、仙台竿、江戸和竿、京竿、庄内竿等が特徴的な作り方の差異で知られる²⁹。

仙台竿と江戸和竿は、共に江戸時代から伝わる別の竹を継いで漆と絹糸で補強してゆく制作手法の和竿だが、仙台竿が竹の節を完全に取り去ってから火入れ加工を開始し、切り組みを漆補強する前に厳密に行って竹自体の段階で綿密にバランスを取り、糸巻き前に全体に麦漆で厚くコーティングした人工的な見た目に仕上げるのに対し、江戸和竿は竹の節をなるべく残し、切り組みは下巻きと瀬締めの後で行うため継ぎの段差がある程度残り、仕上げも拭き漆手法でなるべく薄く、あたかも継ぎを新しい節とする自然な竹に見えるように仕上げるのが特徴だ。

これに対し、京都に伝わる京竿は、製法こそ仙台竿に類似するものの、その人造的な工作を更に一步推し進めて、現代のグラスファイバーのような先端から引き出す振り出し竿や、向きを変えて一本仕舞いする入れ子竿のような、凝った工作の竿を作るのが特徴的である。この京竿の工作の複雑さには西洋文化の影響が見られるが、京入れ子竿の存在自体は江戸時代から確認されている。

庄内竿は上記の全ての和竿とは異なり、一本の延べ竿だった頃の空気を非常に強く残している手法と言える。本来切らずにそのまま使い、皮むきも漆塗りも糸巻もせず、ただ火と撓め棒と磨き布で加工するのが庄内竿の特徴だ。現代において運搬の都合がある場合には、一本の竹を切ってそれを真鍮の中子で継ぐ手法をとる。夏になるとホームセンターなどに出回る児童用の安価な竹の釣竿などもこの庄内竿同様の金属中子での一本継ぎ手法をとることが多い。この子供の玩具にも似た原始性、素材性が、庄内竿最大の特徴といえる

³⁰。

この他にも、郡上竿、横浜竿、川口竿、甲州竿などが知られるが、これらは全て江戸和竿の納入元や販売先などが主に明治期以降に独自に江戸和竿を真似て作り上げた竿である可能性が高く、江戸和竿の亜種と言える。特徴的には、郡上竿は厳しい地形で使用する

ために穂先を持ち手部分に仕舞うことを嫌って中抜きしないため全体重量が重いという特徴がある。横浜竿は船竿なので鯨を穂先に使う特徴があるが、基本的には地域の近い江戸和竿そのものであり、替え穂先と考えると現代竿に直結する面白さがある。川口竿は戦後に盛り上がった比較的あたらしい竿文化であり、高度経済成長で高値になってしまった江戸和竿に代わる安価で庶民が使える江戸和竿を目指したもののなので漆塗りが簡略化されていて絹糸も太く巻きが荒いという特徴がある。甲州竿はこれも江戸和竿の亜種であるが、郡上竿同様に中抜きを嫌い、その代わり、漆や糸巻きの使用量を減らしてやや軽く作る、といった特徴がある³¹。

今回は、木曽地方に伝わるテンカラ釣り向けの道具ということで、現地の釣竿を調べ、木曽の地元で使われていた竿に近いと思われる、江戸和竿手法による制作を選択した。

釣竿は水場で使う消耗品で、戦後、竹竿のライバルたるグラスファイバー製の竿が勃興するまでは修理を行わずに使い捨てに使用されていた経緯もあり現存数が少ない。

そのため長野県木曽郡現地での江戸期の実物の現存例は多くは無いが、例えば浦島太郎の竿であるという伝承のある木曽川寝覚の床「臨川寺」の宝物館の和竿がある³²。これは浦島太郎伝承に合わせて3本の竿が後世に根元で接着加工されているものの、元は明らかに布袋竹に糸巻きを下地し、上に漆を塗った江戸和竿手法での竿であり、江戸和竿手法の竿が江戸期から当地で使われていた可能性を強く示唆している。また、近隣の甲州和竿も江戸和竿に酷似した制作手法での和竿であり、江戸和竿手法でのテンカラ竿作りはあながち間違っただけのものでは無いだろう。

江戸和竿による制作手法は、江戸和竿手法の元祖である東作の流れを汲む東光竿師最後の弟子である大川清一（清光）和竿師に学び、和竿手法での竿の制作に取り組んだ³³。

第2小節 テンカラ釣竿の制作過程

前述のように、テンカラ釣りにテンカラ竿は欠かせない。このテンカラ竿は江戸和竿の手法での制作を試みた。埼玉県戸田市に工房と和竿教室のある大川清一（清光）和竿師の

下、2018 年 7 月より指導を受けた。大川和竿師は「東作」の高弟「東光」和竿師の最後の弟子であり、本業は歯科技工士ながら歯科機材と工房を使って和竿制作と和竿教室を副業としている。その大川和竿師から「東光」系統の和竿制作手法を学び、その手法での制作を行った。

制作は全て和竹と漆、絹糸をもって行い、最終的にはそうした伝統材料の制作物としたが、今回は前方研究的な試作ということで、穂先に関しては途中からカーボン穂先などの現代材料も積極的に利用を試みた試作も繰り返し行った。

江戸和竿の制作過程は『仙台市文化財調査報告書』にも紹介されているように、主に 8 段階に分類されることが多い。その工程は、1 伐り出し・晒し、2 切り組み、3 矯め・殺し、4 削り・巻き・瀬締め、5 継ぎ、6 調子、7 塗り、8 仕上げ、とされるが、江戸和竿手法での実作業とのずれを感じる。この流れを、図版を入れて実際の工程とともに紹介したい。

第3小節 江戸和竿手法によるテンカラ竿作りの実際

・工程1「伐り出し・晒し」(写真2)

2 年育成以上の竹を伐り出し、その中から優れたものを特に選んで 3 ヶ月ほど乾燥させ、軽く火で暖めて荒撓めをした後、また 3 ヶ月以上乾燥させる。虫害のある竹はこの段階で見た目と音で取り除く。虫害の音は夜、帰宅前に電気を消してから耳を澄ませて確認する。

・工程2「切り組み」(写真3)

晒して乾燥させた竹を選抜し、竿に必要な部分を切り出す。江戸和竿では一本の竹から切り出さず、それぞれの部位毎に最も適切な竹を、様々な竹の中から選んで切り出す。

・工程3「矯め・殺し」(写真4)

再びストーブであぶって火を入れ、撓め木を使って撓めを行う。冷めた後の戻りを計算

して必要よりも多く曲げるのがコツとされる。また同様に両端を熱し、殺し木に末端をはめて真円に寄せて殺す（丸める）。熱による空気の膨張で竹を膨らませて中央部分も丸くする。

・工程 4「削り・巻き・瀬締め」（写真 5, 6, 7, 8, 9）

先述の仙台市文化財調査報告書の江戸和竿解説部分など、多くの江戸和竿の解説ではこれを一つの工程としているが、実際に作業してみると、この工程が漆塗りと並んで和竿制作作業の大部分を占める作業であり、実際には 3 つの工程をばらばらに考える方が順当であるように思える。ここから、本報告書ではこの工程を詳細に紹介したい。

まず、節の芽の部分をヤスリで削り出す（写真 5）。

次いで、節を軽くヤスリで整え、全体を紙やすりで整え、最後に紙やすりの裏面で磨く（写真 6）。

さらに、埋め木やヤスリがけで、継ぎ部分の雌型の形状を丸くし最終段階まで整える（写真 7）。

整えた継ぎ口の雌型部分に絹糸を丁寧巻き上げる。この際、巻く糸が前の糸の下に半分潜り込むように巻くのが江戸和竿の軽さと丈夫さの秘密であり、最大の特徴である（写真 8）。

巻いた糸がほつれないうちに瀬締めを行う。瀬締め漆はゴミの多い低級な生漆だが非常に強力で、糸を強固に接着する。この瀬締めの際、ゴミを筆で継ぎ口に寄せながら塗るのがコツである（東光流では漆はチューブから少量ずつ出して使い、漆の濾し絞りはなるべく避ける。濾しによって空気が混ざるため必要以上に乾燥固化が早くなるのを嫌っている）。寄せたゴミは次回の塗りの前の紙やすりによる研ぎ出しで取り去る（写真 9）。

・工程 5「継ぎ」工程 6「調子」（写真 10, 11, 12）

瀬締めが固まり安定した段階で継ぎ口の中側と差し込み部分を削り出す。江戸和竿は内側を薄く削り込む為、強度に不足がある場合にはここでもう一段瀬締めをすることも多い。

調子を見ながら少しずつ竹の内側や差し込み側を削り上げる。また、穂先や補持ちの仕舞いを持ち手などに工作する場合にはこの段階で内側の節のさらいを行う。

先ほどの工程 4 とは逆に、先の仙台市教育委員会の調査などでは分けて考えられているこの 5, 6 の工程は、江戸和竿手法においては明らかに一つのまとまった工程である（写真 10）。

継ぎを進めつつ、工作、特に漆の浸透による変形とその戻りがある為 2 週以上時間を掛けて調子を取る。この段階で、テンカラ釣りの基本動作である「毛鉤の振り込み」をしやすいように、軽く、且つやや先調子に、しなやかに振り込める調子を意識して調整を念入りに行った。硬すぎる竿の場合には、軟調にしたい部分の節を抜くとその部分の軟らかさが増す。糸を巻いて瀬締め場所を増やすと弾力性が増す。また、仕上げの方法にもよるがこの段階で、拭き漆の第 1 回をしておくことが多い。これは、拭き漆での漆の染み込みで調子（竿の曲がり具合）が大きく変わってしまうためだ（写真 11）。

調子をとれたところで竿の格段に尾栓を作る。調子を取る前では胴の中に節を抜くためのキリやヤスリが入らなくなってしまうため、調子を取った後のこの段階で尾栓を付けることになる。尾栓は上から色漆で塗らない場合には複数の竹や木を組み合わせた飾り尾栓が多い（写真 12）。

・工程 7「塗り」8「仕上げ」（写真 13, 14, 15）

ここで、江戸和竿最終作業で、最も時間のかかる作業でもある漆塗りをおこなう。

前述の江戸和竿に関する仙台市教育委員会の報告書では「塗り」と「仕上げ」は別の工程とされているが、これも実作業の体感的には同じ作業区分けでいいだろう。和竿にはマスキングの概念が無い為「泥棒掃除」と呼ばれる漆の塗り端の形状をナイフで切って整える作業を随時入れながら、作業を行きつ戻りつしつつ、時期によっては実際にその竿で

釣って試し、都合十数回の塗りを重ねる何週間にもわたる作業になる。江戸和竿手法の特徴として、継ぎ口や飾り塗り以外の場所の竹本体の風合いを行かす部分の塗りは漆を塗りっぱなしにするのではなく、必ず塗ったら絹の布やストッキングなどで拭き取って「拭き漆」と呼ばれる状態に仕上げ、塗りが厚い部分では次の塗りの前に荒れを紙やすりで研ぎ出してからまた塗る。一見無駄な作業なようだが、この拭き漆と研ぎ出しによって、一見ただの枯れた竹のような風味に仕上げつつも、実際には漆がしっかり浸透した丈夫な竹竿として仕上がる。最後は生きた竹の葉のような「目（芽）」を削った芽の穴に書き込み、銘を入れる作業で終了となる（写真 13）。

つづいて「泥棒掃除」といわれる作業で、塗り端を切り整える。マスキング概念の無い和竿では重要な作業だ（写真 14）。

最後に、漆の研ぎ出しは丁寧に行い、竹の風味を残しつつ丈夫に仕上げる（写真 15）。

・完成（写真 16）

以上の工程を経て、本研究の江戸和竿手法によるテンカラ竿は制作された。

道具自体の構造として、テンカラ釣りにおける「毛鉤を振り込む」という動作を自然に行いやすい、軽さとしなやかさを重視した構造としたのはもちろん、見た目も緑の竹の若葉の目（芽）が江戸和竿らしい生きた竹を連想させる仕上がりになり、デザイン面からもこの道具が持つ、余暇を自然と一体となって過ごすという、背景文化を思わせる出来に仕上がった。

これにより、余暇などを生かしてこのテンカラ竿を使うことで、自然に遊び仕事としてのテンカラ釣りに触れられる筈である。

第 4 小節 和竿手法によるテンカラ竿の種類 ―印籠作りと並継ぎの比較、実釣、修理―

実際に複数の竿を制作したが、細かに作り方を変えたため、その使用感は様々であった。そうした使用感から、実際にテンカラ釣りを強く伝承し得るテンカラ竿を選別した。

まず、木曽地方におけるテンカラ釣り最大の特徴である、狭い急流の沢を登りながら、一日中繰り返す毛鉤の振り込みにより適した竿を選ぶこととした。その際には竿全体が軽く、また、竿の先3分の1ほどの位置に曲がりの中心が来る、やや先調子で柔軟性が高い竿を選抜した。通常のエサ釣りやコロガシ釣りでは、竿の中程で曲がる、硬めの胴調子の竿が重用される。しかし、テンカラ竿では簡単に曲がるほど柔軟性に富んだ先調子の竿が毛鉤を軽やかに振り込み続けるには大切であると考えられる。

作り方にも注意を払った。江戸和竿には、大きく分けて印籠作りと並継ぎの二つの継ぎ方がある。その両者の技法を含む複数の竿を実際に制作し、数ヶ月間の中期的日常使用の実釣と破損、修理を経て、どういった竿がよりテンカラ竿に相応しいかを考察してみたい。

まず、言うまでもなく、竿は繊維の束の弾力を持って力を分散させることで魚にかかる力を小さくし、粘り強くトルクを出す事で魚を疲れさせて釣り上げる道具だ。従って、その材料特性上、繊維の束が使用と共にやがて解れて行き、いずれ傷んで折れるのは必然である。

元々江戸期には消耗品として使い捨てられてきた和竿ではあるが、グラスファイバー製の竿の登場以降は、修理しつつ繰り返し使えることに再注目し、グラスファイバー製やその後のカーボンロッド製品に勝る特性としてきた。

従って釣竿は必然的に壊れるものであり、遊び仕事の余暇での生活の一部としての利用を考えれば、修復の可否や容易さも重要なポイントだ。その修復特性を確認するため、使用によって折れた竿とその修復の比較から、よりテンカラ竿に適切な竿を考察してみたい。

印籠作りとは、江戸住まいの武士、松本東作（あるいはその知人の利右衛門）が考案したとされている継ぎ方であり、一回り細い矢竹を継ぎ目に使う事で、竿全体に自然なテーパーのかかった形状を維持したまま継ぎ竿を作り上げる手法だ。この手法によって、複数の竹から作り上げるだけでなく、一本の竹を余すところなく使う事も出来るようになった（写真 17）。一方、並継ぎとは、印籠作り以前からある手法で、太さの異なる竹を継ぐた

め、一本の竹から材料を取る場合には最低でも2節半は間を飛ばして継ぐ必要があるため無駄が多く、見た目もどうしても継ぎ目に段差の出る手法だ。しかし、太さの異なる複数の種類の竹や竹以外の材料をも自然に継ぐことが出来るという特性もある為、現代においても主流の継ぎ方の一つである。ごく自然に鯨の髭や、現代ではカーボンロッドを継ぐことが出来るため、日常使いの竿に多用されている（写真18）。

日常使いをして実釣してみた結果、印籠作りの竿は、ナイロンの道糸を使っている分には何の問題も無かったが、馬の毛をより合わせた馬素によるキャスティング（毛鉤の振り込み動作）を行った際に、たった一度の使用で折れてしまった。これは、馬素は水に濡らして柔軟性を出してから使う使用方法であるため使用時の重量が重く、鞭のような動きで毛鉤を飛ばそうとする際の衝撃が思った以上に大きく竿の継ぎ目に集中したためと思われる（写真19、20）。

これに対して並継ぎの竿は2020年3月の完成から4ヶ月以上にわたって十数回の使用に耐え、40センチクラスの大物のニジマスも軽々と上げるほどに極めて順調であったが、同年7月末に雷雨の日に釣りに出かけたところ、穂先の根元の加工部分の漆を塗っていなかった部分に水が浸入し、そこから乾燥した竹が膨らみ、その膨張で、通常サイズの魚がかかっただけではぜるようにして折れてしまった（写真21）。

修理について見てみると、印籠作りの折損は、鉄芯が入っているため完全には折れきらず、折れた竿の先を失うことはなかった。修理方法としては、鉄芯のみを残してのこぎりで印籠芯を切除し、鉄芯をペンチで引き抜いた後、従来の印籠芯よりも一回り太いドリルで折損箇所を上下を加工して、一回り太い印籠芯に置き換えることで修理を行った（写真22）。

これに対して並継ぎの竿の折損は、完全に折れ飛んでしまい、魚が糸を持って川に走り出してしまったため、穂先と道糸の回収が大変であった。また、折れた根元は水を含んで完全に詰まってしまい、修理のために持ち帰ったときには、水分を含んだ楔のようになり、穂持ち（穂先を差し込む下の段の節）のつなぎ目を内圧で割り裂いてしまっていた。この

為、並継ぎ竿の修理としては、外から割り裂けた部分をのこぎりで切断し、飾り塗り部分を短くする形で継ぎ口のみを再度漆で補修して修理することとなった（写真 23）。また、穂先に関してはあり合わせの古い竹の穂先（初代東光制作）から削って作り直し、根元の加工部分までしっかりと漆を塗りなおした。

両竿共に、修理の際に、それまでの使用で気になった突起などの違和感や曲がり、尾栓の不具合、漆の剥がれなども修復したため、修理後は元々以上に快調に使う事が出来るようになった。

以上から、印籠作りの折損は非常に発生しやすいが、破損箇所が印籠芯に集中するため、修復が容易である事が多い、と言ってもいいのではなかろうか。

これに対して、並継ぎの折損は発生しにくい、発生時には本体自体の破損となるため、切り詰めによる恒久的な機能ダメージが残る事が多いのでは無いかと考えられる。

この結果から考えるに、周囲に容易に修理が出来る環境がある場合や「一生もの」の大切な道具として修理を前提にしている場合には印籠作り、壊れにくい日常使いを前提とした場合には並継ぎが選択されるべきだ。漆工による和竿修復は材料や道具自体揃えにくいので、本論のテーマとなるような遊び仕事を意識したテンカラ竿をしつらえる際には、一般的には江戸和竿手法による、軟らか目の先調子の並継ぎ竿を選択すべきだろう。

第3節 テンカラ竿試作の成果と、タケフナイフビレッジでの文化伝播

第1小節 試作の成果

本試作の大きな成果として、本テンカラ竿の創出によってテンカラ釣りの意味や在り方を見直し、そのエッセンスを抽出できたのではないかと考える。

道具作りの工夫によってテンカラ釣りの最小限を道具自体が伝えるという考え方は、テンカラ釣りという文化活動を総体的且つ参加的に分析することとなり、この試みは概ね成功したのではないだろうか。また、実際の釣り場の漁獲量の推測というフィルタリングによって、テンカラ釣りという平和的な釣り文化の本質を再定義出来たのも大きな発見だ。

副次的効果として、道具の形状のみならず、その歴史的経緯やそれが使われるシチュエーションを文献と試作の両面から検証出来た事も大きな成果だ。特に、第1節で示したように遊び仕事、マイナー・サブシステムとしてのテンカラ釣りの再発見はこの検証による成果であろう。

いずれにしても、ここまでの研究で、釣具による釣法の伝承というテーマの重要性について大きく踏み込めたのではないだろうか。今回試みた人と人の直接伝授に頼らない、道具を介しての技能文化・地域文化の伝授は、たとえ地域世代の断絶や災害による環境の変化などで地域文化が途絶えたとしても、使用されたその道具さえ残っていれば元の文化が復活する可能性がある、という意味合いがある。これは、急速な人口激減を迎える中、過去の歴史を現代的な美しい思想に改編させずに平和文化を発展させ維持伝承すること、即ち、吉田大作が京都伝統文化イノベーション研究センター報告書で語ったように、伝統文化にイノベーションを起こし次の世代へ継承することが喫緊の課題である我が国日本にとって、非常に重要なことではないかと考える³⁴。

第2小節 タケフナイフビレッジ鍛冶師のテンカラ釣り技法の変化

また、道具による文化伝承の一例として、本研究におけるナイフ部分の指導を受ける際に、タケフナイフビレッジ協同組合の山本直、鳩野憲志朗両鍛冶師に制作中の和竿や毛鉤を見せたところ、本研究の試作のいくつかを欲しいと依頼されたことが挙げられる。

比較的大物を釣ることの多い山本鍛冶師には並継ぎの軽量な長尺テンカラ竿を、若く、溪流に踏み入ることの多い鳩野鍛冶師には印籠作りの極端に短いテンカラ竿を制作した(写真 24, 25)。

これは見方を変えてみると、道具を通じて特に言葉による伝授を経ることなく、今までは重めの毛鉤竿をエサ釣りの少ない回数で振っていた越前武生地域の人々に、軽い竿を長時間繰り返し手早く振り続けるスタイルの木曾テンカラ釣り手法が道具を介してごく自然に伝承されたわけであり、このように、制作研究途中でありながら、既に道具による自

然伝承を成し得ているのが、今回道具そのものに文化伝承の役割を担わせる事を試みた、非常に大きな成果であるといえる。

ここから、このテンカラ竿の譲渡を決めた2名の鍛冶師に「竿を軽く振ってもらった時の感想」、また「和竿の内の一本を貰っても良いと思った理由」「竿をさわってみてテンカラ釣りへの興味や理解が深まったか」を中心にテンカラ釣りの自然伝授についての質問をした。

浅井打刃物の後継者であり浅井丸勝の銘を受け継いだ山本打刃物の親方、山本直鍛冶師は竿を軽く振ってもらった時の感想として下記のように述べた。

「今まで使った、既製品や、改造した毛針竿を、使って、自分自身が良いと思う毛針竿を振り比べて感じだと、穂先が、カーボンなので、先重りが竹竿にしては、無いので、とても良い感じです。節を抜いているので、西洋式毛針竿の六角バンブーロッドなどと比べても全体総重量は軽くて良い」（山本直鍛冶師）

このように、山本直鍛冶師は、同氏が得意な西洋式のフライフィッシングロッドと比較しての感想を述べている。また、和竿の内の一本を欲しいと思った理由として、従来同氏が使っていた郡上竿が中抜きしていないために非常に重く、一日中は振り続けられないのに対し、今回のテンカラ竿は非常に軽く仕上げてあることを指し下記のように述べた。

「今回、手塚氏の製作した竹のテンカラ竿は、今私が求める竹のテンカラ竿の全ての条件を全てクリアする竹竿なので、是非とも使いたいですね」と述べている。竿をさわってみてテンカラ釣りへの興味や理解が深まったか、という質問に対しては「穂先をカーボンにする事により、竿を持った時の持ち重りが減り、同じ重さでも竿の重心が竿尻にいくので、軽くなる！これは、一日中振り続けるテンカラ竿にとってとても重要な要素です！」（山本直鍛冶師）

と、以上のように、山本鍛冶師には竿を欲しくなった理由である軽さと合わせ、それによるテンカラ釣りの手法そのものの変化をお話し頂いた。また、今回のカーボンを使った工夫にも大いに賛同をして頂けた。

加茂刃物製作所所属の鳩野憲志朗鍛冶師は、竿を軽く振ってもらった時の感想として下記のように述べた。

「軽い。(鳩野鍛冶師が元から持っている) 郡上竿は中抜きがしていないため重い」
(鳩野鍛冶師)

ここからは、重量の軽さが高評価に繋がったことがわかる。

また、和竿の内の一本を受け取った理由として下記のように述べた。

「しっかりとした和竿を使ってみたいため。正直、郡上竿は重くて一日振れない。あと作りがそんなに良くないからか、実釣していて穂先が飛んでいくことがあった。現在所持している竿が溪流で使用する時に長いと思うことがあるため短い竿が欲しかった」(鳩野鍛冶師)

と、ここでもやはり重量を気にした意見を述べている。

竿をさわってみてテンカラ釣りへの興味や理解が深まったかという質問に対しての回答は下記であった。

「自分の所持しているテンカラの和竿と比べて全く違う。ということは理解できた。しかし実際に溪流で使って。魚を釣り上げなければ感触はわからないため、興味・理解は本当の意味で深められない」(鳩野鍛冶師)

と、返答を保留した。

更に、鳩野鍛冶師は従来の和竿に対して追加意見も下さった。

「私たち刃物職人の作った包丁は値段が多少高いが、量産品より明らかに切れ味という点で勝っており実用性が高い。故に刃物職人はこれから先、数年は大丈夫と思っている。しかし和竿（郡上竿）は（本研究の竿に比べて）どうだろう、操作性（しなり・重量・仕舞寸法）メンテナンス性と実用性を考えると量産品の方が良いと考えている。コレクションとして話のネタとして持っている面白いけど、積極的に購入して使っていこうとは思わない。（郡上）和竿職人さんと話すのは面白かったが、商売としては大変だろうなと思った。むしろ和竿をつかったからこそ、量産品を越える実用性、もしくは釣り味の良い竿はあるのか？（現代竿の方が実用性に優れるのでは？）と感じている」（鳩野鍛冶師）

と、鳩野鍛冶師は、市販の和竿の実用性やその商売としての存続性に疑問を呈している。鳩野鍛冶師は鍛冶師の前職が修士免許を持つ元教員であり、伝統の伝授とその継続に対する明確な問題意識のある回答であった。この問題意識はまさにテンカラ竿制作のきっかけとなった「失われつつあるテンカラ釣りの道具での伝承保存」に生業としての道具職人側からアプローチする意見であり、実際にその道具を使う文化の継承を重視して、伝統材料よりもカーボン竿素材やステンレスナイフ素材を積極的に取り入れた本論と見解を共にしている。

伝統工芸士でもある両鍛冶師の意見は、もの作りのプロとしての意見であり、このテンカラ竿が日本の伝統的な釣法を扱う道具として十分な水準に達していることを証明していると言っていいたいだろう。また、世界観の伝達、伝承という点でも、それまで鍛冶師二人が持っていた美しさ優先の硬くて重い郡上竿と比較して、木曽谷地域でのテンカラ釣りに根

ざしたこの軽くて軟らかいテンカラ竿が、従来所有の郡上竿とは明らかに違う釣りの方法を実現出来る竿であるという意図が伝わっている点に注目したい。

小結

以上から本章の結論を述べたい。

江戸和竿手法にて、信州木曽地方の、軽く、柔軟性に富んだ先調子の竿を意識して制作された本テンカラ竿は、前述の溪流での日常使いの他、都会の溪流とも言える埼玉県立川越水上公園における冬季プールフィッシング実釣の結果においても成果を上げた。本研究の結果制作されたテンカラ竿は、素晴らしく便利で使いやすい完結したテンカラ釣り道具であり、そこから、道具そのものからの文化伝承が期待される。前述のタケフナイフビレッジの鍛冶師二名の意見と合わせても、本研究で制作した江戸和竿手法によるテンカラ竿という道具からのテンカラ文化の伝承やその世界観の伝達は極めて順調であると思われる。

特に、現代においては市民プールを冬のマス釣り場として利用したプールフィッシングが盛んだ。そうした場面において、このテンカラ竿があれば、自然に、必要なだけ釣って食べるテンカラ釣りの文化が道具から自然に伝承され、使用者がその技術を身に付け、引いては、来客やバーベキューなどのちょっとした折りに、魚を釣って持って帰る、一種の催事的／祭事的な食習慣を身につける可能性が高い。

この研究制作活動によって、その生活の伝承保存や文化の継承に寄与し、現代人の生き方、特に伝統文化や日本旧来の食文化などを重視する生活の形成において、余暇と食材採集を結びつけた「遊び仕事」としての新たな世界観を伝承し得ることを証明できたのでは無いだろうか。また道具自体のデザインや制作中の工夫によって、道具の所属していた文化自身の断絶を乗り越えて、道具そのものからの非言語的体験による文化伝承は可能である、という知見を得た。

無論、大衆向けの薄く広い効果をもたらす文化伝承も大切ではあるが、それとは異なり、その一本の竿という道具を入手した人のみに深く決定的な非言語的文化伝承をもたらすのは、一つのアートのアプローチとして有効なのでは無いだろうか。

事実、伝統ある釣り雑誌『月刊つり人』にも、今回の取り組みが小さいながらも紹介されたことは、本研究の方向性が世間的にも必要性の高いものである可能性が高いことを指し示すだろう³⁵。

本試作完成後の課題として、仙台竿など、テンカラ釣り以外の日本各地の伝統釣法に対しての調査アプローチの必要性があるだろう。釣竿は、水辺で使う竹製品という、ある種腐敗や破損を前提とした明確な消耗品としての性質を持つものであり、単に制作の過程や製品を保存するのみではやがてその付帯文化は必然的に消失し、いかにガラスケースに納め、静的な保存を厳密に試みようとも、竹竿そのものも二百年を待たずに崩れ去る。そのため、常に各地域の特性の強い釣竿を作り続ける形での各地域の文化の動的な保存の必要性があるとも言える。

そこで、本章以降では、テンカラ釣りに留まらず日本各地の様々な地域・魚種の釣法を調査し、それを後世に伝承しうる釣具・文化伝承道具の在り方についての研究を進めて行きたい。特に、次章においては釣りの歴史や、そこへの西洋竿の影響について研究を進めたい。

第2章 近代日本における釣竿と生活―敗戦などによる変化と、遊び仕事としての釣り―

1

はじめに

日本における釣りは、古事記にも釣り具を発端とした海佐知毘古と山佐知毘古の争いが記載されている事でもわかるとおり²、古くから日本に住む人たちの生活と共にあるものである。

釣りは単に食料を得るための漁法であるにとどまらない。明治期に刊行された日本水産捕採誌にも「遊漁（釣りを専ら生活の糧とするのでは無く釣りそのものを目的とするという釣魚や漁法）」という単語が繰り返し登場するとおり³、釣りは、生活の糧を得つつも遊ぶ、副業的・祭事的な食料確保の役割を持つ「遊び仕事（日々の生活の中での本業とは関係のない生活習慣からの副業的収入、あるいは祭事的食糧確保の手段・慣習）」として長らく我が国の生活文化と共にあった。

日本最初の釣りの指導書である『何羨録（かせんろく）』（1723）において黒石津軽家の旗本津軽采女正政兎（以下、采女）は序章冒頭で下記のように釣りの役割とその生活との連なりを彼一流の美意識と共に語っている。

「古昔隧人之世天下多水故教人以漁（中略）自古至當世好事之者不知幾千万人和漢相若」

「嗚呼釣徒樂一釣絲外也利名輕一釣艇内也生涯淡恬澹無心屢避塵世則仁者靜智者樂水豈其有外乎」⁴

これをここでは「かつて水の多かった隧人（原始人）の天下には漁を持って人を教え（中略）古来より当世に至るまで和漢を問わず幾千幾万の人がこの（釣りという）漁を好んだ事だろう」「ああ、釣人の楽しみは糸で釣る外にある。（それに比べて）利や名誉は軽いことだ。（例えば）釣り船の中も楽しい。我が生涯は淡々と水のように無心に世の面倒

を避けて釣を楽しんで行きたい。仁者や静かな智者はただ水の上にある様に釣を楽しむ。こんな楽しみが外にあらうか」と解釈するが、采女の言うように、釣りとは国や時代や身分を問わず多くの人々を魅了し続けてきた特別な漁であり、食料を得る狩猟でありながらも争いとは遠い、穏やかな生活に極めて近い趣味であると言えるだろう。

釣りとは、生活の糧としての漁業から半歩離れた、生活の糧でありながら趣味として成立している特別な「遊び仕事」であることが見て取れる。

我が国の近現代における釣りと生活との関係をふりかえると、内水面の釣りが頼っている放流事業の放流量の変化に注目せざるを得ない。特に、マス釣り場が各地に出来、国民的なレジャーとして定着してゆき、それが現代に入って徐々に衰退してゆく過程は、第 1 章にも書いた通り、内水面の釣りの主力魚種であるニジマスの生産量が、昭和 40 年代（1960 年代～70 年代）に 1 万トンを超えて急速に広まりを見せ、昭和 50 年代（1980 年前後）には 2 万トンを超えてピークになったものの、平成 5 年（1993）頃から減少傾向となり、平成 17 年（2005）には 1 万 1 千トン程度にまでまた戻ってしまっている様子から窺い知ることができる⁵。

国立水産研究・教育機構 中央水産研究所の中村の報告では、我が国の 2018 年の内水面の実釣り人数は 336.0 万人であり、潜在釣り人数は 119.0 万人であった⁶。生活の糧としての役割の大きい海水面の釣りと異なり、養殖およびその放流魚を中心とする内水面の釣りは重視すべきレジャーであり、これに同じく内水面を舞台とした釣りである釣り堀・管理釣り場 177.7 万人を合わせると大変に広い人口を範囲とし得る「遊び仕事」である、という事ができるだろう。

農山漁村文化協会によると「遊び仕事」とは、「最重要とされている生業活動の陰にありながら、それでもなお脈々と受け継がれてきている生業」でありながらも「決して本業とはならず」つまり経済的には「頼りにならず」、成果や収穫は「あてにはならず」、作業としては「けっこうきつい」が、いったんその楽しさにはまると「なかなかやめられない」「副次的生業」であるとしている⁷。こうした「遊び仕事」が日本の文化を支えてき

たことは否定できず、ちょっとした食糧確保を兼ねた「遊び仕事」は祭事などと密接に結びついて特に高度経済成長による日本全体の均一化までの期間、地域文化の中核をなしてきた。

COVID-19 によるコロナ禍で大きな社会変容が必要とされ、人と人の物理的距離が遠いアウトドア趣味が再注目される 2021 年現在、内水面での釣りなど、生活に密着した釣りの興隆期である戦後 1950 年代～高度経済成長期の釣り文化の様相を調査分析することは、こうした遊び仕事としての釣りが、そうした現代の新しい事情に適応し再普及するきっかけになるのではないだろうか。

そこで本論では、近代日本、特に戦後 1950～60 年代期を中心とした釣竿と生活の様相の変化を、単に文献を通じて調査し、実際にその時期に発達した釣り場や釣具に関与した企業や商店、制作者に取材することで、社会の文化的復興成長の大切な一部分としてそうした釣具や釣り場が発展し、とくに「遊び仕事」の道具として、漁労のためと言うよりも、その道具や環境の美しさ、楽しさを重視する方向へと変化が進んでいった様子を明らかにしたい。

第 1 節 日本の釣り文化の発展と遊漁

第 1 小節 日本の江戸期までの釣具と発展

日本の釣り文化は縄文まで遡ることができるが⁸、現代に直接繋がる釣具や釣法という、街道の整備で日本全土に流通が安定した江戸期の釣り文化がその原点と言えるだろう。

江戸期の釣り文化については先に挙げた津軽采女正政兎の『何羨録』が著名だ。20 世紀末になってまで当時の原著の複写本がそのまま和綴じで出版され、その解説本も出続けているのだから、時代を超えた超ロングセラーと言えるだろう⁹。

西洋釣り文化において、英国ではジュリアナ・バーナーズの『釣魚論』が中英語時代の最古典（1496）の釣り論文としてあまりに著名だ¹⁰。バーナーズは「学識豊かな絶世の

美女」といわれながらも何らかの事情で尼僧にならざるを得なかった男爵令嬢であった¹¹。一方、先の『何羨録』を書いた采女は不意の怪我や赤穂浪士事件での義父にあたる吉良上野介義央の討伐など、運としか呼びようのない都合で若隠居同然にならざるを得なかった「生涯をひと口で言い表すとすれば、彼の一生は誰よりも誠実に生き、しかもその一生は誰よりも不運の連続であった」とまで解題者に言わしめた不遇な人生を送った旗本当主であった¹²。両名著共に、社会の上流階級出身でありながら事情により世情の第一線を離れざるを得なかった人物の手になる書物であるのは、釣りの持つ、世俗から離れた立ち位置を示唆している。

『何羨録』は、本題の江戸前の釣りのポイントと釣り方指南だけでなく、釣法毎の釣具やその作り方、天候の読み方の紹介も行っており、当時の釣りに関する状況を知る上で役立つ書物だ。采女は、伝聞は伝聞、自分の経験は自分の経験と明確にわけて記述しているところから、本書は采女自身がその豊富な釣りの経験から記したものであることがわかる。

采女は高家吉良家の義理の息子でもある上級武士であり、いくら第一線を離れた身とはいえ日々の食物に事欠くなどは考えられない立場だ。従って、采女の豊富な釣りの経験が食料確保を目的とした漁労でないことは間違いない。

ここから、江戸期においては純粹に食料確保を目指した漁としての釣りとは異なり、単に食糧を確保するだけでなく、地域毎の魚、漁場を対象として、釣りそのものを楽しむことを目的とした「遊び仕事」としての釣りが存在していたと判断していいだろう。

第2小節 日本明治期～昭和初期の釣具と発展

明治期～昭和初期に至る近現代初期においては、先述の明治維新後最初の本格的全国規模釣具調査研究の一つとして、明治19年（1886）に調査開始され、明治28年（1895）に完成し、明治43年（1910）に刊行、昭和10年（1935）に水産社より書籍

発行された『日本水産捕採誌 釣魚編』が広範囲で信頼できる資料として挙げられる

13。

本捕採誌には、はじめに記述したとおり「遊漁」という語が多用されており、それが各地域の職業的漁法と入り交じりながら紹介されているところに注目できる。ここからも、遊び仕事としての「遊漁」が食糧確保職業としての漁労と無段階に繋がりがつつ、その地域毎の漁労專業度合いに応じて呼び方を変えている姿が浮かび上がってくる。本捕採誌でのこの表記の面白いところは、最終的にはタナゴ釣りのように、明らかにサイズが小さく、本来は網や罟仕掛けで採るべきであり、一匹一匹のごとの釣りでは能率的な食料最終には向かない魚種にまで「遊漁」の範囲が広がる点だ。本書におけるこの展開からは、食糧確保の必要性が下がるにつれて「遊び仕事」の「遊び」の部分が肥大して、やがて純粋な「遊び」に重点を置いた釣りに変化してゆく姿が理解できる。

この『日本水産捕採誌 釣魚編』には冒頭部分に輸出に関しての記述が見られる。竿の輸出数は「東京にて製するもののみにても十五六萬本に至る」とあり、おそらく全国では毎年数十万本に及ぶ輸出数があったことが読み取れる¹⁴。

本捕採録には西洋の毛針釣り道具であるフライフィッシングロッドに関しての記述もあり、商業上の理由として西洋のフライフィッシング用のロッドが「最も上品にして最も高價なるは竹を劈り（わり）膠を以て矧ぎ合せ六角に作りたる竿なり」と推奨されているところから、日本各地でこのフライロッドの模写的な制作が行われていた可能性が高い

15。

第二次世界大戦前の朝日新聞記者だった多田一松とその関係者らの言説もあって「日本の六角竿の創始者は多田一松」とされる事が多いが¹⁶、この『日本水産捕採誌 釣魚編』の記述を見る限りに、その言説は少々言い過ぎである可能性が高いと言わざるを得ない。多田や多田の率いる多田釣具製作所は、あくまでも、工業化や大量生産に成功した最初の六角竿製造者の内の一つ、という立ち位置と考えるのが自然だ。多田の製品に付属していた説明書からも、輸入竹材を「ハーディ作フライロッド」と比較して「日本の竹と違

って」と明記しており、他にも日本の竹製の六角竿も普通に流通していたことを窺わせる（写真 1）。

また江戸和竿の創始者であり現代の和竿のほとんどの起源であるとされる事の多い「東作」の創始者松本東作やその系譜の泰地屋東作系の和竿に対する記述が『日本水産捕採誌 釣魚編』には一切ないことも、釣具の歴史を追う上では重要だ。明治期の日本全土の釣具を国家的プロジェクトとして総覧する本書に記述が一切無く、江戸和竿についてはただ

「享和文化の頃江戸本所中の郷邊に武兵衛と云ふものありて善く竿を造れり、後又利右衛門と云ふもの之に習ふて亦善く造り出し、是より竿の形を改良するに至れりと云ふ」¹⁷と書かれている事実からは「東作」を全ての和竿の祖であるとする現代の東作史観とでも言うべき和竿の歴史認識のあり方への疑問が生まれる。こうした東作史観の一例として、和竿を多く收藏する週間釣りニュース社「釣り文化資料館」などにも江戸和竿の祖が松本東作であるという展示案内が見られ、江戸和竿の系譜でもそう伝えられる（図表 1）。しかし、『日本水産捕採誌 釣魚編』の表現を見るに、こうした現代和竿技術の系譜における「東作」の著名度の成立が明治期以降であったのではないかと考えられる。

また、筆者が過去の研究で長野県木曽谷発祥のイワナやアマゴの毛針釣りであるとして触れた「テンカラ釣り」についても、本書においては加賀の鮎の引っかけ釣りとして紹介しており¹⁸、筆者が前提としてきた現代の「テンカラ釣り」の認識とここも食い違っていて、命名の起こりも大変に興味深い。

このように同書の内容からは、現代の認識とは異なる明治当時の釣り文化の状況を指し示している可能性も高く、『日本水産捕採誌 釣魚編』は昭和期以降と比較して追加の研究の余地のある資料だと言えるだろう。

いずれにしても、明治期～昭和初期の期間、日本には釣具の製造文化が栄え、江戸期からの各地域毎の伝統釣具を製造発展させるだけでなく、積極的に海外の釣り文化を導入し、また、それらが地域を越えたいくつかの代表的な釣具の形となって、海外に輸出されるまでになっていたことが見て取れる。

この期間、生活にも釣りは密着しており、各地の釣法を伝え発展させるだけにとどまらず、職能としての漁労ではない「遊漁」として、遊び仕事の釣りが地域を越えて日本全体に発達していった様子もうかがうことができる。

第3小節 戦中戦後～高度経済成長期の釣具と発展を探るに当たって

現代に繋がる釣り文化を語る上でどうしても避けて通れないのが第二次世界大戦とその敗戦の影響だろう。

資本主義経済の発展にともない国内の流通や産業が活発化し、前述の『日本水産捕採誌 釣魚編』で示されたとおり、原材料となる中国の竹類の輸入や国産竿の輸出などで日本の釣り文化を発展させる影響をもたらした¹⁹。一方で老舗フライフィッシング釣具店である「つるや釣具店」代表の山城良介が著書で「進駐軍（のお土産）向けの六角竿を大量に製造しました（中略）それまで和竿を作っていた国内釣り具メーカーがみんな六角竿に参入してきました」と語っているとおり、その後の敗戦後の連合国軍による日本占領は釣具とその流通のありようを根底から変えてしまった²⁰。わずか20余年ほどの間のこの大きな振れ幅は、商売としての釣り道具のみならず、釣具文化そのものを根本から変えるほどの影響があったと想像するに難くない。

しかしこの混乱する終戦直後時代1945年～高度経済成長期の60年代前半を総覧する書籍や資料を指し示すのは困難だ。

この少し前、昭和初期を対象とすれば、朝日新聞社記者松崎明治の記した近現代釣法を総覧する『釣技百科』もあるが、これは昭和17年（1942）即ち戦中の刊行であり、さらに前述の多田一松とも同じ新聞社の釣り情報誌面担当の先輩後輩の身内関係であるところから、竹製六角竿、特に西洋フライロッドに関しては中立的な記述は期待できない²¹。

釣り場の変化に関して言えば、明治大正までの天然の魚を天然のままに釣る行為からの切り替わりが特筆できる。自然繁殖魚を採る権利を管理する戦前の各種漁業権管理団体から変化した、漁業協同組合の誕生がそれだ。漁業関連団体は、戦中の資源管理のための漁

業会を経て、例えば秋川漁業協同組合が昭和 25 年（1950）に立ち上げられ、1952 年には全国漁業協同組合連合会が立ち上げられたように、戦後、各地で漁業協働組合が立ち上がっている^{22 23}。これら漁業協働組合では単に漁業権を管理するだけでなく魚の保護管理育成を行った。漁業協働組合、特に内水面の漁業組合はつり人を経営資源と見なし、管理河川において放流事業を行い、あるいはつり人に釣らせるためのエリア、即ち「管理釣り場」を作り上げていった。

このような漁業協同組合の主導する人工的な水面利用による釣りが多数派となったのが、現代の内水面の釣りの平均的な姿であると考えられる。

現代には、例えば群馬県の上州漁協のホームページでは「漁業協同組合が多大な労力を要する放流など漁業資源の増殖を行い、釣り場の管理を実施しているので、河川や湖沼が「釣り場」として必要な漁業資源量を維持することができます」とし「ほとんどの内水面漁協は「漁業者」ではなく「採捕者」である「釣り人」により構成され・運営されています」と、趣味の遊漁者が内水面漁協の主体である現状を断言するに至っている²⁴。

この状況の中での釣具の発展は、職業的な漁労から離れ、「遊び仕事」として自然に趣味的な傾向を帯び、より美しく、より楽しく変化をしてきたのではないかと予想される。

そこで、次節では放流管理された釣り場の代表格である管理釣り場と、釣具メーカーの両者を訪ね、その取材から経緯を探ってみたい。

第 2 節 管理釣り場から見た戦後の釣り文化

第 1 小節 日本の管理釣り場とフライフィッシングの始まり（養沢毛鉤専用釣場の事例から）

釣り堀の中でも、河川や池沼などを区切り、大規模に放流を行って釣りを楽しむ「管理釣り場」の存在は、日本の戦後の釣り文化を代表する特徴だ。特に内水面においては、埼玉県が「河川は生産力が低く、漁獲により魚類資源の枯渇が心配されます」とその広報に

書くほどに漁業資源が不足する日本の事情から、漁業協同組合による放流と合わせて、釣り文化には欠かせない存在と言える²⁵。

管理釣り場のその端緒は、東京都あきる野市にある養沢毛鉤専用釣場ではないかと考え、同釣り場の高橋実理事長の取材許可の下、窓口担当のスタッフを中心に令和3年（2021）4月20日に聞き取り取材を行った。

養沢毛鉤専用釣場は、戦後、教育勅語関連諸法の民主法化に尽力した元 GHQ の民法担当官トーマス・レスター・ブレイクモアが 1955 年に開設した釣り場である（写真 2）。

養沢毛鉤専用釣場設立以前にも日本にはフライフィッシングの釣り場は日光の湯川と湯の湖、山梨県の忍野川などがあったが²⁶、いずれも天然の川に米軍をはじめとする日本占領進駐軍が魚類を放流しただけのもので、管理者が責任を持って利用者から料金を取り、計画的に放流管理する「管理釣り場」としては、養沢毛鉤専用釣場が全国初となる。

釣り場のスタッフの話によれば、養沢毛鉤専用釣場のある現あきる野市周辺には横田や立川の米軍基地があり、そうした米軍基地の日本駐留が、占領統治下の後も半恒久的に継続することが決定したため、その関係者、特に上級将兵の交流・レクリエーション施設の設置が至急の課題であったようだ。上級将兵は富裕層出身であることが多く、そのため、米国でも上流層の遊びであり、ブレイクモア自身も趣味としていたフライフィッシングに着目して本施設を設立した。

養沢毛鉤専用釣場は米軍将校や米国、国連幹部を主な客層に想定していたが設立直後から日本人客も歓迎していたのも特徴だ。

この経緯は当時の雑誌、特に『月刊つり人』を追いかけると詳細に記されており、まず昭和30年（1955）3月号に「財団法人五日市養鱒協会 設立さる」という記事が掲載され²⁷、そこでは「発起人トーマス・L・ブレイクモア氏」が「筆者（鈴木魚心）」と共に「釣人水産学者一体とした協会の設立の運びとなった」との記事がある。また、翌昭和31年（1956）5月の同誌の記事では「我国初の試み 毛鉤専用釣場養沢川」として放流を行う有料釣り場の告知記事がある²⁸。そこでは「今年は我が五日市養鱒協会が管理事務

一切を代行していたのを漁協組並び地元民の手に渡し（中略）内容も充実」とあり、現在の養沢毛鉤専用釣場の設立過程がわかる。養沢毛鉤専用釣場は米軍将校や米国、国連幹部を主な客層に想定していたが、鈴木魚心らの活動で、設立直後から日本人客も歓迎していたのも特徴だ。

戦後の様子を指して「みんなが食べるのに必死で釣りを楽しもうという雰囲気じゃ無かった」という状況であったが²⁹、敗戦から10年でようやく釣りを楽しむ施設が日本にも出来たことになる。

ブレイクモアはあくまでもGHQの担当官として来日したため、当釣り場開設の昭和30年（1955）には既に公職を降りて民間に下っていた。同時期、ブレイクモアは日本の永住権を得て日米両国にトーマス・ブレイクモア法律事務所を開くなど、積極的に民間レベルでの日米友好を目指す活動を行っていた様子が窺える。その日米友好活動の一環として、米軍将兵のみならず、日本人にも広くフライフィッシングを伝道する意味でも、ブレイクモアは私財を投げうってこの養沢毛鉤専用釣場設立に尽力したとのことであった。

多摩川水系秋川の支流である養沢川のうち全長4kmに渡る広大な区間を毎年3月～9月までの期間釣り場として指定し、所々に駐車場とトイレ、釣り場への階段やはしごを設置し、その全域にわたって毎月1～2度程度の放流を行うのが、養沢毛鉤専用釣場の管理方法だ。利用者は一日券を購入してこの区間を自由移動して釣りが出来る。放流魚は米国人の好むニジマスだけでなく、日本固有の溪流魚ヤマメを主に放流しており、その放流効果の調査と放流のめどを調べるために、アブラビレに標識を付けたヤマメを毎年放流し、その標識を報告した釣り人に調査協力の返礼として記念バッジを渡す仕組みを昭和55年

（1980）から維持している。このヤマメバッジを手にすることが養沢毛鉤専用釣場をホームとして釣りを楽しむ者の誇りであり、平成24年（2012）4月に放火によって養沢毛鉤専用釣場の事務所が全焼してしまったときには、熱心な利用者から歴代のヤマメバッジの寄贈があった（写真3）。ヤマメバッジは七宝焼きによる丁寧な仕上がりで毎年デザインが変わる。また魚の持ち帰りには匹数制限があり令和4年（2022）3月段階では1日

券で8匹までの持ち帰りとのことだ。

この養沢毛鉤専用釣場は、当初から地元の協力と将来的には地元による自主的な運用を念頭に置いて設立されたという。事実、現在では、この養沢毛鉤専用釣場は地元住民が理事に就任する「トーマス・ブレイクモア記念社団」により運営されており、この社団の理事や幹部スタッフは歴代無給で業務に当たっている。

ブレイクモアは1995年療養中の米国にて死去したが、窓口のスタッフや釣り場整備スタッフは今でもブレイクモアを「トーマスさん」と呼び、彼が亡くなってから四半世紀以上たつ今でも親しみを込めて語る様子が随所で見受けられた。

養沢毛鉤専用釣場では、フライフィッシングに加え、日本の伝統的な釣法であるテンカラ釣りも可能となっている。ここで言うテンカラ釣りは前述の加賀の鮎引っかけ釣りではなく、一般的にテンカラ釣りが指し示す用語である毛鉤によるヤマメなどの小型マス類を対象とした釣法のことであり、この昭和30年（1955）時点で、テンカラ釣りといえは小型マス類の毛鉤釣りになっていたことが窺い知れる。スタッフによれば、ブレイクモアは、晩年はフライフィッシングよりもこのテンカラ釣りの方を好んでいたとのことで、この養沢毛鉤専用釣場における釣り文化交流が決して先進国である米国から敗戦国日本への文化伝達と行った一方的なものではなく、相互的なものである事がわかる。

この養沢毛鉤専用釣場からは、戦後、釣り文化が米国関係者の関与によって大きく様変わりした過程が残されていた。そこにはお土産物として人気のあった六角竿の関与も多々あった事は想像に難くない。また、それら米国文化が日本の既存の釣り文化と混じり合っ

第2小節 一般日本国民向け釣り場の始まり（早戸川国際マス釣り場・リヴアスポット早戸の事例から）

元々米軍将兵を主な顧客層と想定して開始されたマス釣り場は「国際」マス釣り場と自称する傾向があるが、その「国際マス釣り場」の中でも古参の一つが、この「早戸川国際

マス釣り場・リヴァスポット早戸」だ（写真 4）。

そこで 2021 年 6 月 6 日に、早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸、新井健太代表に取材した（写真 5）。

相模川水系早戸川を 1.5 km 近くにわたって区切って作られた早戸川国際マス釣り場は昭和 39 年（1964）4 月設立。当時は早戸川国際マス釣り場のみの設置で、あとからルアーフィッシングやフライフィッシングのブームを見て、リヴァスポット早戸を併設した、とのこと。

新井健太代表の父親新井福平前代表が第二次世界大戦直後から米海軍（厚木基地、座間基地など）向けの魚の卸をやっており、その縁があつてマス釣り場を始めたという。

設立に当たっては、米軍を経由して、前述のトーマス・レスター・ブレイクモアの日本人秘書複数名の助力があり、養沢毛鉤専用釣場のノウハウを学びつつ河川型の管理釣り場を設置したという。

養沢毛鉤専用釣場は上級将兵用のレクリエーション施設だが、早戸川国際マス釣り場は一般将兵や日本人向けとして考えられており、簡易な餌釣りを簡素な竹一本モノの貸し出し竿で行うという餌釣り場のスタイルは、設立当時からのものであるという。

対象魚は、米軍将兵が好むニジマスを中心とするが、イワナやヤマメなど、様々な魚を放流しており、漁法は、早戸川国際マス釣り場が餌釣り、リヴァスポット早戸がフライとテンカラ、ルアー釣り限定、とのことだ。

早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸の最大の特徴は、急流を利用した難しい釣り場ながらも魚の持ち帰り匹数に制限がないことで、大型魚が多く放流されることもあり、腕自慢の釣り人が日本各地から集まる要因となっている。

現在も引き続き米軍基地関係者は多く来場しているが日本人客の方が圧倒的に多い。これは、開設当時から徐々に比率が変化したものであり、早戸川国際マス釣り場側ではとくにその比率の変化の統計などは取っていないという。

本調査で判明した早戸川国際マス釣り場開設以前からの米軍との関係は、当時の日本各

地での「国際マス釣り場」設立が、米軍のレジャー要求の動向にあわせたものだった事を示唆している。

また、釣場の方針として釣具にはこだわりはないとしながらも、釣法ごとに釣り場を分けるなど、釣り人の生活に密着しつつもこだわりのある釣り方を推奨していて、戦後～高度経済成長期における日本の内水面釣り文化が、釣具の変化と共にあったことをうかがい知ることができる。

この早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸では、大型魚を釣り上げた場合、持ち込み釣具と一緒に記念写真撮影を行うことによる道具自慢ができる。また、常時放送される「引っかけ釣り禁止」といったジェントルマンシップの要素など、ただ魚を釣るだけでは無く、釣り文化の発展も意識した運営をしている。釣った魚を調理してくれる食堂などを中心に交流地点としての役割もあり、ここから、筆者が第1章で取り上げた現代の冬期プールフィッシングや後述するプライベートポンドなどの交流メインの釣り場へと役割が繋がっている点も特記すべきだろう。

また、本取材に関し、新井健太代表は遊びとしての釣りを下記のように語った。

「今は（昔と違い）父親が釣りで遊んでいないので、その子供たちも当然に釣りに関わらなくなっています。もちろん、昔と違って今はレジャーがたくさんあり、そのうちの一つとして釣りがある状況なのは理解しています。

しかしそれにしてもこういう面白い遊びが知れないのは残念ですね。」

この言葉からは、遊びとして、レジャーとしての釣りが徐々に衰退している現状が窺える。特に、新井健太代表と同年代の団塊の世代がアウトドア活動で活躍できる年齢では無くなりつつあり、釣りを趣味としていた人たちが大きく減少している状況がある。

新井健太代表の言葉にも釣り人口の減少の指摘があるが、単に釣りに関わる人口が減っているというだけで無く、管理釣り堀そのものの变化も着目すべき点だ。

価格面や設備などを見るに、現代の管理釣り場として、常設の高級レジャーとしての設備が充実した管理釣り場と、祭りなどで臨時開設の釣り場やその延長にある冬期プールフィッシングのような設備に力を入れない、自然河川への漁業協同組合放流よりも多少よく釣れる事を目的とした安価な管理釣り場に二分化しつつある様だ。

現に、2021年4月現在で、前述の養沢毛鉤専用釣場は1日4500円、早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸は1日4700円と、いずれもちょっとした遊園地並みに高額だ。また、それに比べてお盆などに設置されるマス釣り場は木曽町日義地区の夏祭りで1000円、冬期プールフィッシングは、埼玉県の間宮プールで1日2620円と常設型管理釣り場よりも格安だ。この臨時設置管理釣り場の価格帯は、漁業協同組合の管理する放流河川の一日券が例えば諏訪東部漁協で1200円程度である事を考えると、自然河川の釣りにかかる費用を参考にしているものと考えられる。

高級路線の常設型管理釣り場はさらに発展し、少人数の会員だけで年間定額費用を払い、釣り人をその人数のみに制限した上で管理釣り場を運営する、プライベートポンドというスタイルも出てきている（写真6）。

遊びに特化したプライベートポンド等のような高級釣り場と、食に密接し開かれた「遊び仕事」の管理釣り場との共存が、今後の釣りレジャーの一つの姿であると考えられる。

第3節 釣具製造販売店から見た戦後の釣り文化

第1小節 進駐軍とお土産竿（櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」の事例から）

釣り文化の変化を追いかける上で、釣り場の他にもう一つ、釣具の変化も欠くことが出来ない要素だ。

特に戦直後1945年～1960年代前半に注目すると、前述のとおり、敗戦後の占領軍～在日米軍相手のお土産釣竿の重要性に気づかされる。

この土産物釣竿がこういった経緯で誕生し、それがどのように釣り文化に影響を与えたかを調べるため、明治期から釣具を製造販売している櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」の石川潜城店長に 2021 年 4 月 13 日に取材した（写真 7）。

櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」は、櫻井信太郎が明治 21 年（1888）に創業し、現在でも竹製漆塗りの伝統的和竿をはじめ、最新のカーボンロッドまで国内外に製造販売しているメーカーだ。小規模な世襲の竿師やその販売はともかく、複数の製造スタッフと製造ラインを持つ中堅以上のメーカーの中では最古参の 1 社ではないか、という。

同社は、創業当初はテグス等の小物を中心に販売し、そこから鮎竿をはじめとして鮒竿、キス竿など、和竿全般の製造販売を行うメーカーになったという。西洋竿にも戦前から着手し、西洋ルアーフィッシング及びフライフィッシングに使う六角竿に関しても戦前から製造販売していた、とのこと。

店舗には販売のための店員も常駐しているが、それ以外に同じ建物の別フロアで釣具製造をしている同社社員の和竿職人や竿製造担当者が出入りし、凝った注文の来客があると、顧客と職人が直に話し、好みの竿を作り上げてゆく。昔ながらの家内制手工業の職人と企業制工業の両者を行き来しているような独自のビジネススタイルを取っている。和竿としては「江戸川」と「江戸藤」の 2 つの和竿師名をもっており、その時代時代の最も腕の優れた社員 2 名がその 2 つの和竿師名のいずれかを襲名するスタイルでやってきている。

顧客と製造スタッフの距離が近い関係から、同社の竿には、和竿のみならず、カーボンロッドにも現場顧客の実釣での声が色濃く反映されているのが特徴だ。看板のキス竿はもちろん、海外での流行に合わせて製造販売しているテンカラ竿ですら、例えば「金剛」シリーズなどでは、和竿の雰囲気や曲がり調子を意識し、同社製の和竿とカーボン竿のその両方を所有しているユーザーが違和感を持たないような作りを心がけているという。

六角竿に関しては、戦直後製造の占領軍及び米軍向け土産の同社製「コンビネーションロッド（フライフィッシングとルアーフィッシング両用の切り替えロッド）」のセット

が店舗入り口に展示されている（写真 8）。リールこそ時代の流れで紛失しているそうだが、桐箱入りの見事な高級釣具セットだ。お土産屋や海外向けには同社は「SAKURA」というブランドで展開しており、この SAKURA 製のコンビネーションロッドは数万本を売り上げて大ヒット商品となったとのことで、実際、1 万本販売記念のトラック積み込み写真が店頭には展示されていた。また、同社に限らず「ゲイシャロッド」と呼ばれる漆塗りの竿も当時は販売されていたようだ。

進駐軍のお土産ブームに乗って製造販売された他社六角竿製品は実用に耐えない見た目だけのロッドやとても投げる事が出来ない出来の悪い釣り糸が多かったそうだが、同社神田釣り具の櫻井では、実用竿として戦前から六角竿を国内外向けに製造販売していた実績があり、きちんと使えるものを出していたことがこの大ヒットの秘訣だったのではないかという。同社製の六角竿は戦前から経験のある柔軟性の高い真竹、あるいは孟宗竹製であり硬度の高い輸入竹に頼った堅くて釣り仕掛けを飛ばしにくい他社製品とはその点でも一線を画していたようだ。この点について、石川氏は、戦後の六角竿ブームの時の原料竹は「輸入の記録が残っていないので国産の孟宗竹か真竹、おそらくは孟宗竹」であり、そうした国産竹による柔らかい調子（竿の曲がり具合）が他社に比べての成功の要因ではなかったのか、と述べた。

また、ソフトベイトと呼ばれる、柔らかい樹脂製のルアー疑似餌を製造販売したのは、同社が世界初であるという。こうした工夫があるからこその大ヒットだったのだろう。

この日本最古の釣具製造販売店の一つである「神田釣り具の櫻井」が六角竿を戦前から製造販売していた、という調査結果を見るに、多田一松が日本の六角竿の元祖であるという書籍などで紹介されやすい前提には疑問符が付く³⁰。多田はあくまでも初期の六角竿分野開拓者であり、その主要な一角であった、と認識しておくのが順当だろう。

この櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」の取材調査からは、前述の明治期『日本水産捕採誌 釣魚編』の調査の正確性が窺い知れる³¹。

たとえば、六角竿は戦前から国内及び輸出向けに作られている。これは、前述の『フライの雑誌』記事などによる六角竿の歴史が昭和 20 年代後半（1945～）だとする説を否定し、日本における六角竿の製造開始を大きく遡らせる内容だ。

またこの神田釣具の櫻井のように東作の系譜に拠らない和竿製造が明治当時には一般的であったのであれば、同書に特に東作の記載が無かったのも納得できる。東作は四代目東作である松本政次郎が戦後期に大成功をして多くの弟子を取ったことで知られるが³³、このあたりで和竿の系譜に関して認識の変化があったのではないだろうか。

この視点で資料を見返すと、昭和中期頃までの四代目東作の時代までの東作の広告は「継竿の創始者初代東作」と銘打っており、宣伝文句であっても江戸和竿全体の創始者とは決して名乗ってはいない。昭和中期までは東作本家側から見ても、数多くある江戸和竿の系譜の中での継ぎ部分の技術の創始者の系譜という自己認識であったと見て良いだろう^{32 33}。

東京の人々にとって、魚釣りは無くてはならない趣味であり、その道具は実用と美しさの両面で評価されていたことが、江戸前の釣りを主眼に置いた同社の歴史からわかる。また、現在でも多くの釣具の輸出が行われていることから、実用と美を兼ね揃えた姿勢が長年海外にも評価されている事がわかる。

釣具に必要なのは単に魚を捕るだけでないということが、この取材から学べる。

第2小節 六角竿とフライフィッシングロッド（株式会社レオン フライロッドビルダー 一三浦洋一氏の事例から）

現代の釣具の中でも竹製手作りでありながら最新釣具とその性能にも対抗できている釣具として、フライフィッシングロッドが挙げられる。英国発祥の毛鉤釣りであるフライロッドは、前述の『釣魚論』や『日本水産捕採誌』の描写を見てわかるとおり長らくトリネコやヒッコリー、ハシバミなどを削り出した木製であったが^{34,35}、近代、世界物流が盛んになると同時にはじめはインドからカルカタケーンが、やがては中国や明治開国後の

日本などからトンキンケーンや真竹、孟宗竹が盛んに輸出され、特に米国で竹製のフライフィッシングロッド、バンブーロッドが作られるようになった³⁶。

このバンブーロッドやそれに関する釣具は現代のものもある。そこで、製造した竿やリールが高く評価され、その竿作りの治具においても大きな国内シェアを取る株式会社レオンの三浦洋一代表に 2021 年 4 月 25 日に取材した（写真 9）。

埼玉県加須市にある株式会社レオンは元々三浦代表の父親の代から鉄工所を開設して居た関係で、機械工作精度が特徴のフライロッドビルダーだ。1995 年頃から米国のギャリソンなどの影響でフライフィッシング関連の制作を開始したという。

レオンが名を馳せたのは、元々はクラシカルなフライフィッシング用リールの制作で非常に高い評価を得たことによる。極めて軽量で正確、かつ、デザインの的にも優れた美しい側面板のリールは、世界中で模倣リールが出るほどの人気となった。

そこから、2000 年前後には三浦代表自ら中国に渡って竹を仕入れてくるなどで良質のフライロッド材料を揃えるようになり、今では鉄鋼技術を生かしたプレーニングフォーム（6 角に割った竹を削り込むための削り込み用の型）などは事実上国内シェアを独占している。日本のフライロッド制作では 2021 年現在無くてはならない一角を担うフライ関連ショップであると言える。

三浦代表自身は寡作家で、また治具メーカーという性質上他のフライロッドビルダーの下請的にブランク（何も付属していない六角竿）のみを作ることも多く、三浦の銘入りフライロッドが大量に作られて大量に売られる、という性質のフライロッドビルダーではないが、その作家性は非常に高い評価を得ており、著名な面々が著述した前述の「バンブーロッド教書」にも記事を一節持っているほどである³⁷。

レオンの店内にはフライロッドやリールの完成品だけでなく、ロッドを作るための道具類も豊富に揃っており、フライロッドビルディングの道具が簡単に揃う店舗となっている。また、店内には商品以外にも歴史的に珍しいフライロッドも展示しており、例えば、戦後進駐軍向けに作られたお土産用の「ゲイシャロッド」は、その美しい漆塗りの仕上が

りで、ゲイシャロッドはお土産用の不出来なものであったのではないかなどという思い込みを一目で払拭してくれる（写真 10）。

三浦代表の活動として、フライロッドメイキングスクールがある。全 5 回 5 日間の通いでトンキンケーン（チャカンチク）の丸竹から割り出し、最終的に一本のフライロッドに仕上げてしまうこの教室は評価が高く、プロ・アマチュアを問わず多くのフライロッドビルダーがこの教室の出身者である。筆者も本来 5 日間のところ居座り続け、足かけ 4 ヶ月にわたって毎週末に教をを請うた経験がある。三浦代表は「魚釣りの最高の喜びは自分で道具を作って釣ることであり、竿を自分で作らないのは楽しみの半分を自ら捨てているに等しい」という主張の下この活動をしているが、確かに、それはフライフィッシャーがフライタイイングで魚を釣り上げることに喜びを感じるということからも理解できる理屈である。「自ら遊びに使う道具を工夫して作る」というのは、遊び仕事としての魚釣りを考えた場合、大きな要素の一つと言えるだろう（写真 11）。

三浦氏の遊び仕事は単に自らフライロッドを制作するだけでなく、その原材料にも及ぶ。三浦氏を指して「どんな竹でもフライロッドにしてみようという遊び心一杯」の人物とフライフックタイヤー（フライ毛鉤作りのプロ）の島崎憲司郎は評しているが、まさにその言葉どおり、ありとあらゆる様々な竹を使ってフライロッドを作り上げてしまうその技術と好奇心は、非常に評判が高い³⁸。中でも真竹や孟宗竹によるフライロッド制作の試みは 2021 年のコロナ禍で中国からトンキン竹が輸入できなくなってから重点を置いている取り組みの一つだが、これは、人口減少と高度高齢化による里山崩壊とそれに伴う放置竹林が問題となる我が国の現状を考えると、生育が早いため様々な工芸品に有用であった反面、その性質上極めて有害な植物の一つでもある真竹や孟宗竹に有用性を持たせる取り組みでもあり³⁹、環境保護の面からも評価できる。

三浦代表は自らが釣った魚は全てリリースするキャッチアンドリリースを徹底しているというが、魚自体を食べなくとも、道具作りと専門ショップという広義の釣りというジャ

ンルで生計を立てているわけで、まさにこれも遊び仕事としての釣り、と言えるのではないだろうか。

小結

ジュリアナ・バーナーズや津軽采女正政兎の例を歴史に見ても、釣りというジャンルは洋の東西、時代を問わず、本業とは別に、人の心や生活の支えとなる文化的側面を持つことがわかる。

明治期の『水産捕採誌』を見る限り、我が国にも非常に豊かな釣り文化が存在しており、またそれらが積極的に海外に輸出され、あるいは反対にフライフィッシングなどの海外釣り文化が輸入されていたことがわかる。

そうした釣り文化のキーワードの一つが「遊漁」という伝統的な行為であり、これは、生活の主な収入源にならない、漁労とはまた別の副収入（マイナーサブシステンス）であることがわかる。ここからは即ち、釣り文化の持つ「遊び仕事」の要素が強く見えてくる。

日本の釣り文化は日本の敗戦により大きく変容を余儀なくされてしまったが、戦後には早速占領軍である米軍の持ち込んできた釣り文化との交流が発生し、中でもトーマス・レスター・ブレイクモアの作り上げた「養沢毛鉤専用釣場」は日本における管理釣り場のモデルケースとして誕生し、養沢の地に根付いて地元の人々の「遊び仕事」として発展継承されてきた。

養沢毛鉤専用釣場をモデルとして各地の管理釣り場も発達し、例えば「早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸」は元々の米軍相手の管理釣り場から無段階に国内庶民向けの釣り場へと移行しており、日本の戦後釣り文化を支えてきている。

反面、少子化とレジャーの多様化によって日本の釣り人口は減少してきており、その回復手段、あるいは釣り文化そのものの継承手段が問われるようになってきている。その状況下で、高級プライベートポンドによる釣りの行為そのものを楽しむキャッチアンドリリース

ース中心の釣りと、催事的な子供ファミリー向けの取って食べるための各地の夏休みの釣り堀としての釣りの二分化が進んでいるのが現状だ。

この背景の中「櫻井釣漁具株式会社」では、和竿職人が社員として常駐しているという環境を生かして既存の和竿技術を応用してカーボン竿を作っており、また、和竿の伝統である顧客と職人の距離の近さから、顧客の要望を積極的に取り入れて満足度の高い竿作りを行って日本国内はもちろん、世界的に高い評価を得ている。

また、フライフィッシング専門店「レオン」では、三浦洋一代表の「魚釣りの最高の喜びは自分で道具を作って釣ることであり、竿を自分で作らないのは楽しみの半分以上を自ら捨てているに等しい」という主張の下、フライロッドメイキングスクールを開催しており、このワークショップを経てフライロッドメイキングのプロになる者も複数出ていて、裾野を広げる事に大きく貢献している。他にも三浦氏は様々な竹を用いてのフライロッドメイキングに取り組んでおり、中でも邪魔者扱いされやすい真竹によるフライロッドは人口減の日本の里山の状況を考えた場合、非常に重要ではないかと考えられる。

いずれにしても、本章をふりかえると近代日本における釣具の発展は、釣りが持つ、遊び仕事という本質と常に共にあったことがわかる。

この本質は、単に「食のために行う副業的且つ祭事的採取行為」という伝統的遊び仕事の枠を超え、たとえ釣った魚を食べなかった場合でも「副収入的、あるいは本業に近いくらいに打ち込めるだけの熱量を持った趣味」という新しい遊び仕事の枠組みを「釣り」という行為に与えるものではないだろうか。

また、戦前戦後の釣り文化を語るときに「六角竿」と「米軍」の関与はどうしても見逃せない。これについては次章で詳しく述べたい。

第3章 和製六角竿から見た 20 世紀日本における釣竿と生活¹

はじめに

第1、2章で再三述べた通り、釣竿は漁撈に関わる民具の中でも特殊な位置づけを占める。筆者はデザイン業の傍ら釣具を制作しており、中でも特に趣味の釣り向きの釣竿を制作することが多いが、一匹一匹の魚を、時間をかけて個別に釣り上げるその漁労スタイルは、漁獲量の向上に対してはあまり積極的とは言えないだろう。漁獲量を増やすための道具や工夫であれば、網や簀の子仕掛け、あるいは地域の水路そのものの水抜きなどが効率的なのは言うまでも無い。しかし、第1、2章にも書いた通り、釣具の歴史は本邦においても古く、前述したように古事記にも釣り具を発端とした海佐知毘古と山佐知毘古の争いが記載されている事でもわかる通り²、古くから日本に住む人たちの生活と共にあるものである。

釣りは単に食料を得るための漁法であるにとどまらない。第1、2章で前述のように明治期に刊行された『日本水産捕採誌 釣魚編』（以下、捕採誌）にも「遊漁」という言葉が繰り返し使われ、例えばタナゴなどの小型魚で、食料確保の方法としては網やびんどう仕掛けでの大量確保が明らかに望ましい魚種であっても「鯨髭にて細く作り（中略）中には手元を金銀を以て装飾せしものあり斯くの如きは一竿の價五六圓に上る是遊漁具たるの故にして固より費用場に得失なし」と³、日々の糧を得つつも明らかに遊びとしての要素が目立つ、副業的な食料確保の役割を持つ趣味としても長らく我が国の生活文化と共にあった。

第2章で述べたが、日本最初の釣りの指導書の一つである『何羨録』享保8年（1723）において黒石津輕家の旗本津輕采女正政兇（以下、采女）は序章冒頭で釣りの役割とその生活との連なりを語っている⁴。釣りとは国や時代や身分を問わず多くの人々を魅了し続けてきた特別な漁であり、食料を得る狩猟でありながらも争いとは遠い、穏やかな生活に極めて近い趣味であると言えるだろう。

我が国の近現代における釣りと生活との関係をふりかえると、明治以降の変化、また、

第二次世界大戦敗戦前後での変化に注目せざるを得ない。特に、マス釣り場が各地に出来、国民的なレジャーとして定着してゆき、それが現代に入って徐々に衰退してゆく過程は、その商業化と共に注目に値する。

日本を代表する釣竿といえば、江戸和竿に代表される細い自然竹をそのまま割らずに使った和竿をどうしても考えがちである。しかし、後述のように当時の雑誌広告などの史料を調べ、現在まで続く各実店舗や管理釣り場を調査すると、第二次世界大戦後、進駐軍やその後の米軍将兵によく売れたのは実は和竿では無く、六角竿と呼ばれた西洋式に6枚の竹を貼り合わせたスタイルの釣竿であったことが判明した（写真1、2）。六角竿は戦前期昭和10年（1935）前後に一度国内向けにブームを迎え、大いに米英に輸出され、第二次世界大戦時には一旦そのブームが収まるものの、戦後軍人として訪れた人々によって昭和20年代終盤（1945年以降）～昭和30年代（1950年代）に再びのブームとなったようだ。六角竿はやがてグラスロッドの発展発達の時期に姿を消してしまっただが、米英に自生しない竹素材を使った六角竿は、エキゾチックなイメージのある和竿の実用的な上位版として、日本を代表する土産物であったことが、当時の販売実績などから窺える。しかし、六角竿は現在縮小してしまった釣竿制作手法であるということもあり、あたかも少数の人物が全てを作っていたかのような、物理的にあり得ない情報も含め、虚実様々な情報が雑誌などにあふれかえっていることも判明した。現在においてもフライフィッシングの世界でのバンブーロッドは高級品として遇されている様子もあるが、一般店舗に六角の竹竿を見かけることはなく、主流であるとは言いがたい。

そこで本稿においては、この六角竿の興隆を当時の雑誌史料などから探り、また、釣具店の店頭や管理釣り場などへ取材をすることで六角竿を巡る当時の実態を明らかにした。

第1節 本邦における戦前の六角竿の発展

第1小節 昭和初期の第一次六角竿ブーム

釣竿の歴史は古く、例えば日本の釣り文化は縄文時代にまで遡ることができるが⁵、現

代に直接繋がる釣具や釣法という、街道の整備で日本全土に流通が安定した江戸期の釣り文化がその直接の原点と言えるだろう。

前章までに述べたとおり、西洋竿においても、英国ではジュリアナ・バーナーズの『釣魚論』が中英語時代の最古典 15 世紀（1496）の釣り論文として著名だ⁶。同書には、ナカマドの木やヒッコリー、トネリコの木から竿を作る方法が記されており、狩人でもあり釣り人でもあった彼女がその道具作りにも優れていたことを伝えている。翻って本邦では古くから釣竿には竹が使用されてきたが、それは主に丸竹をそのまま使う竿であり、錦織の『ザ・ヒストリー・オブ・バンブーフライロッド』にもあるとおり⁷、スプリットケーン（割竹）を本格的に採用したのは比較的最近の西洋文化に由来を求めざるを得ない。錦織によると、19 世紀中頃、アメリカ東海岸ペンシルバニア在住の鉄砲鍛冶サミュエル・フィリップが初めてスピリットケーンを使った（2 片や 4 片の構造による）釣竿を制作し、サミュエルの息子ソロンが 6 片構造の竿を組み上げた、としている。そこから南北戦争の混乱の中、6 片の竹を六角に組み合わせた後丸く削った竹竿が各メーカーに採用されて主流になっていったという。その後、毛鉤の進化（ドライフライ化）と共に、釣竿も進化し、ハイラム・レナードが今でも残る釣竿の名門レナード社を立ち上げ、そこで 6 片六角構造のまま竿を完成とした方が丈夫な上に希少な竹材料（当時はインド産の通称カルカッタケーン）のロスが少ない事を発見したという。そこから 20 世紀初頭（1900 年前後）までに現在の六角竿に近い形は完成されたようだ。

一方、同時期の日本には、先述の『捕採誌』に「西洋竿」の紹介として、この六角竿の図解と構造解説が「(欧米には) 最も上品にして最も高價なるは竹を劈り（わり）膠を以て矧ぎ合せ六角に作りたる竿なり」と推奨されている⁸。明治 28 年（1895）に調査が行われた同書に書かれたこの記述は、当時の先進国に学んだ最新技術の紹介であったという事なのだろう。こうした技術の交流と蓄積が、戦前期の日本における六角竿の普及と、戦後の米軍おみやげ用六角竿ブームに繋がっていったのではないかと想像する事が出来る。

さて、ここで本邦の六角竿の発展に注目すると、まず意識しなければならないのは雑誌

『フライの雑誌』などで「日本の六角竿の祖」と称される多田一松の存在だ。多田はその死の4年前である昭和62年（1987）に「戦後、アメリカの進駐軍がおみやげに買った六角竿、輸出用として仕上げられたフライロッドは、もとをたどるとすべて多田さんが削って貼り合わせた素材（ブランク）である」と紹介され⁹、その後も度々「日本の六角竿の祖」とされ、日本の六角竿のすべてに関わった、という印象が強い。また、多田の孫弟子（弟子の平田真人の教え子）である村田孝二郎も『バンブーロッドのいま』で「多田さんは日本で初めて六角の竹竿を作った人です」と語っている¹⁰。渡渉舎やフライの雑誌社等多くの釣り雑誌社はこの六角竿多田起源説を採用しているようで、ことあるごとにこの多田を日本の六角竿の元祖とする文言は出てくる。しかし、宣伝文句として、あるいはそうした気概の発露としての発言であるのならばともかく、現実には、海外にまで大規模に販売をしていた日本全国全ての釣竿がたった一人の手によるものとは正直考えにくい。

例えば、同じ『バンブーロッドのいま』において、多田の直接の弟子である平田は、多田起源説を具体的には唱えていない¹¹。あくまでも多田は六角竿初期、戦前期から和竿の名家である5代目東作と共に、あるいはその後継である6代目東作への指導者として、六角竿、特にそれを作るための機械作りに取り組んでいた、という内容で書かれている。

六角竿制作を行っていた多田釣具製作所がかつては大規模で「当時は50人のスタッフを抱えていた」と平田が回想する通り、多田が戦後六角竿の基礎を作った一人であり、初期のフロンティア（開拓者）の中でも特に重要な一名であったことに疑いはない。しかし実際には『フライの雑誌』に書かれたような「すべての六角竿の祖」や「戦後すべての六角竿に何らかの形で関わった」などということはなく、あくまでもフロンティアの中の特に重要な開拓者の一人であった、とする方が自然だろう。

日本の六角竿の歴史を考えると、明治28年（1895）調査、明治43年（1910）刊である前述の『捕採誌』こそ初めて公的に六角竿について触れられた書の一つと類推するのは、本場米国での六角竿開発の時期的に見ても間違いが無いだろう¹²。

そこから、筆者が大正～昭和初期の雑誌を特に広告や新商品記事を中心に調査したと

ころ『釣之研究』誌、昭和 3 年（1928）9 月号に「和製洋竿」の記事として「2～3 年かかって、六角竹製のフィッシングロッドをうまく作り上げたものが神戸にできた」と、西洋に負けない六角竿をついに日本でも作り始めたとする記事がある¹³。ここでは「最低 50 本の発注」で「神戸のデパートの受注会」での発表とあったので、かなり大規模な六角竿制作規模であったようだ。

なお、これに関して多田は上記昭和 62 年（1987）の『フライの雑誌』記事において「昭和 5 年ごろデパートの三越が六角竿（フライロッド）を是非扱いたいというので二回ほど竿を納めた。しかしそれは（中略）既に六角に仕上げたブランクを入れ、その釣具屋が仕上げるという形だったので（中略）あまり面白くなく二回でやめてしまった」と竿作り初期の思い出を述べている¹⁴。

このことから、昭和 3 年（1928）には日本国内においても六角竿の産業化が始まっており、その 2 年後の昭和 5 年（1930）には、ブランク（六角の竹竿素材）のみを納入要求されるような分業制を用意した六角竿の量産体制が日本全国的に整いつつあったと推測できる。またその産業規模は、当時朝日新聞社の若手社員だった多田が副業として休日に作ったものでも喫緊の需要があるような、大きい盛り上がりを見せるものであったことが窺える。

多田によるこの昭和 5 年（1930）の三越との取引はさらに 2 年ほど後まで継続したようで、多田は昭和 21 年（1946）9 月の『月刊つり人』誌に「（15 年前から 2 年をかけて）常時三越の伊藤氏がいろいろと助言やら指導やら、御骨折り下さって現在の『六角洋式竿』とまで名を付けられる段階に進んできたことを私は感謝し、欣ばなければならない」と感謝の意を述べている¹⁵。この文面からも、三越などデパート主体での六角竿の産業が戦前期に既にあり、デパートのスタッフがその産業に向けて若き多田を導いていた様子が窺い知れる。

本邦の竿の発展を語る上で、欧米、特に米国向けの輸出は欠かせない要素である。

事実、六角竿の初出である『捕採誌』においても竿の輸出についての記述が見られる。

竿の輸出数は「東京にて製するもののみにても十五六萬本に至る」とあり、おそらく全国では毎年数十万本に及ぶ輸出数があったことが読み取れる¹⁶。特に前述の通り六角竿は特に高級竿とされていたので、輸入による高級品需要に対しての制作の割合が大きかった様子がある。

輸出に対する記述を中心に 1930 年代の釣雑誌各誌の広告を追いかけると、昭和 5 年（1930）10 月にはまず「泰地屋東作（東作本店）」が新宿三越デパートに釣具売り場を設置したことを『釣之研究』誌に大々的に広告しており¹⁷、国内富裕層や外国人訪問者への販売を意識し始めていることがわかる。

同じく輸出向けの明記としては、『釣之研究』誌、昭和 7 年（1932）5 月号には石井仲蔵商店が輸出向竿の日本語広告を内地向け兼用で出しており¹⁸、また同社が昭和 8 年（1933）の『水の趣味』誌にも同様の輸出向け及び内地向け両用の広告を打っているところから¹⁹、この時期には日本国産の竿の輸出が大規模に行われていたことを窺わせる。

六角竿に関しては『釣之研究』誌、昭和 10 年（1935）5 月号からその表記が始まる²⁰。広告主は和竿の大家「東作」であり、そこには「大好評 西洋式六角竿 リール竿 海釣に日光の鱒釣には 是非お試し下さい」の文字が躍る。21 世紀の今現在の、和竿一本槍の古式ゆかしい印象の東作からは考えも付かないことだが、この当時はあくまでも東作も竿制作者のうちの 1 者であり、こうした新しい竿にも果敢にチャレンジしていたことが窺える。東作の広告を皮切りに、『釣之研究』誌、同年 8 月号には「針正本正」名義での「舶来品をマスターして完成せる兜印リール竿」を広告²¹、翌 9 月号には今度は「荒井商店」が「六角竿新発売」と広告をしている²²。「針正本正」のこれはおそらく広告の体裁などから同誌に広告を継続的に出している「針正本店」の誤字であろうが、通常ならば念入りにチェックされる筈の広告出稿で、よりにもよって店舗名に誤字があることから、この当時の六角竿にかかる興奮と速報性が伝わってくる。この六角竿は速やかに輸出向けにも投入されたようで、翌昭和 11 年（1936）3 月号には²³、石井仲蔵商店の「輸出向六角竿」の表記の広告がある。同誌の同年 6 月号には、後述する現存の神田にある釣具の製

造販売店舗「釣具の櫻井」による「六角リール竿」の広告も出稿されており²⁴、既にこの時期には国内においても六角竿の制作販売が一般化していた様子が窺える。特に後述の取材にあるように「釣具の櫻井」は和竿師を2系統抱える老舗の製造元でもあり、六角竿の製造が各社に浸透し、量産されていたことが窺える。

同時期には竿のみではなく、リールについての広告も増えた。具体的には昭和10年（1935）以降、雑誌本文でも「車竿リール竿」の記事が増えている。一例を挙げると『釣之研究』誌、昭和10年（1935）5月号では「青山信次郎商店」が「竿富」の号で「明治初年ノ釣竿師 車竿元祖欧米最新型リール各種新荷着」と広告している²⁵。なお、この「青山信次郎商店」の広告からは、リール竿は明治期より販売されていたことがうかがえ、これは水産捕採誌の記述を裏付ける。

記事においても例えば同『釣之研究』誌、同年5月号では増田潔が「豪快な北米の海釣」と題して3頁の紙面を割いて北米の六角竿によるリール釣の紹介をしており²⁶、また、同誌同年10月号では「車竿の認識」という記事で中西英彦がリールの扱いについての記事を4頁もの誌面を使って書いており²⁷、この時期に西洋式の釣具が大いに注目されていたことは間違いが無いだろう。

また、こうした西洋釣法に関する紙面記事は戦中まで続き、例えば同『釣之研究』誌昭和18年（1943）6月号には「奉天の釣便り」として山本魚人によるハヤやタナゴなどの「婦人や子供の釣」の他に「ヤマベや特有の縞虹姫鱒など」の本格的な釣も楽しめる、と寄稿している²⁸。

以上から、昭和10～11年（1935～36）にかけて、本邦において六角竿の最初の普及期が発生していた、ということが判断できる。またその普及は単なる一時的なブームではなく、高級西洋竿として一般にも普及していたことが窺える。

第2節 戦後六角竿ブームと米軍

第1小節 戦後、進駐軍に向けての六角竿制作の興隆

前節で述べた第 1 回目続く 2 回目の六角竿普及は戦後と考えられる。

ただし、これは 1 回目と明確な境目のある 2 回目の普及というよりも、昭和 10 年（1935）頃から続く本邦の本格的な六角竿制作が戦争激化で中断し、その後その文化が敗戦によって占領軍に知られ、お土産物として生産量が急増し、クオリティの低さに飽きられて低調化し、やがてグラスロッドに取って代わられる過程、と言ってもいいだろう。

『フライの雑誌』61 号の記事「日本のフライフィッシングの軌跡 フライフィッシング夜明けの頃からの釣具業界ウラ話」によると²⁹、戦後のフライフィッシング、即ち六角竿の展開は「つるや釣具店」からスタートしたという。そこでは「進駐軍相手の「おみやげ用バンブーロッド」が売れまくった」「（昭和 24 年頃は）みんなが食べるのもやっとなで、釣りを愉しもうというふんいきじゃなかった（中略）だからお店で扱う商品は、進駐軍相手のおみやげものが中心でした」と元同店店員の斎藤英雄が語っている。

同記事の斎藤の談によると「朝日新聞の記者をやっていた多田一松さんが戦後に六角竿を専業で作り始めた。多田さんが指導していた NFT（日本フィッシングタックル）は、世田谷三宿の連兵場あとを工場にして六角竿を作り出した。進駐軍相手の六角竿がもうかると聞いて、それまで和竿を作っていたメーカーがみんな参入してきた。NFT のあとにエビスフィッシングができた。エビスの前身は竿常という和竿師だった。喜楽釣具も元は和竿師だ。喜楽釣具のトレードマークは「グランパス」。「グランパス」は、常見保彦さんの「常見商店」が総代理店をやっていた。（中略）神田の櫻井漁具の「サクラ」という竿もあった」とのことで、当時の六角竿の制作再開とその興隆が伝わる。

また釣り場については「まず日光の湯川と湯の湖、それに山梨県の忍野川です。（中略）後は富士川支流の芝川の上流（中略）養沢はもっと後で（1955 年開業）鈴木魚心と米地南嶺、それに GHQ の弁護士だったトーマス＝ブレイクモアで養沢を作った。（中略）養沢（養沢毛鉤専用釣場）が国際釣り場としては国内で最初だった」と記事にある。

そこで、これらの列記の中から現存する「神田釣具の櫻井」へ取材した。同店への取材では、売り場入り口に飾ってある戦後輸出向けコンビネーションロッドの話題から、戦前

期の生産、戦後の状況について伺った。また「神田釣具の櫻井」に続き、釣り場として、養沢毛鉤専用釣場にも取材したのは第2章に前述の通りである。

これらの取材については第2論で考察したとおり、本邦における六角竿の発展経緯を考えると、敗戦後の占領軍～在日米軍相手のお土産釣竿の大ブームの重要性と、釣り文化が米国関係者の関与によって大きく様変わりした過程に気づかざるを得ない。

第2小節 六角竿ブームの終焉と現代の六角竿

前述の『フライの雑誌』61号の座談会記事に拠れば³⁰、こうした六角竿のブームは静かに終わり「東京オリンピックの頃」には「グラスロッドが飛ぶように売れた」「値段が毎晩上がって値札付けが大変だった」「竹竿だってそうだった」という状況になっていたようだ。この時代についての会話がグラスロッド、即ちガラス繊維で強化されたプラスチックレジン製の釣竿の話題についてばかりになるということは、つまり、昭和40年代前後（1960年代中盤）には、グラスロッドが主流となり、六角竿は竹竿の一部としてあくまでもおまけであったことを意味していると考えていいだろう。

また、同時代の雑誌広告や記事を追いかけて見ても、六角竿の文字はグラスロッドの登場と共に消えていったことがわかる。例えば『月刊つり人』の昭和37年（1962）5月号を見ると、「大西釣具店」の大きい広告には「魚集、東作、竿正、矢半田、丸正他」と和竿の名前が並び、また「NFT グラスロッド振り出し竿とリール竿」とグラスロッドの名前が並ぶが、六角竿の名前は既に見ることが出来なくなっている³¹。さらには令和4年（2022）現在においてはそのグラスロッドも、カーボンロッド（グラファイト製ロッド）の登場によって消えて行ったようで、現在の釣具店店舗には³²、数千円以下の極めて安価な製品の他にはグラスロッドはほとんど見られなくなっている。

このあたりは現在進行形の事象であるため後年さらなる調査研究が必要になるが、六角竿はより安価なグラスロッドに押されて消えていったのではないかと、という状況が垣間見える。しかし、ここで注目すべきは、六角竿は現代の主流であるカーボンロッド（グラフ

ァイトロッド）とは直接的に性能対抗はしていない、という点だ。あくまでもその前身のグラスロッドに価格格的、量産体制的に押されて消えたものであるため、性能においては現代でも通用する可能性は十分にあるのではないだろうか。そうした性能面でのアドバンテージを失っていないことが、西洋フライフィッシングにおけるバンブーロッドの六角竹竿の現存を、高級性、優位性に優れた竿として許容してきたのではないだろうか。

第3節 六角竿の実際

第1小節 ゲイシャロッドと野鯉竿

本研究に際し、戦前の六角竿は入手できなかったが、戦直後の竿はいくつか入手することが出来た。

第一に「ゲイシャロッド」のブランク（六角素材）現物をバンブーフライロッドメーカーであり、日本最大手の治具メーカーでもある（株）レオン三浦洋一代表から入手することが出来た（写真3）。

第二にこれはネットオークションにおいて、野鯉釣り用の太い六角リール竿を入手することが出来た（写真4）。

完成途中品、あるいは六角竿部分のサンプル品と思われる「ゲイシャロッド」を見て見ると、極めて細い作りだが、穂先は太く、また、しなりもほとんど無い。中の竹を見て見ると焦げ茶色できちんと火は通っていそうだが、色は非常に茶色く、火を通しすぎて堅くなっている印象がある。表面の漆は丁寧で一応ピアノフィニッシュの光沢や、研ぎ出しの模様はあるが、模様は均一で、いかにも大量生産された気配がある。また、金箔などの高級素材は一切使っていないし、螺鈿など手間のかかる素材違いも使用していない。

漆を研ぎ出した間違いなくそれなりの「高級品」の作りではあるものの、釣竿としての実用は望めない。また、高級品といっても金箔などの高級素材は使っていない程度であることがわかる。あくまでもお土産物としての竿である、と言っていいだろう。

もう一方の野鯉竿に関しては、現代での実用は困難だ。野鯉に限らず大物の魚は現代河

川においてはほとんど生息せず、実釣は出来ないためだ。しかし、これも振ってみると、非常に堅く、実用性には乏しいといわざるを得ない。現代におけるフライロッド用バンブーロッドが、カーボンロッド（グラファイトロッド）に負けず劣らずの高性能を発揮しているのとは大きな差を感じる。試しに筆者が制作した重い番手のバンブーロッドと振り比べてみても、この野鯉竿は明らかにしなりが悪い。

実物に触れると確かにこれは、六角竿がグラスロッドに負けていった過程が実感できる。

ただし、上記の通り、筆者の作った竿に限らず、現代のフライフィッシング用のバンブーロッドはこうした低性能品では無く、現代の最先端カーボンロッドに負けず劣らずの性能を持つものだ。

この性能差を埋めることが、六角竿の再普及などを考えたときには大きなポイントとなると考えられる。

第2小節 2種類の「トンキンケーン」

六角竿の発展を語る上で欠かすことが出来ないのが、その材料である竹の種類だ。

多田一松は自らの経営する「多田釣具製作所」の竿に同封した説明文において、同社製の竿は「ベトナムのマイロ竹」だと広報したが（写真 5）、そのような名前の竹は日本や中国の竹図鑑には存在せず、これは多田が商売上名付けた竹の名前であることが窺える。

多くの場合、バンブーロッドに適した竹は「トンキンケーン（Tonkin Cane）」である、とフライフィッシングの本には書かれており、例えば前述の錦織の『ザ・ヒストリー・オブ・バンブーフライロッド』をはじめとする多くの書籍には“*Arundinaria amabilis*”（チャカンチク）がトンキンケーンである、と書かれている³³。しかし、日本で「チャカンチク」といえば、安価な矢軸や掛け軸の上下に使う赤みを帯びた（乾燥すると濃い茶色になる）太さ1センチ程度の矢竹に似た篠竹の事であり³⁴、フライロッド制作に頻繁に使われる8～15センチの太さの肉厚な「トンキンケーン」とは似ても似つかない。

さて、そこで、実際に中国にネット通販（Ali Express）を通じて「Tonkin Cane」を

発注すると、1～2センチ程度の太さの茶色い篠類の竹と³⁵、8～15センチ程度の太さの薄茶色の肉厚な竹³⁶、2種類の竹のいずれかが届く（写真6）。

到着したものを確認してみると、細い竹は間違いなく日本で分類するところの「チャカンチク“*Arundinaria amabilis*”」だが、これは明らかに広く六角竿の原料として使われている竹ではない。

結論から述べると、割り裂いて釣竿に使われるもう一方の太い竹が“*Pseudosasa amabilis*”という学名の「厘竹」であり、明らかにこれが竹竿作りに使われている竹である。

この混同の原因を追いかけてみると、錦織が参考文献としているギャリソンとカーマイケルの『*A Master's Guide to Building a Bamboo Fly Rod*』冒頭において³⁷、両者を誤認して混同している事がわかった。

両者は同じ（McClure）*Keng f.*の発見者学名であり、同じ McClure 博士の発見だが、「Smithsonian National Museum of Natural History」のホームページによると“*Arundinaria amabilis*”は1925年4月収集の小ぶりの笹類であり、1932年4月収集の大ぶりの竹である“*Pseudosasa amabilis*”とは発見時期も大きさも違う³⁸。

竹の学名にある属名“*Pseudosasa*”とは、日本における矢竹属の分類だが、日本の矢竹は直径1～2センチ程度の細い篠竹であり、直径8～15センチのトンキンケーンとは大きさが大分異なる。しかし輸入されてきた「トンキンケーン」をよく見ると、その一重の節の付き方は確かに似通っている。

日本のタケ亜科植物（原色植物分類図鑑）に拠れば、矢竹属は女竹などと交雑して大型化することが知られている³⁹。埼玉県荒川上流域昭和50年（1975）刊『汀石竿談義』に登場する大型の矢竹亜種、通称「おばけ」竹などは、この交雑種であると考えられる⁴⁰。肉厚な「おばけ」竹は釣竿に適した性質を持つとされ、珍重されてきた。おそらく“*Pseudosasa amabilis*”も、こうした「お化け」竹に近い性質の大型の矢竹属であろう。

また、矢竹属の竹類を台湾のネット植物辞典で調べて見ると、トンキンケーンの輸入

を手がける(株)レオン三浦洋一代表が福建省で撮影した「トンキンケーン (Tonkin Cane)」生産現地の写真と全く同様の竹が同じ“*Pseudosasa amabilis*”の学名で見つかる(写真 7)。これが「厘竹」だ。「厘竹」は別名を「鋼竹」と呼び、非常に強く弾力があり、釣竿に使用され、別名の一つに「Tonkin Cane」がある、と記されている⁴¹。

ここから、2 種類の竹のうち、矢竹属の“*Pseudosasa amabilis*”、即ち台湾呼びの矢竹属「厘竹」こそがトンキンケーンであると考えられる。

なお、中国本土の竹類辞典を引くと、中国本土では「厘竹」の分類はなくそれらは「茶幹竹(幹は簡体字)」の名称になっている⁴²。この「茶幹竹」の分類内訳を追って行くと“*Pseudosasa*”属、即ち矢竹属を「茶幹竹属」と呼称していることがわかる。日本に多い「矢竹」を中心とした分類とするのを嫌って独自の属分類として、世界的に著名な“*Pseudosasa amabilis*”を中心とした「茶幹竹属」の呼称をしているようだ。発見時期や台湾の辞典との齟齬を見るに、おそらくは政治的都合による「厘竹」からの呼称変更の様子も見られる。おそらくこれがギャリソンの本における“*Arundinaria amabilis*”との学名混乱の直接的理由であろう⁴³。

なお中国本土の竹類辞典では“*Pseudosasa amabilis*”には「福建亜種“*Pseudosasa amabilis*(McClure)Keng f.var.convexa Z.P.Wang et G.H. Ye”」として、“*Pseudosasa amabilis*”の亜種が紹介されており⁴⁴、学名“*Pseudosasa amabilis*”、台湾名「厘竹」、中国語名「茶幹竹」の中でも、おそらくこれが世界的に流通している「トンキンケーン (Tonkin Cane)」そのものであると考えられる。

小結

戦前の釣りの専門研究家である中西秀彦は「釣は藝術」として 1930 年『釣之研究』誌に、釣りの芸術性に関する記事を寄せている⁴⁵。曰く「古代釣するに鹿の角をその針に用いた」と経済学者の金井博士が講義で延べたところ、学生が一斉に笑い飛ばしたそうだ。鹿の角のような巨大で脆いものでどうやって魚を釣るのだ、というのだそうだ。しかし中

西はこれを「笑い事ではない」と断じる。「鹿の角を切ったり曲げたり削ったり心根を打ち込んでああでもないこうでもない工夫して作り上げる鹿の角の針、それ自体が己に藝術だ」と評した。

釣り行為そのものの芸術性は賛否あろうが、工夫を凝らされた釣具の芸術性や、そうした釣具を通して方向付けられた感動がある事は誰にも否定はできない。

芸術性の高い釣具としては和竿が挙げられるが、手を加えて美しく実用的な竿を成すという点においては、六角竿も芸術性を強く持つ釣具に分類しても良いのではないだろうか。

残念ながら、六角竿は、現在日本においてはフライロッドに主に見られ、他の竿種ではなかなか見かけない。その衰退の原因は、以上の本稿からわかるとおり、竹素材の種類やその扱い方に拠る性能の不足に主に理由がある可能性が高い。中でも肝心の原材料の竹種別の混乱は、輸出入を経由する兼ね合いもあり、本稿で明らかにしたとおり現状でも続いている事態である。

しかし、適切な竹を選び、十分に乾燥させた上で加熱処理や削り厚みなどに適切な処理を行えば国産の竹であっても十分に使用が可能である点も最後に付け加えておきたい。

確かに堅くて繊維層（パワーファイバー）の薄い竹を無理に使えばしなりのない重いだけの六角竿ができあがってしまう。しかし、素材豊富な本邦においては素材を十分に厳選できるため、真竹や孟宗竹、あるいは矢竹であったとしても、素材の個体差で繊維層の厚い竹は選択できるため、六角竿フライロッドも十分に実用的である。

事実、前述の釣具の櫻井では、戦後の六角竿ブームの時の原料竹は「輸入の記録が残っていないので国産の孟宗竹か真竹、おそらくは孟宗竹」であり、そうした国産竹による柔らかい調子（竿の曲がり具合）が他社に比べての成功の要因とのことであった。

また、(株)レオン三浦洋一代表の作るバンブーロッドは10年以上寝かせた真竹を選択でき、古竹特有の固く締まったしなりによって、実用的な竿を提供している。筆者の制作においても12年寝かせた真竹を使った制作例では、トンキンケーン“*Pseudosasa amabilis*(McClure)*Keng f.var.convexa* Z.P.Wang et G.H. Ye”製に劣らない竿が制作出

来た（写真 8）。

このことから、今後の六角竿制作においては、日本国産素材を使う際には厳選した材料を使えば、十分に実用的な竿を作れる可能性が高い。

こういった竹をどのように使えば実用的であるのかは、今後の重要な研究課題と言えるだろう。

様々な材料による六角竿を様々な手法で実際に制作しつつ、材料竹ごとのおおまかな曲げ強度なども併せて調査をして行きたい。

結論 釣竿に見る「用の美」 ―明治以降の六角竿、その興隆と衰退そして可能性―¹

第1節 遊びと仕事との関連性から見る釣りの「用の美」

第1小節 釣りの「用」とはなにか

ここまでの論において、「テンカラ竿」を中心とする和竿、日本の戦前戦後～高度経済成長期直前の釣りの状況、そして「六角竿」を中心とした昭和の釣り史について論じてきた。

釣りは現代日本における生活者においても休日のアウトドア生活の一環として、あるいは管理釣り場や都市部のプールフィッシングなどの食べられるレジャーの一環として生活に密着しており、釣竿は今も尚重要な民具であると言える。

民具としての釣竿は言うまでも無く第一義に「魚を釣る」という「用」を持つ。また、美しい仕上がり的高级竿は飾って展示される事も多いところから、器などと同じく「鑑賞する」という「鑑賞の用」も明らかに有しているだろう。

「魚を釣る」という「用」を分解してみると「魚を獲る」という行為と「釣り」という行為に分けられる。前者は食糧確保の行為だが、後者はコンピュータ上や、あるいはおもちゃでの釣りゲームが食糧の有無に関係無く成立することからわかるとおり、それ単独で成立する行為である。筆者も作品展の片隅で度々子供向けのマグネット釣りゲームを応用した作品竿での釣りゲームを展示しているが（写真 1）、景品としての燻製魚の有無にかかわらず展示会では毎回人気のある展示物となっている。この事例からは、食糧確保からも、それどころか実際の魚の存在からすらも独立して「釣り」という行為そのものが「用」の要素として成立していること、即ち、ただ竿を振って目標点に仕掛けを落として引き上げる、という「釣り」という行為そのものがなんらかの感動を呼び起こす、つまり第3章で戦前の釣り専門家中西秀彦の言葉を借りて指摘した様に「釣り」が単独で芸術性を持つことを示しているといえよう。

「用」のエッセンスのうち、後者の「鑑賞の用」に関しては和竿の様な入念な漆塗りの竿は十分に機能を果たしていると言えるだろう。たとえば「バンブーロード」の名称で竹

製の六角竿が米英欧のアウトドア趣味の人々の居間に飾られている事実からは、丁寧に作られた六角竿がそれ単独でも「鑑賞の用」に耐えることを示している。このことからそこから、例えば、和竿の漆技術を用いた竹製六角竿もまた、「鑑賞の用」を持つ可能性が十分にあるといえよう。

第2小節 「釣りの用」における「振動」という鑑賞

前者の「釣り」単独の「用」を竿の実制作に伴って分析してみると、仕掛けの振り込み時や、あるいは獲物の取り込み時に手に伝わる「振動」も「釣りの用」の重要な感動のエッセンスであることに気が付く。日本の障害者向け美術館鑑賞運動で活躍するジュリア・カセムはその著書『光の中へ』で「全盲者」であっても「晴眼者」であっても最終的には「心内地図」で世界を再解釈しているため、全盲者であったとしてもその心内地図製作のサポートさえあれば美術館鑑賞は、豊かな解釈と創造的プロセスを得る、としている²。釣りの場合にも、投げ込まれた糸の先にある水面の向こうの见えない世界を解釈するには、この「心内地図」を個々人が制作し再解釈していると考え、釣りの感動を理解するのに妥当だ。その「心内地図」の制作において、竿のもたらす振動の機微、あるいは振動そのものの快不快というのは大きな構築素材、あるいは世界探求のための触覚となり得る。事実、展示会では竿を手にした人が糸も針も何も付けずにただ竿を振ってその振動に酔いしれる姿を目にすることができる。また、このように振動を楽しむ姿はまさに「芸術鑑賞」そのものであるといえるだろう。

柳宗悦は著書『民と美』の「用と美」の章で「感覚のうち触覚と視覚とが、如何に用途に働くかを見た。だが之に加へ、屢々他の感覚も交わってくる。聴覚も決して怠惰ではない（中略）嗅覚も時としては用を助けてくれる」等と、視覚以外の美の要素について語っているが³、そもそも「芸術」とは目に見えるものだけを指す言葉では無いことは当然であり、音楽や朗読、あるいは芸術環境そのものが芸術として成立し得る。そこから、この釣竿の「振動」も「釣りの用」を成立させる芸術の一つの要素、あるいは鑑賞の手法と

して認識して制作に当たるべきであろう。

第3小節 六角竿の興隆と衰退

六角竿は、米英においては「バンブーロッド (Bamboo Rods)」の名前で現代でも高級竿として現代もなお作り続けられている。欧州においてもビヤーネ・フリース (Bjarne Fries) が「FIBH」として竹フェルール六角竿製法を編み出し、彼の作った高級竹竿は1990年代～2000年代に一大ブームとなった⁴。

日本における六角竿の興隆については、第3章で述べたとおりである。従来は雑誌などでは敗戦とGHQのお土産による好景気ばかりが注目されていたが、本研究の結果、実際には米国でのレナードらによる六角竿の完成直後の明治28年(1895)には『水産捕採誌 釣魚編』などによって本邦にも六角竿の存在が伝えられ、そこから昭和3年(1928)には神戸のデパートにて展示商談会が開かれ、昭和10年(1935)には釣り雑誌に各メーカーから広告が大々的に打たれる一大ブームとなっていた事が明らかとなった。同年昭和10年(1935)には和竿の大家である東作(本家東作店舗)による六角竿の広告が掲載されている。和竿単独商売の古式ゆかしい印象のある21世紀現代の東作店舗からは想像しがたいが、七代目東作(世襲名)に取材したところ「六角竿は当時朝日新聞記者だった多田一松のアイディア等があり、当時の四代目東作が製作を開始し、焼き入れや製造の工程などを指導し、東作で売り出したようだ」とのことで、事実であるようだ。六角竿とは伝統和竿を主な商品とする東作一門ですら動かす、当時は相当にインパクトのある釣竿だったのであろう(写真2)。

戦後GHQのお土産物六角竿ブームは敗戦を機に唐突に発生したわけではなく、こうした戦前の和製六角竿の評判が良かったところから、その記憶があった米国将兵の間で話題となってお土産物としてブームになったと考えるのが自然だ。

六角竿衰退の理由についても同じく第3章にまとめたとおり、雑誌などでは六角竿がグラスロッドの性能に負けたあるいは入れ替わっていった、という記載があるが、十分に計

画されて作られた六角竿では性能面がグラスロッドには劣っているとは言いがたいため、コスト面や、何よりも自然素材故の不安定さや実製品性能のレベルの低さに起因しているのでは無いかと推察された。第2章に取材した「進駐軍のお土産ブームに乗って製造販売された他社六角竿製品は実用に耐えない見た目だけのロッド」であった、という釣具の櫻井の取材での言葉は重要な証言である。実用の質を保った竹製六角竿を作り続けていたならば、日本の六角竿も、米英欧の「バンブーロッド」のように高級品としての地位を保ったまま現代に残っていたのではないかと思われる。

第2節 六角竿の可能性

第1小節 六角竿の製法と新しい六角竿製法の試行

研究のまとめとして、六角竿の今後の可能性について論じておきたい。

繰り返しになるが米英欧において六角竿は高級釣竿として脈々と作り続けられており、日本においても六角竿の高級竿としての復権は十分に考えられる。

そもそも日本は竹の産地であり、米欧のバンブーロッドビルダー（六角竿制作者）たちは、わざわざ日本にやってきて習字を習い、日本風の装丁の技術専門書を刊行するなどしている⁵。しかしながら、彼らがわざわざやってくる日本の側には、国の特産品である竹製の六角竿の製法が十分に広まっていないのである。これには改善の余地があると言えるだろう。

現代の日本においてはカーボンロッド（グラファイトロッド）が市場の大半を占めており、雑誌広告などにおいても竹製の六角竿を見る機会はほとんどない。単に見栄えが良いという「鑑賞の美」だけでなく、性能で勝る、あるいは釣り味が良い、手に伝わる振動が良い、などの「釣りの用」に優れていることが竹製の六角竿の復権には必要だろう。

六角竿の可能性を製法から考えた時、真っ先に克服すべき六角竿の一番の弱点は、竹を使っていない部分、即ちフェルール（金属による接合）部分だ。ジャーマンシルバー（ニッケル合金）を使った金属フェルールは非常に丈夫で優れた六角竿を作り出す接続部製法

ではあるが、当然ながら竹に比べて柔軟性に圧倒的に欠け、また竹との接合部にはどうしても竹繊維の削り込みや接着など、竹の繊維の力を断ち切る工作が必須となる。その繊維の断裂は単に竿のしなりを損なうだけでなく、破損や浸水腐敗の原因にもなる。

この六角竿の問題を解決する製法の一例として、筆者は 2022 年に「漆竹フェルール（漆による強化を行った竹フェルール六角竿製法）」の手法を考案し、制作を行った。

金属の継ぎパーツを使わない竹製フェルールは、日本の和竿師中村羽舟がフライ&フックデザイナーの島崎憲司郎との雑談の中で発想した事を実現したものが最初であり、そこから世界に広まった手法である。日本の数少ない竹製フライロッド治具メーカーの「レオン」を主催する三浦洋一は、中村羽舟の手法を応用し、竹片一本一本を接着前に整形して削り込む「一体型竹フェルール」を考案した。この三浦の設計は、同じく中村羽舟の竹フェルールから独自の一体型竹フェルールを開発したビヤーネ・フリース (Bjarne Fries) の FIBH の設計に比べ、竹の厚みが少なく、継ぎ部分の強度は竹の構造では無く巻き糸に頼ったものとなっている。これを指して三浦は「和竿は竹の皮と糸だけを漆で固めて継ぎ口の構造を作る。僕の（竹フェ_RULEの）やり方はフリースのしっかりとした竹構造に頼った継ぎ口では無く、師匠である中村羽舟の和竿の制作手法に学んだものだ」としている。ただし、三浦は漆の扱いを中村羽舟に学ばなかったため、エポキシ前提での製作設計となっている。

筆者の開発した「漆竹フェルール」の手法は、この三浦の手法をさらに進歩させ、和竿の手法で継ぎ部分の長さを 6 センチ以上と深く加工し（三浦は金属フェルールと同じ 1〜1.5 インチ強、即ち 2.5cm〜4cm 弱の継ぎ部分）、巻き糸を絹糸として最初に瀬漆による「絞り」を行って絹糸を横向きの繊維として竹に密着させ、漆との積層によって丈夫な樹脂製の接続部分を成形するものだ。このメリットとして、フェルール部分の軽量化、しなりの維持の他に、和竿の手法で漆の飾り塗りが出来る為「鑑賞の用」も満たすことが出来るという点が大きい。また、竿全体も拭き漆手法で表面から強化できる。特に穂先部分を糸巻してから漆塗りすると、軽量でありながら丈夫さと柔軟性を兼ね備えた穂先に仕上が

る。

これらの継ぎ部分の工法については、その特徴を図解した（図表 1）。

第 2 小節 孟宗竹による竹害と、孟宗竹による六角竿の制作

現代における放置竹林の害について第 2 章第 3 節で触れたが、その害の主役は竹材が柔らかく、タケノコが食用に向く「孟宗竹」のコントロール不能なほどの増加によるものである。真竹はその丈夫さと加工特性から成竹の用途が多岐にわたるため伐採後の用途もあるが、主にタケノコの収穫目的で植えられている柔らかい孟宗竹にはそうした用途が少ないため伐採の経済的動機が少ないことが孟宗竹による放置竹林問題の原因の一つではないかと考えられる。

しかし、竿材料としてみた場合、孟宗竹自体は、同じく第 2 章第 3 説などに触れたとおり、竹竿の材料として戦前から海外に出荷されており、また、孟宗竹を用いた六角竿が現代においてもおそらく成立するであろう事は想像に難くない。

そこで、本研究の成果を活用しつつ、実際に孟宗竹によるテンカラ竿を制作した。

竹材は、京都府舞鶴市布敷地区内の池姫神社境内の軒下に数年間保管されていた孟宗竹を用い、それを 32 分割に割り裂いてから三角形のストリップに加工し、6 本組み合わせ接着することで竿の形とする通常の六角竿の制作手法を採った。節の数が多いため長め 2 本組みにて設計し、節が重ならないように各ストリップを 4cm ずつずらして接着を行った。

竿の性質としては極めて柔軟ではあるが、十分な丈夫さを持ち、竿全体で曲がる軟調胴調子のテンカラ竿となった。図版を見てわかるとおり必要十分な竿が完成したと言える（写真 3）。この制作成果により、六角竿の制作を再び広めることには孟宗竹の利用活性化ともなり得るという展望を見出すことができた。たとえば材料の孟宗竹の提供を受けた池姫神社への本竿の奉納をきっかけとして孟宗竹の放置問題への取り組みを地区に提案するなど、実現に向けた活動への展開などが考えられる。

第3小節 民具としての釣竿、その「用の美」

本章第1節で述べたとおり釣り具は間違いなく民具であり、その「用」は「魚を釣るという用」と「鑑賞の用」とに二分される。前者の「魚を釣るという用」は食糧確保の「魚を獲る用」と釣りそのものの「釣りの用」とに分かれ、本論文では後者を追求してきた。現代における「用」とは何かについて考えたとき、食糧確保としての「魚を獲る用」についての今後の可能性も無視は出来ない。特にリモートワークの発展による半田舎暮らしの発展や、分散した業務時間の合間での半遊び半食糧確保の仕事である「遊び仕事」が注目されつつある現代の様相をかんがみると、食糧確保の「魚を獲る用」における「半自給自足用」に関する取り組みは今後増加していくものと思われ、検討すべき重要な課題であるといえよう。

このとき、「魚を獲る用」、そして釣りそのものの感動を目的とする「釣りの用」、和竿の技術を応用した「鑑賞の用」の要素を併せ持つ、いわば現代民具である釣竿における「用の美」の充実こそが、日本の特産品である竹を用いた六角竿を再び羽ばたかせる大きな制作指針となるのではないだろうか（資料1）。

今後の工法の工夫や環境の変化による六角竿の再びの発展の可能性を指摘し、本論の結びとする。

(57613 文字)

謝辞

本稿執筆にあたり、タケフナイフビレッジ協同組合の皆様、浅井打刃物の故浅井正美鍛冶師、山本打刃物の山本直鍛冶師、加茂打刃物製作所の鳩野憲志朗鍛冶師、株式会社週間釣りニュース釣り文化資料館小谷友樹氏、トーマス・ブレークモア記念社団養沢毛鉤専用釣場高橋実理事、早戸川国際マス釣り場・リヴァスポット早戸新井健太代表、蓼科東急フライフィッシング倶楽部大島秀行会長、青山学院大学中野勉教授、櫻井釣漁具株式会社石川潜城店長、株式会社レオン三浦洋一代表、和竿教室大川ラボ大川清一代表、竿政竹竿製造店田村政孝和竿師、東作本店七代目東作松本耕平和竿師、松葉一路刀匠、有限会社丸六宇留賀誠取締役、京都府舞鶴市布敷地区池姫神社様、旧京都造形芸術大学大学院（通信）芸術研究科芸術環境専攻芸術環境研究領域芸術教育分野松井ゼミの皆様、京都芸術大学大学院 北桂樹氏、武欣悦氏、有限会社アイラ・ラボラトリ 橋本修平取締役、中山咲社員には、取材や論文素材準備において大変お世話になりました。また、京都芸術大学 仲隆裕教授、松井利夫教授、伊達仁美名誉教授、河上眞理教授、上村博教授、春日部幹先生には、取材及び論文執筆において大変熱心にご指導頂きました。皆様に深く感謝申し上げます。

註釈

註釈（序論）

- 1 村上龍男『思い出語り庄内の磯釣り』東北出版企画、2006年、p. 308。
- 2 柳宗悦『手仕事の日本（新装・柳宗悦選集 2）』日本民芸協会、1972年、pp. 48-49（原著は1948年靖文社刊）。
- 3 柳宗悦『民藝とは何か』講談社学術文庫、講談社、2006年、pp. 30-31（原著は1941年昭和書房刊）。
- 4 柳宗悦『民藝四十年』岩波文庫、岩波書店、1984年、pp. 100-125（原著は1920年～1958年に書き記した短編。1958年宝文館刊）。

註釈（第1章）

- 1 本章は初出一覧に記載した京都芸術大学大学院紀要第1号掲載論文から、その後の研究の成果に併せて加筆修正を行ったものである。
- 2 岡本憲幸「維持困難な地域文化とその「伝統」：岡山県の郷土玩具・泥天神を事例に」『人文地理学会大会研究発表要旨』、人文地理学会、2006年、p. 11。
- 3 金谷美和「文化の消費-日本民芸運動の展示をめぐって-」『人文学報』77、京都大学人文科学研究所、1996年、pp. 63-97。
- 4 福祉のひろば 編著「めざせ！ 伝統工芸士」『福祉のひろば』92(457)、2007年 pp. 1-4。
- 5 山本素石『山本素石綺談エッセイ集〈2〉釣りと風土』つり人社、2012年、p. 139。
- 6 笹本正次ら「川・湖沼の恵と縄文人」長野県立歴史館編集『信州の風土と歴史 23 川』長野県立資料館刊、2017年、pp. 36-37。
- 7 Yvon Chouinard, Craig Mathews, Mauro Mazzo, James Prosek『シンプル・フライフィッシング：テンカラが教えるテクニック』地球丸 訳 Patagonia Books、2014年。
- 8 管理釣り場ポータル「テンカラができる管理釣り場」

https://www.turinavi.info/sp_tenkara/ （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）。

9 杉本英樹 「テンカラの周辺（木曽&関西のテンカラ事情）」 『釣の友』昭和 61 年 7 月号、釣りの友、1986 年、pp. 188-190。

10 令和 3 年度放流実績 木曽川漁業協同組合

<http://park7.wakwak.com/~kisogawa/info.html> （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）。

11 中村 智幸、土居 隆秀「溪流におけるイワナ発眼卵放流由来群の生残，成長，密度および現存量」『日本水産学会誌』75 巻 2 号、2009 年、pp. 198-203。

12 統計ステーション長野「長野県統計情報データ毎月人口異動調査 市町村別人口と世帯」 https://tokei.pref.nagano.lg.jp/statist_list/1883.html （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）。

13 児玉幸多『近世交通史料集 5 中山道宿村大概帳』吉川弘文館、1971 年。

14 道尾 淳子「中山道宿場町 67 宿における旧街道の道路特性に関する研究：道路幅員と道路の種類にみる旧街道の今日的位置付け（建築・環境デザイン）」『芸術工学会誌』58、2012 年 pp. 43-50。

15 統計ステーション長野「長野県統計情報データ毎月人口異動調査 市町村別人口と世帯」 https://tokei.pref.nagano.lg.jp/statist_list/1883.html （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）。

16 つり人社書籍編集部（著）『長野「いい川」溪流ヤマメ・イワナ釣り場』つり人社、2015 年、pp. 102-107。

17 杉本英樹 「テンカラの周辺（木曽&関西のテンカラ事情）」、前掲書（8）pp. 188-190。

18 三橋 俊雄「遊び仕事を通した **Subsistence** の再考（〈特集〉デザイン思考）」、一般社団法人『日本デザイン学会デザイン学研究特集号』20(1)、2012 年、pp. 28-33。

19 農文協論説委員「農文協の主張」『現代農業』2006 年 9 月号、農山漁村文化協会

<https://www.ruralnet.or.jp/syutyu/2006/200609.htm> （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）。

- 20 沢田眉香子「民藝基礎知識」、『美術手帳』第 1075 号 (2019 年 4 月号)、2019 年、pp. 44-45。
- 21 日本民藝館、藤森武『用の美 上 柳宗悦コレクションー日本の美』世界文化社、2008 年、pp. 84-85
- 22 鞍田崇「トピックからたどる「民藝」とその周辺」、『美術手帳』第 1075 号 (2019 年 4 月号)、2019 年、pp. 52-57。
- 23 軸原ヨウスケ 中村裕太「民藝の周辺-1 アウト・オブ・民藝 民芸運動のはぐれもの」美術手帳第 1075 号 (2019 年 4 月号)、pp. 58-65。
- 24 塚口 眞佐子「モダンデザインの背景を探る 1920 年代から 30 年代 諸事情 (その 4) バウハウス周辺と雑誌 **die neue linie**」大阪樟蔭女子大学研究紀要 1 大阪樟蔭女子大学、2011 年 1 月、pp. 139-155。
- 25 親鸞、金子大栄校注『歎異抄』岩波文庫、岩波書店、1981 年、p. 38。
- 26 2008 年 12 月 24 日、バーエポペ「クリスマス会」にて、ジョルジュ・ネラン神父本人より聞き取り。
- 27 東京都荒川区ひぐらし小学校「食育実践リポート (8) ニジマスをおいしく楽しく味わいながら-ひぐらし小学校の食育実践」食育フォーラム／健康教育研究会 編 6 (11) 通 68、2006 年、pp. 62-65。
- 28 内外教育編著「ニジマス活用して特別授業-東京都江東区立第二辰巳小学校」『内外教育』(5749)、2007 年、P. 7。
- 29 仙台市教育委員会 2010 『仙台市文化財調査報告書 375：仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査報告書 仙台釣竿・仙台御筆 4』仙台市教育委員会、2010 年、pp. 1-66。
- 30 海野 徹也「生物材料インデックス 日本人の心の魚、クロダイ」『生物工学会誌』、日本生物工学会、2013 年、91 巻、p. 10。
- 31 植月学、山梨県立博物館編「甲州竿にみる甲州釣り文化の一様相」『山梨県立博物館研究紀要』11、2017 年、pp. 1-12。

- 32 長野県の情報【E-CURE】「寝覚めの床 上松町」 <http://www.i-turn.jp/nezame-no-toko-urashimatatou.html> (閲覧日 2022 年 10 月 5 日)。
- 33 浦壮一郎「消えゆく江戸和竿」『週間金曜日』9(1)(通号 353)、2001 年、pp. 40-42。
- 34 吉田大作「伝統工芸を取り巻く課題と今後の研究テーマ」『2018 年度京都伝統文化イノベーション研究センター報告書』、京都造形芸術大学、2019 年、pp. 66-70。
- 35 月刊釣り人編集部(著)「和竿が身近になるサオ作り教室」『月刊釣り人』、No892、2020 年 10 月号、pp. 26-27。

註釈 (第 2 章)

- 1 本章は、初出一覧に記載した京都芸術大学大学院紀要 2 号掲載論文を加筆修正したものである。
- 2 稗田阿礼 太安万侶『古事記』倉野憲司 校注、岩波文庫、1963 年、p. 268。
- 3 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』農務省水産局編纂、東京水産社発行、1935 年、p. 75、111、123 他。
- 4 津軽采女『何羨録〈復刻〉』中村利吉 写筆、釣り文化協会、1981 年、p. 1。
- 5 静岡県水産・海洋技術研究所『富士養鱒場だより』富士養鱒場、195 号、2007 年 7 月。
- 6 中村 智幸「日本における海面，内水面および内水面の魚種別の潜在釣り人数」『日本水産学会誌』86(3)号、pp. 214-220、2020 年。
- 7 農文協論説委員「農文協の主張」『現代農業』2006 年 9 月号、農山漁村文化協会 <https://www.ruralnet.or.jp/syutyo/2006/200609.htm> (閲覧日 2022 年 10 月 5 日)。
- 8 笹本正次ら「川・湖沼の恵と縄文人」『信州の風土と歴史 23 川』、長野県立資料館刊、2017 年、pp. 36-37。
- 9 津軽采女前掲書(4)。

- 10 ジュリアナ・バーナース『釣魚論 (Dame Juliana Berners “a Treatyse of fysshynge wyth an Angle” Boke of Saint Albans)』、椎名重明 翻訳、つり人社、つり人ノベルズ、1997 年、pp. 9-82
- 11 ジュリアナ・バーナース前掲書 (10)、p. 6。
- 12 勝部直達『何羨録・現代語訳と解題』甲山五一 現代語訳、釣り文化協会、1981 年、p. 51。
- 13 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (3)。
- 14 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (3)、p. 79。
- 15 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (3)、p. 80。
- 16 山城良介「日本のバンブーロードの発展史とその魅力」『バンブーロード教書』フライの雑誌社、2013 年、pp. 182-191。
- 17 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (3)、pp. 78. 79。
- 18 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (3)、pp. 137-139。
- 19 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (3)、pp. 74-82。
- 20 山城良介、前掲記事 (16)、pp. 182-183。
- 21 松崎明治『釣技百科』朝日新聞社刊、1942 年。
- 22 秋川漁業協同組合ホームページ <https://akigawagyokyo.or.jp/trout/> (閲覧日 2022 年 10 月 5 日)。
- 23 全国漁業協同組合連合会ホームページ <https://www.zengyoren.or.jp/about/> (閲覧日 2022 年 10 月 5 日)。
- 24 特定非営利活動法人「鮎釣りステーション」ホームページ 群馬県
http://www.kiddy.co.jp/ayunip/gunma_info/joosyu_report5-3.htm (閲覧日 2022 年 10 月 5 日)。

25 埼玉県ホームページ 水産業 Q&A

<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0904/suisanfaq/index.html> (閲覧日 2021 年 6 月 28 日)。

26 「特別座談会 日本のフライフィッシングの軌跡」『フライの雑誌』、フライの雑誌社、第 61 号 (2003)、2003 年、p. 10。

27 『月刊つり人』1955 年 3 月号、つり人社、1955 年 3 月、P. 69。

28 『月刊つり人』1956 年 5 月号、つり人社、1956 年 5 月、p. 81。

29 「特別座談会 日本のフライフィッシングの軌跡」前掲 (25)、p. 5。

30 山城良介前掲記事 (16)。

31 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (3)。

32 鈴木秋水『和竿作りの本』築地書館、1999 年、p. 26。

33 葛島一美『続・平成の竹竿職人 焼き印の顔』つり人社、2007 年、pp. 10-14。

34 ジュリアナ・バーナーズ、前掲書 (10)。

35 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書 (3)。

36 錦織則政『ザ・ヒストリー・オブ・バンブーフライロッド バンブーロッドとその開拓者たち』つり人社、2013 年、pp. 10-11。

37 三浦洋一「理想の竹を探して」『バンブーロッド教書』フライの雑誌社、2013 年、pp. 204-209。

38 島崎憲司郎「竹林へ 13 年語の追記」『バンブーロッド教書』フライの雑誌社、2013 年、pp. 244-247。

39 島崎憲司郎「13 年語の追記の追記」『バンブーロッド教書』フライの雑誌社、2013 年、p. 247。

註釈 (第 3 章)

1 本章は、初出一覧に記載した日本民具学会『民具研究』164 号掲載論文を加筆修正し

たものである。

2 稗田阿礼 太安万侶 倉野憲司 校注『古事記』268 頁、岩波文庫、1963 年、p.

268。

3 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』、農務省水産局編纂、東京水産社発行、1935 年、p.

75、p. 111、p. 123、p. 124 他。

4 津軽采女『何羨録〈復刻〉』中村利吉 写筆、釣り文化協会、1981 年、p. 1。

5 笹本正次ら「川・湖沼の恵と縄文人」『信州の風土と歴史 23 川』長野県立資料館刊、

2017 年、pp. 36-37。

6 ジュリアナ・バーナーズ『釣魚論：(Dame Juliana Berners “a Treatyse of fysshynge wyth an Angle” Boke of Saint Albans)』椎名重明 翻訳、つり人社、つり人

ノベルズ、1997 年、pp. 9-82。

7 錦織則政『ザ・ヒストリー・オブ・バンブーフライロッド バンブーロッドとその開拓者たち』つり人社、2013 年、pp. 8-16。

8 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書（第 2 章 3）pp. 80-81。

9 多田一松「”もう 86 歳ですもの、引退します” 多田一松-日本のバンブーロッドの父」『フライの雑誌』Vol. 2、フライの雑誌社、1987 年、pp. 14-15。。

10 村田孝二郎「バンブーロッドは「いまの竿」を作れる可能性がある」『バンブーロッドのいま』渡渉舎、2007 年 6 月、p. 534。。

11 平田真人「釣り竿は詠えるのもいいが、自分で作るのもいい」『バンブーロッドのいま』381-394 頁 渡渉舎、2007 年 6 月、pp. 381-394。

12 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書（第 2 章 3）、pp. 80-81。

13 『釣之研究』昭和 3 年 9 月号、釣之研究社、1928 年、p. 8。

14 多田一松 前掲書（8）フライの雑誌社、1987 年、pp. 14-15。

15 多田一松「私の手帳から 六角竿と僕」『月刊つり人』1-3 号、つり人社、1946 年 9 月、p. 45。

- 16 『日本水産捕採誌 釣魚編 全』前掲書（第2章3）、p. 79。
- 17 『釣之研究』5号 目次前広告頁、釣之研究社、1930年10月号。
- 18 『釣之研究』8-5号 目次前広告頁、釣之研究社、1932年5月号。
- 19 『水の趣味』1号 目次前広告頁、水の趣味社、1933年11月。
- 20 『釣之研究』11-5号 目次前広告頁、釣之研究社、1935年5月号。なお、本広告の東作製六角竿に関し、七代目東作松本耕平は「元々東作製六角竿は、朝日新聞記者の多田が持ち込んだ企画だったが、多田が実製作の経験が浅かったため、東作でそのほとんどを製作したと聞き及んでいる」と述べた。
- 21 『釣之研究』11-8号、目次前広告頁、釣之研究社 1935年8月号。
- 22 『釣之研究』11-9号、目次前広告頁、釣之研究社、1935年9月号。
- 23 『釣之研究』12-3号、目次前広告頁、釣之研究社、1936年3月号。
- 24 『釣之研究』12-6号、目次前広告頁、釣之研究社、1936年6月号。
- 25 『釣之研究』11-5号、目次前広告頁、釣之研究社、1935年5月号。
- 26 増田潔「豪快な北米の海釣」『釣之研究』11-5号、釣之研究社、1935年5月号、pp. 71-73。
- 26 中西英彦「車竿の認識」『釣之研究』11-10号、釣之研究社、1935年10月号、pp. 121-124。
- 28 山本魚人「奉天の釣便り」『釣之研究』19-6号、釣之研究社 1943年6月号、p. 92。
- 29 「日本のフライフィッシングの軌跡 フライフィッシング夜明けの頃からの釣具業界ウラ話」『フライの雑誌』61号、フライの雑誌社 2003年、pp. 4-16。
- 30 「日本のフライフィッシングの軌跡 フライフィッシング夜明けの頃からの釣具業界ウラ話」『フライの雑誌』61号、前掲書(29)、pp. 4-16。
- 31 『月刊つり人』1962年5月号、つり人社、1962年5月、p. 19。
- 32 「キャスティング」「上州屋」などの大手釣具店を数店舗巡っての見解。
- 33 錦織則政、前掲書（7）、pp. 6-16。

- 34 小林幹夫『原色植物分類図鑑 日本の竹亜科植物』北隆館、2017年、p. 52。
- 35 AliExpress Huntingdoor Official Store 「タンキン-バンブーアーチェリーシャフト, od 7.5mm-8.5mm, 長さ 28-33 インチ, 初心者向けのハンティング練習用」
<https://ja.aliexpress.com/item/1005003205251812.html> (2022年3月30日閲覧)。
- 36 AliExpress ZHUSRODS Store 「Tonkion 竹, 竹釣り竿, 最高の素材, 建具, ボディビル, 修理, トンキン, 竹」
<https://ja.aliexpress.com/item/1005002773580714.html> (2022年3月30日閲覧)。
- 37 Everett E. Garrison, Hoagy B. “Carmichae A Masters Guide to Building a Bamboo Rod ”MEADOW RUN PRESS INC.,1977,p. 1.
- 38 Smithsonian National Museum of Natural History “Arundinaria amabilis McClure”
https://www.si.edu/object/nmnhbotany_2151013 (2022年3月30日閲覧)。
- 39 小林幹夫、前掲書 (34)、pp. 180-182。
- 40 島田一郎『汀石竿談義』文治堂書店、1975年、pp. 98-99。
- 41 台湾百科知識 厘竹 <https://www.easyatm.com.tw/wiki/%E5%8E%98%E7%AB%B9>
(2022年3月30日閲覧)。
- 42 『中国竹類図誌続』304頁 科学出版社、2017年 (中文書類、図、誌、続は全て簡体字)。
- 43 なお、同じ出版社であっても『中国竹類植物図鑑』科学出版社 2020年 (中文書類、図、鑑は全て簡体字) のように、“*Pseudosasa*”を「茶幹竹属」ではなく台湾同様の「矢竹属」と分類している本もある。中国国内でも矢竹属は表記に揺らぎがあるようだ。
- 44 『中国竹類図誌続』前掲 (42) p. 304。
- 45 中西英彦「釣は藝術」『釣之研究』6号、釣之研究社、1931年2月号、p. 15。

註釈（結論）

- 1 なお、本結論は本稿書き下ろしだが、図版などの一部において、初出一覧に記載した京都芸術大学大学院紀要 3 号掲載論文を一部加筆修正し引用した。
- 2 ジュリア・カセム『光の中へ 視覚障害者の美術館・博物館アクセス』小学館、1998 年、pp. 74-77。なお同書は日本で活躍するカセム氏の書籍であり日本語が原著である。
- 3 柳宗悦『民と美（新装・柳宗悦選集 7）』日本民芸協会、1954/1972、pp. 294-295
- 4 ビヤーネ・フリース「フライフィッシングは肉体では無く精神でやるものだ」『バンブーロッドのいま』渡渉舎、2007 年 6 月、pp. 402-431。
- 5 Everett E. Garrison, Hoagy B. Carmichael, A Masters Guide to Building a Bamboo Rod, New York Martha s Glen Publishing Co, 1977.

参考文献

釣之研究編集部、広告ページ『釣之研究』釣之研究社、1(3)-19(6)、1926-1943 年

田中茂穂「魚が年々減る」『釣之研究』、釣之研究社、1926 年、1(3)、pp. 2-4

摩軒「米国の釣百種（二）」『釣之研究』、釣之研究社、1926 年、1(3)、p. 12

S 生「素人の継竿制作（三）」『釣之研究』、釣之研究社、1927 年、2(5)

釣之研究編集部「新案特許の綸車」『釣之研究』、釣之研究社、1927 年、2(8)、pp. 12-13

釣狂生「てんから」『釣之研究』、釣之研究社、1928 年、3(1)、pp. 18-20

釣之研究編集部「和製洋竿」『釣之研究』、釣之研究社、1928 年、3(9)、p. 8

釣之研究編集部「米国大統領と釣」『釣之研究』、釣之研究社、1929 年、4(9)、p. 19

中西英彦「釣は藝術」『釣之研究』、釣之研究社、1931 年、6、p. 15

北岬生「竿（その一）」『釣之研究』、釣之研究社、1931 年、7(5)、pp. 20-21

北岬生「竿（その三）」『釣之研究』、釣之研究社、1931 年、8(1)、pp. 22-25

正親町李董「新しい竿」『釣之研究』、釣之研究社、1932 年、8(1)、pp. 15-17

魚住清適「魚が釣れる迄」『釣之研究』、釣之研究社、1932 年、8(1)、pp. 18-21

文翁「釣堀（その二）」『釣之研究』、釣之研究社、1932 年、8(1)、pp. 26-29

魚戸愛作「英国の釣話」『釣之研究』、釣之研究社、1933 年、9(1)、pp. 56-59

魚戸愛作「英国の釣話（二）」『釣之研究』、釣之研究社、1933 年、9(2)、pp. 57-60

水の趣味編集部、広告ページ『水の趣味』、水の趣味社、1-10、1933-1934 年

竹翁「テンカラの製法」『水の趣味』水の趣味社、1934 年、10、pp. 68-70

農務省水産局編纂『日本水産捕採誌 釣魚編 全』東京水産社発行、1935 年

重松義則「布袋竹釣竿の稗形に就て」『日本林學會誌』日本林學會、1935 年、17(9)、pp. 706-716

増田潔「豪快な北米の海釣り」『釣之研究』釣之研究社、1935 年、11(8)、pp. 71-73

中西英彦「車竿の認識」『釣之研究』釣之研究社、1935年、11（10）、pp. 121-124

魚住清適『川釣の研究（普及版）』三省堂、1939年

上田尚「昭和五年型」『釣之研究』釣之研究社、1941年、17（5）、pp. 5-7

繁田貞雄「釣竿製作の秘訣 漆塗りの基礎知識と塗技（一）」『釣之研究』釣之研究社、1941年、17（5）、pp. 80-84

繁田貞雄「釣竿製作の秘訣 鯨穂竿の作り方」『釣之研究』釣之研究社、1941年、17（7）、pp. 60-62

松崎明治『釣技百科』朝日新聞社、1942年

中西英彦『リール釣りの研究』釣之研究社、1943年

山本魚人「奉天の釣便り」『釣之研究』釣之研究社、1943年、19（6）p. 92

多田一松「私の手帳から 六角竿と僕」『月刊つり人』つり人社、1946年、1-3号、p. 45

月刊つり人編集部、広告ページ『月刊つり人』つり人社、1946-1960年

伊藤斌「民族と釣」『月刊つり人』つり人社、1946年、1（1）、pp. 10-11

シェリダン・アール・ジョーンズ 水上好夫譯「フライキャスティング」『月刊つり人』つり人社、1946年、1（1）、pp. 50-55

シェリダン・アール・ジョーンズ 水上好夫譯「フライキャスティング（2）」『月刊つり人』つり人社、1946年、1（2）、pp. 56-57

シェリダン・アール・ジョーンズ 水上好夫譯「フライキャスティング（3）」『月刊つり人』つり人社、1946年、1（3）、pp. 18-19

米森魚衣「岩魚釣ー主に初心者のためにー」『月刊つり人』つり人社、1946年、1（2）、pp. 26-27

松本栄一「製竿漫記」『月刊つり人』つり人社、1946年、1（4）、pp. 30-31

月刊つり人編集部「魚族愛護座談會」『月刊つり人』つり人社、1947年、2（12）、pp. 2-

7

月刊つり人編集部、目次前英語ページ「Trout hunting in young foliage valley」『月刊つり人』、つり人社、1948 年、3 (5)

月刊つり人編集部「フライ・キヤスティングの會」『月刊つり人』つり人社、1948 年、3 (8)、pp. 6-7

月刊つり人編集部「マッカーサー元帥に贈呈－鮎竿山女魚等釣具を－」『月刊つり人』つり人社、1948 年、3 (9)、pp. 16-19

島内志剛「原子爆弾と魚」『月刊つり人』つり人社、1948 年、3 (9)、pp. 11

末廣恭雄「地震と魚」『月刊つり人』つり人社、1948 年、3 (10)、p. 14

ジョー・カタオカ「米國の溪流釣を語る」『月刊つり人』つり人社、1948 年、3 (10)、p. 27

土肥伸「へら竿に就いて」『月刊つり人』つり人社、1949 年、4 (2)、p. 5

岡部ら「毛鉤妄談」『月刊つり人』つり人社、1949 年、4 (5)、pp. 3-15

佐藤垢石「恙虫遭難物語」『月刊つり人』つり人社、1949 年、4 (5)、pp. 16-19

檜山義夫「帰国第一信－アメリカの釣業界を探って」『月刊つり人』つり人社、1950 年、10 月号、p. 26

檜山義夫「米國釣業界視察報告書（上）」『月刊つり人』つり人社、1950 年、11 月号、pp. 30-31

檜山義夫「米國釣業界視察報告書（中）」『月刊つり人』つり人社、1950 年、12 月号、pp. 26-27

檜山義夫「米國釣業界視察報告書（下）」『月刊つり人』つり人社、1951 年、1 月号、pp. 44-45

守島伍郎「ソビエートの釣り」『月刊つり人』つり人社、1951 年、2 月号、pp. 22-23

守島伍郎「ソビエートの釣り」『月刊つり人』つり人社、1951 年、3 月号、pp. 21

渡邊修「簡易養鱒の話（一）－育水と造池に就いて－」『月刊つり人』つり人社、1951 年、3 月号、p. 22

USIS 提供「ルイジアナのスポツマンズパラダイス (USIS 提供)」『月刊つり人』つり人社、1951 年、7 月号、p. 6

竹内順三郎「アメリカの釣日本の釣」『月刊つり人』つり人社、1951 年、7 月号、pp. 8-11

藤田靖之「フライ・キャスティング」『月刊つり人』つり人社、1951 年、9 月号、pp. 23-25

釣りの友新聞編集部「秘策旨に競いあう係留会が恒例の練成」『釣りの友』釣の友新聞、1951 年

鈴木魚心「財団法人五日市養鱒協会設立さる」『月刊つり人』つり人社、1955 年、3 月号、p. 69

富田銀扇「リールづり」『月刊つり人』つり人社、1955 年、6 月号、p. 52

鈴木魚心「我が国初の試み毛鉤専用釣場養沢川」『月刊つり人』つり人社、1956 年、5 月号、p. 81

月刊つり人編集部「木曾川の山女魚」『月刊つり人』つり人社、1956 年、5 月号、pp. 40-41

竹内始万「ニジマスの放流と河川経営の問題 (上)」『月刊つり人』つり人社、1956 年、8 月号、pp. 16-20

竹内始万「ニジマスの放流と河川経営の問題 (下)」『月刊つり人』つり人社、1956 年、9 月号、pp. 16-18

理学博士 黒沼勝造「放流のます」『月刊つり人』つり人社、1956 年、7 月号、pp. 16-20

大岩敏雄「初心者を対象とする”あまごの毛ばりつり”について」『釣の友』釣の友社、1962 年、5 月号、pp. 16-19

大岩敏雄「初心者を対象とする”あまごの毛ばりつり”について(二)」『釣の友』釣の友社、1962 年、6 月号、pp. 16-17

稗田阿礼 太安万侶『古事記』倉野憲司 校注、岩波文庫、1963 年

桑原玄辰・杉本英樹・高崎武雄『「溪流の釣」入門から研究へ』西東社新書版、1965 年

竹内広志「竹熊手について」『富士竹類植物園報告』富士竹類植物園、1966 年、11、pp. 231-241

児玉幸多『近世交通史料集 5 中山道宿村大概帳』吉川弘文館、1971 年

柳宗悦『手仕事の日本（新装・柳宗悦選集 2）』日本民芸協会、1948/1972 年

柳宗悦『民と美（新装・柳宗悦選集 7）』日本民芸協会、1954/1972 年

島田一郎『汀石竿談義』文治堂書店、1975 年

桑原玄辰、杉本英樹、高橋武雄『一入門から研究へー溪流の釣り』つり人社、1975 年

Everett E. Garrison, Hoagy B. Carmichael, *A Masters Guide to Building a Bamboo Rod*, New York Martha s Glen Publishing Co, 1977.

津軽采女『何羨録〈復刻〉』中村利吉 写筆、釣り文化協会、1723/1981 年

勝部直達『何羨録・現代語訳と解題』甲山五一 現代語訳、釣り文化協会、1981 年

親鸞、金子大栄校注『歎異抄』岩波書店、1300/1981 年

梅田豊治「釣竿と繊維」『線維学会誌』線維学会、1981 年、37 巻 1 号、pp. 57-59

柳宗悦『民藝四十年』岩波文庫、1984 年

杉本英樹「テンカラの周辺（木曾&関西のテンカラ事情）」『釣の友』、釣の友社、1986 年、7 月号、pp. 188-190

多田一松「”もう 86 歳ですもの、引退します” 多田一松-日本のバンブーロッドの父」『フライの雑誌』フライの雑誌社、1987 年、2、pp. 14-15

山本素石『一毛鉤釣りの世界ーテンカラ奥義』朝日ソノラマ、1987 年

山本素石『山釣り・山本素石傑作集』朔風社、1992 年

ジョルジュ・ネラン『おバカさんの自叙伝半分ー聖書片手にニッポン 40 年間』講談社文庫、1992 年

平田真人「日本のバンブーロッドの父・多田一松氏逝く 夢の中の竿」『フライの雑誌』

フライの雑誌社、1992 年、19、p. 129

金谷美和「文化の消費－日本民芸運動の展示をめぐって」『人文学報』77、京都大学人文科学研究所、1996 年、pp. 63-97

山本素石『テンカラ釣り放浪記』つり人ノベルズ、1996 年

ジュリアナ・バーナース『釣魚論』(Dame Juliana Berners "*a Treatyse of fysshynge wyth an Angle*" Boke of Saint Albans Dec/1496)、椎名重明 翻訳、つり人社、1997 年、pp. 9-82

ジュリア・カセム『光の中へ 視覚障害者の美術館・博物館アクセス』小学館、1998 年
高橋哲「フライフィッシングへの誘い」『心理臨床』心理臨床学会、1998 年、11 (1) (41)、pp. 62-23

鈴木秋水『和竿作りの本』築地書館、1999 年

黒川智弘「こんなところに複合材料」『日本複合材料学会』日本複合材料学会、1999 年、25 (3)、pp. 122-126

磯村正己『フライロッドを作る本』山と溪谷社、1999 年

淀川正進 坪井均「身近な材料の話 釣竿のしなりの秘密－材料と設計」『材料技術』材料技術学会、1999 年、17 (5)、pp. 223-228

岩壺卓三ら「釣竿の動的設計に関する基礎的研究」『ジョイント・シンポジウム講演論文集：スポーツ工学シンポジウム：シンポジウム：ヒューマン・ダイナミックス』日本機械学会、2000、00-38、pp. 125-129

浦壮一郎「消えゆく江戸和竿」『週間金曜日』週間金曜日、2001 年、9(1)(通号 353)、pp. 40-42

中島章文「都市近郊における竹林の管理・経営の実態：京都市近郊のタケノコ生産地を事例にして」『森林応用研究』森林応用研究学会、2001 年、10(1)、pp. 1-7

FLY JAPAN 編集部『竹棹源流行 FLY JAPAN』マイコムムック、2001 年、vol2

渡邊鉄也ら「フライラインの力学－モデル化－」『ジョイント・シンポジウム講演論文

集：スポーツ工学シンポジウム：シンポジウム：ヒューマン・ダイナミックス』日本機械学会、2001 年、01-22、pp. 19-23

フライの雑誌編集部「特別座談会 日本のフライフィッシングの軌跡」『フライの雑誌』フライの雑誌社、2003 年、第 61 号、pp. 4-16

島津 美子、川野邊 渉「紫外線と水分が黒漆塗膜の劣化に及ぼす相乗的な影響」『色材協會誌』色材協会、2003 年、76 (10)、pp. 385-390

岩壺卓三ら「感性評価竿に着目した釣竿の動的最適化手法に関する研究(釣り, スポーツ全般)」『ジョイント・シンポジウム講演論文集：スポーツ工学シンポジウム：シンポジウム：ヒューマン・ダイナミックス』日本機械学会、2004 年、pp. 247-252

渡邊 鉄也ら「フライラインの力学 手首固定条件におけるキャスティング実験」『日本機械学会論文集 C 編』70 (690)、日本機械学会、2004 年、pp. 508-515

藤井一郎「水性高分子ーイソシアネート系接着剤」『日本接着学会誌』日本接着学会、2004 年、40 (7)、pp. 28-32

フライの雑誌編集部「バンブーロッド「目隠し振り比べ」ブラインド・テイスティングの試み」『フライの雑誌』フライの雑誌社、2004 年、64、pp. 82-89

フライの雑誌編集部「万博とカーターさんの頃 日本のフライフィッシングの軌跡 2」『フライの雑誌』69、フライの雑誌社、2005 年、pp. 16-48

柳宗悦『民藝とは何か』講談社学術文庫、1941/2006 年

岡本憲幸「維持困難な地域文化とその「伝統」：岡山県の郷土玩具・泥天神を事例に」『人文地理学会大会研究発表要旨』人文地理学会、2006 年、p. 11

東京都荒川区ひぐらし小学校「食育実践リポート (8) ニジマスをおいしく楽しく味わいながら-ひぐらし小学校の食育実践」『食育フォーラム／健康教育研究会』食育フォーラム／健康教育研究会、2006 年、6 (11)、pp. 62-65

岩壺卓三ら「釣り師の感性的要求に基づく釣竿のテイラードデザイン法」『日本機械学会論文集 C 編』72 (720)、日本機械学会、2006 年、pp. 2413-2418

村上龍男『一思い出語り一庄内の磯釣り』東北出版企画、2006 年

農文協論説委員「農文協の主張」、『現代農業』農山漁村文化協会、2006 年 9 月号

<https://www.ruralnet.or.jp/syutyu/2006/200609.htm>（閲覧日 2022 年 10 月 5 日）

福祉のひろば 編著「めざせ！ 伝統工芸士」『福祉のひろば』92(457)、福祉のひろば、2007 年、pp. 1-4

内外教育 編著「ニジマス活用して特別授業-東京都江東区立第二辰巳小学」『内外教育』内外教育、2007 年、p. 7

静岡県水産・海洋技術研究所 富士養鱒場「富士養鱒場だより 2007 年 7 月」『静岡県水産・海洋技術研究所 富士養鱒場だより』静岡県水産・海洋技術研究所 富士養鱒場、2007 年、p. 195

葛島一美『続・平成の竹竿職人 焼き印の顔』つり人社、2007 年

徳永陽子ら「竹林と環境」『京都教育大学環境教育研究年報』15、京都教育大学教育学部附属環境教育実践センター、2007 年、pp. 99-123

村田孝二郎「バンブーロッドは「いまの竿」を作れる可能性がある」『バンブーロッドのいま』渡渉舎、2007 年、pp. 531-561

平田真人「釣り竿は詠えるのもいいが、自分で作るのもいい」『バンブーロッドのいま』渡渉舎、2007 年、pp. 374-394

島崎憲司郎「フリース竿と羽舟竿」『バンブーロッドのいま』渡渉舎、2007 年、pp. 159-190

ビヤーネ・フリース「フライフィッシングは肉体では無く精神でやるものだ」『バンブーロッドのいま』渡渉舎、2007 年 6 月、pp. 402-431

LEON 三浦洋一「9 フィート・1 ピースのバンブーロッド」『フライの雑誌』77、フライの雑誌社』2007 年、pp. 73-75

田中圭ら「圧密加工技術を用いた木質構造用竹製接合具の強度性能向上」『日本建築学会構造系論文集』73（624）、日本建築学会、2008 年、73（624）、pp. 299-306

日本民藝館、藤森武『用の美 上 柳宗悦コレクションー日本の美』世界文化社、2008年

日本民藝館、藤森武『用の美 下 柳宗悦コレクションー日本の美』世界文化社、2008年

中村 智幸、土居 隆秀「溪流におけるイワナ発眼卵放流由来群の生残，成長，密度および現存量」『日本水産学会誌』75 巻 2 号、日本水産学会、2009 年、pp. 198-203

渡邊鉄也ら「フライラインの力学ーフォルスキャストの検討ー」『精密工学会誌』75 (12)、精密工学会、2009 年、pp. 1464-1469

仙台市教育委員会 「仙台釣竿」『仙台市文化財調査報告書 375：仙台旧城下町に所在する民俗文化財調査報告書 仙台釣竿・仙台御筆 4』仙台市教育委員会、2010 年、pp. 1-66

棚瀬久雄『フォッサマグナ・中央構造線を行くー断層沿いの交易路と文化流通の軌跡ー』創栄出版 星雲社、2010 年

塚口眞佐子「モダンデザインの背景を探る 1920 年代から 30 年代 諸事情(その 4)バウハウス周辺と雑誌 die neue linie」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』大阪樟蔭女子大学、2011 年、pp. 139-155

山本素石『山本素石綺談エッセイ集〈2〉釣りと風土』つり人社、2012 年

道尾 淳子「中山道宿場町 67 宿における旧街道の道路特性に関する研究：道路幅員と道路の種類にみる旧街道の今日的位置付け(建築・環境デザイン)」『芸術工学会誌』芸術工学会、2012、58(0)、pp. 43-50

三橋俊雄「遊び仕事を通した Subsistence の再考(<特集>デザイン思考)」『一般社団法人日本デザイン学会デザイン学研究特集号』20(1)、一般社団法人日本デザイン学会、2012 年、pp. 28-33

海野徹也「生物材料インデックス 日本人の心の魚,クロダイ」『生物工学会誌』91 巻、日本生物工学会、2013 年、p. 10

錦織則政『ザ・ヒストリー・オブ・バンブーフライロッド バンブーロッドとその開拓者

たち』つり人社、2013 年

サンテ・L・ジュリアーニと仲間たち著、永野竜樹 翻訳「ザ・クラッカーバレル」フライの雑誌社編『バンブーロッド教書』フライの雑誌社、2013 年、pp. 22-23

山城良介「日本のバンブーロッドの発展史とその魅力」『バンブーロッド教書』フライの雑誌社編、フライの雑誌社、2013 年、pp. 182-191

三浦洋一「理想の竹を探して」『バンブーロッド教書』フライの雑誌社編、フライの雑誌社、2013 年、pp. 204-209

島崎憲司郎「竹林へ 13 年語の追記」『バンブーロッド教書』フライの雑誌社編、フライの雑誌社、2013 年、pp. 244-247

島崎憲司郎「竹林へ 13 年語の追記の追記」『バンブーロッド教書』フライの雑誌社編、フライの雑誌社、2013 年、p. 247

渡邊鉄也ら「フライラインの力学ーロールキャストの検討ー」『精密工学会誌』79 (1)、精密工学会、2013 年、pp. 104-111

Yvon Chouinard, Craig Mathews, Mauro Mazzo, James Prosek 地球丸 訳「シンプル・フライフィッシング：テンカラが教えるテクニック」Patagonia Books、2014 年
錦織則政、永野竜樹「バンブーロッドは過去の遺物か」『フライの雑誌』102 号、フライの雑誌社、2014 年、p. 66

つり人社書籍編集部 (著)『長野「いい川」溪流ヤマメ・イワナ釣り場』つり人社、2015 年

山田雅章「水性高分子ーイソシアネート系接着剤の基礎と改良」『日本接着学会誌』51 (9)、日本接着学会、2015 年、pp. 8-14

Ray Gould, "*Cane Rods: Tips & Tapers*", Reprint, Revised Edition, Echo Point Books & Media, 1998/2016

Ray Gould, "*CONSTRUCTING CANE RODS*", Reprint, Revised Edition, Echo Point Books & Media, 1998/2016

笹本正次ら「川・湖沼の恵と縄文人」『長野県立歴史館編集 信州の風土と歴史 23 川』

長野県立資料館刊、2017 年、pp. 36-37

植月学「甲州竿にみる甲州釣り文化の一様相」『山梨県立博物館研究紀要/山梨県立博物館編』11、山梨県立博物館、2017 年、pp. 1-12

小林幹生『原色植物分類図鑑日本のタケ亜科植物』北隆館、2017 年

科学出版社『中国竹類図誌続』科学出版社、2017 年

柴田昌三「里山における竹資源管理のあり方」『JATAFF ジャーナル』6 (8)、JATAFF、2018 年、pp. 6-1

沢田眉香子「民藝基礎知識」『美術手帳』美術手帳、2019 年、4 月号 (1075)、pp. 44-45

鞍田崇「トピックからたどる「民藝」とその周辺」『美術手帳』美術手帳、2019 年、4 月号 (1075)、pp. 52-57

軸原ヨウスケ 中村裕太「民藝の周辺-1 アウト・オブ・民藝 民芸運動のはぐれもの」『美術手帳』美術手帳、2019 年、4 月号 (1075)、pp. 58-65

吉田大作「伝統工芸を取り巻く課題と今後の研究テーマ」『2018 年度京都伝統文化イノベーション研究センター報告書』京都造形芸術大学、2019 年、pp. 66-70

中村智幸「日本における海面、内水面および内水面の魚種別の潜在釣り人数」『日本水産学会誌』86(3)号、日本水産学会、2020 年、pp. 214-220

FishingCafe 編集部「幻の東京オリンピックと一松崎明治、世界へ向けた観光資源としての日本の釣りー『ANGLING IN JAPAN』」『FishingCafe』SPRING2020、シマノ、2020 年、pp. 15-20

FishingCafe 編集部「トーマス・ブレイクモアの遺産ー日本のフライフィッシングの礎を築いた『養沢毛鉤専用釣場』ー」『FishingCafe』SPRING2020、シマノ、2020 年、pp. 31-36

FishingCafe 編集部「「釣具物語」釣具、漁具の歴史とその変貌「節ありての、剛と柔」

江戸和竿の歴史と技の証人（前編）-創業 237 年の『東作』、匠の聖なるたくらみ-

『FishingCafe』SPRING2020、シマノ、2020 年、pp. 58-62

月刊釣り人編集部「和竿が身近になるサオ作り教室」『月刊釣り人』釣り人社、2020 年 10 月号、892、pp. 26-27

袴田ら「フライフィッシングの原理を応用した小型低出力マニピュレータによる投擲の研究—第 1 報：ロッドからの繰り出しを考慮したラインのモデリング—」『日本機械学会ロボティクスメカトロニクス講演会 2021 講演論文集』2021-06、日本機械学会、2021 年
うちのまいこ『スローループ』芳文社、5 巻、2021 年、p. 174

三浦洋一『BAMBOO ROD MAKING MANUAL』LEON CRAFT（私家版）、2021 年

山田美緒『火星でフライフィッシングをするつもり？』ふらい人書房、2022 年

Ryo Nishiyama & Motohiro Sato, Structural rationalities of tapered hollow cylindrical beams and their use in Japanese traditional bamboo fishing rods, Scientific Reports, Scientific Reports, 2022, 12. Article number: 2448

埼玉県ホームページ水産業 Q&A

<https://www.pref.saitama.lg.jp/a0904/suisanfaq/index.html>（閲覧日 2021 年 6 月 28 日）

台湾百科知識 厘竹、<https://www.easyatm.com.tw/wiki/%E5%8E%98%E7%AB%B9>（閲覧日 2022 年 3 月 30 日）

統計ステーション長野「長野県統計情報データ毎月人口異動調査 市町村別人口と世帯」
https://tokei.pref.nagano.lg.jp/statist_list/1883.html（閲覧日 2022 年 10 月 5 日）

令和 3 年度放流実績 木曽川漁業協同組合

<http://park7.wakwak.com/~kisogawa/info.html>（閲覧日 2022 年 10 月 5 日）

管理釣り場ポータル「テンカラができる管理釣り場」

https://www.turinavi.info/sp_tenkara/（閲覧日 2022 年 10 月 5 日）

長野県の情報【E-CURE】「寝覚めの床 上松町」 <http://www.i-turn.jp/nezame-no-toko-urashimatatou.html> （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）

秋川漁業協同組合ホームページ <https://akigawagyokyo.or.jp/trout/> （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）

特定非営利活動法人「鮎釣りステーション」ホームページ 群馬県

http://www.kiddy.co.jp/ayunip/gunma_info/joosyu_report5-3.htm （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）

全国漁業協同組合連合会ホームページ <https://www.zengyoren.or.jp/about/> （閲覧日 2022 年 10 月 5 日）

図版一覧

(番号、作者名、タイトル、技法、年代、所蔵先、出典)

(図版において撮影者氏名のないものは、筆者制作物を筆者自身の撮影)

序論

該当無し

第1章

(写真1) 木曾川上流の風景 2011年 長野県木曾町日義地区、筆者撮影

(写真2) 工程1「伐り出し・晒し」 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真3) 和竿工程2「切り組み」 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真4) 和竿工程3「撓め・殺し」 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真5) 和竿工程4「削り」芽の削り出し 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真6) 和竿工程4「削り」節の削り 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真7) 和竿工程4「削り」継ぎ口の工作 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真8) 和竿工程4「巻き」継ぎ口の絹糸巻き 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真9) 和竿工程4「瀬締め」継ぎ口の瀬締め 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真10) 和竿工程5「継ぎ」 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真11) 和竿工程6「調子」 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真12) 和竿工程6「尾栓」 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真13) 和竿工程7, 8「塗り」「仕上げ」 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真14) 和竿工程7, 8「泥棒掃除」塗り端を切り整える泥棒掃除をする 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真15) 和竿工程7, 8「塗り」「仕上げ」 2019年、筆者作業、筆者撮影

(写真 16) 手塚一舟 (一佳) 作「節揃いテンカラ竿」江戸和竿手法テンカラ竿、畳み長さ 65cm、全長 3m30cm。竹、絹糸、漆、リリアン糸、2019 年、筆者所蔵、筆者撮影

(写真 17) 手塚一舟 (一佳) 作「印籠作りテンカラ竿」江戸和竿手法テンカラ竿折り畳み 85cm 全長 3m30cm 竹、絹糸、漆、リリアン糸、鉄パイプ、2020 年、筆者所蔵、筆者撮影

(写真 18) 手塚一舟 (一佳) 作「並継ぎテンカラ竿」江戸和竿手法テンカラ竿、折り畳み 85cm 全長 3m30cm 竹、絹糸、漆、リリアン糸「並継ぎ」江戸和竿手法テンカラ竿 2020 年、筆者所蔵、筆者撮影

(写真 19) 「印籠作りの折損」 2020 年、筆者作業、筆者撮影

(写真 20) 「印籠作りの折損」(詳細) 2020 年、筆者作業、筆者撮影

(写真 21) 「並継ぎの折損」 2020 年、筆者作業、筆者撮影

(写真 22) 「印籠作りの修復」 2020 年、筆者作業、筆者撮影

(写真 23) 「並継ぎの修復」 2020 年、筆者作業、筆者撮影

(写真 24) 手塚一舟 (一佳) 作「山本鍛冶師の竿」畳み長さ 95cm 全長 3m50cm 竹、絹糸、漆、リリアン糸、カーボン繊維、2019 年、山本打刃物所蔵、筆者撮影

(写真 25) 手塚一舟 (一佳) 作「鳩野鍛冶師の竿」畳み長さ 110cm 全長 2m10cm 竹、絹糸、漆、リリアン糸、カーボン繊維、2019 年、鳩野鍛冶師自宅所蔵、筆者撮影

第 2 章

(図表 1) 「江戸和竿師系図」2021 年 (2022 年修正)、筆者作成

(写真 1) 「多田釣具制作所 六角竿添付文面」1950～60 年代、2021 年撮影、レオン所蔵、筆者撮影

(写真 2) 「養沢毛鉤専用釣場」2021 年、東京都あきる野市養沢地域、筆者撮影

(写真 3) 「養沢毛鉤専用釣場ヤマメバッジ」2021 年、養沢毛鉤専用釣場内、筆者撮影

(写真 4) 「早戸川国際マス釣り場」2021 年、神奈川県相模原市緑区鳥屋、筆者撮影

(写真 5)「早戸川国際マス釣り場新井健太氏」2021 年、早戸川国際マス釣場内、筆者撮影

(写真 6)「蓼科東急フライフィッシング倶楽部」2021 年、蓼科東急リゾート内、筆者撮影

(写真 7)「櫻井釣漁具株式会社 神田釣り具の櫻井」2021 年、東京都千代田区鍛冶町、筆者撮影

(写真 8)「“SAKURA “ブランドの進駐軍土産用六角竿」1950 年代製、2021 年撮影、神田釣り具の櫻井内、筆者撮影

(写真 9)「レオン店内」2021 年、株式会社レオン店内、筆者撮影

(写真 10)「進駐軍向け “ゲイシャロッド”」1950 年代製、2022 年撮影、筆者自宅保管、筆者撮影

(写真 11)「レオンフライロッドメイキングスクール」2021 年撮影、株式会社レオン店内、筆者撮影

第 3 章

(写真 1) 手塚一舟 (一佳) 作「和式フライロッド」、畳み長さ 78cm 全長 2m20cm 真竹、絹糸、漆、コルク、ガイド、リールシート、2021 年、筆者自宅保管、筆者撮影

(写真 2)「六角竿の断面」2022 年、筆者制作物断片、筆者撮影

(写真 3)「進駐軍向け “ゲイシャロッド”」1950 年代製、2022 年撮影、筆者自宅保管、筆者撮影

(写真 4)「六角野鯉竿」1950～60 年代製、2022 年撮影、筆者自宅保管、筆者撮影

(写真 5)「多田釣具制作所 六角竿添付文面」1950～60 年代、2021 年撮影、レオン所蔵、筆者撮影

(写真 6)「中国から届いた 2 つのトンキンケーン」2022 年、筆者撮影

(写真 7)「トンキンケーン生産現地写真」2008 年、中国福建省、(株)レオン撮影・提供

(写真 8)「国産真竹による六角竿成功例」京都芸術大学博士課程公開展示「D#2021」
展、 筆者作例、2021 年、筆者撮影

結論

(図表 1) フェルルール製法比較 (筆者作成)

(写真 1) 手塚一舟 (一佳) 作「釣りの五感 3」アタラシイアタリマエノカタチ U、4m x 4m、釣竿、釣りゲーム、絨毯、石、糸、2022 年、蓼科東急リゾート内そよかぜ館、蓼科東急リゾート内保管、筆者撮影

(写真 2)「米軍向けお土産六角竿」1950 年代製、2022 年撮影、筆者自宅保管、筆者撮影

(写真 3)「六角和式テンカラ竿「姫神」」畳み長さ 114cm 全長 2m22cm 孟宗竹、漆、絹糸、コルク、金箔、リリアン糸、金粉、水性 2 液性接着剤、2022 年、筆者自宅所蔵、筆者撮影

図版

第1章 図版（特記無い限り筆者撮影）



（写真1）木曽川上流の風景（長野県木曽町日義地区）
テンカラの発祥地木曽川上流域の水量は少なく、
増水期でも雨天以外は歩いて渡れる程度の水量
しかない。漁業資源総量も少ない。



（写真4）（図版4）工程3「焼め・殺し」
竹を熱で柔らかくし、形や丸みを整える。



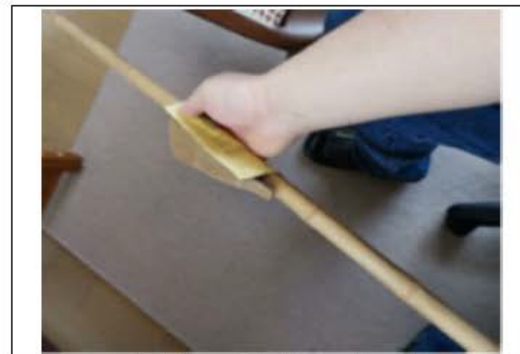
（写真2）工程1「伐り出し・晒し」工程
切り出してきた各種の竹を3ヶ月以上乾燥させて
いる。



（写真5）工程4「削り」芽の削り出し
芽や棘などを削り取る



（写真3）工程2「切り組み」
乾燥させた竹を大まかに竿の長さに切る。



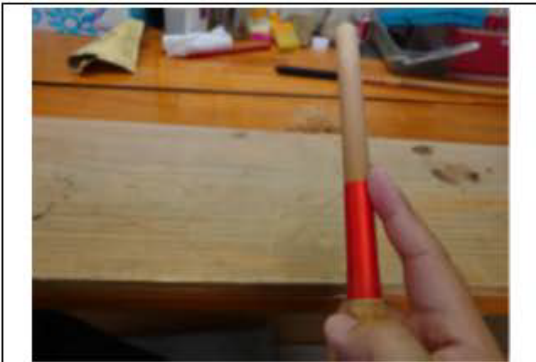
（写真6）工程4「削り」節の削り
節を紙やすりで磨き込んで角をとる。



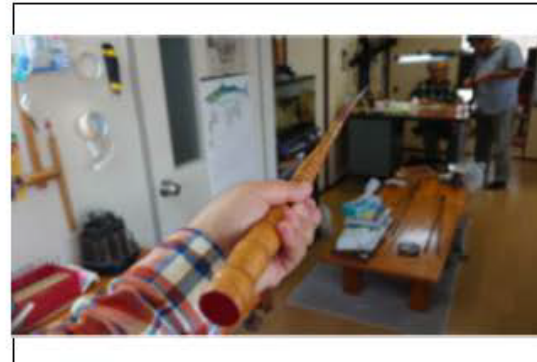
(写真7) 工程4「削り」継ぎ口の工作
継ぎ部分の皮を剥ぎ整形する



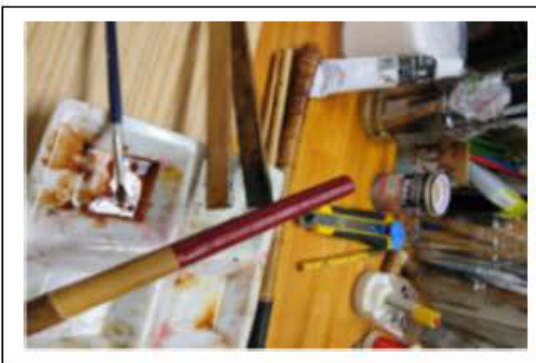
(写真10) 工程5「継ぎ」
継ぎ部分を棒ヤスリで整え、実際に継ぐ。



(写真8) 工程4「巻き」継ぎ口の絹糸巻き
皮を剥いだ部分に絹糸を巻く。



(写真11) 工程6「調子」
棒ヤスリの角度を変えながら継ぎを整える。



(写真9) 工程4「瀬締め」継ぎ口の瀬締め
巻いた糸を瀬締め漆で塗り固める。



(写真12) 工程6「尾栓」
竿の各段の継ぎ側の穴を竹細工で閉じる。

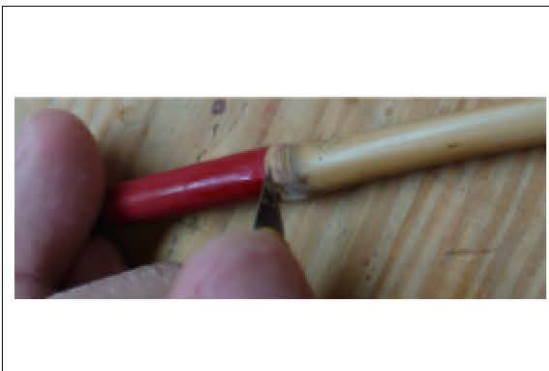
第2章 図版（撮影は全て筆者）



（写真13）工程7、8「塗り」「仕上げ」
7～20回ほど塗り重ね、望んだ模様が出て凹みがなくなるまで漆を塗り重ねる。



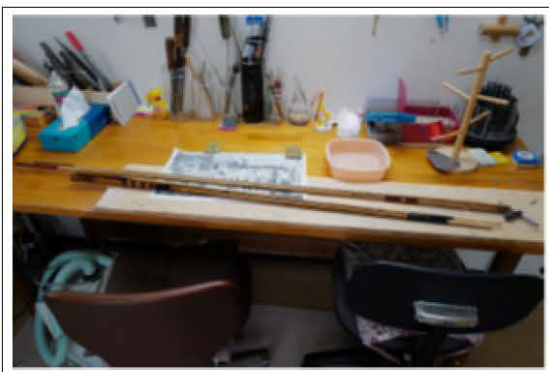
（写真16）「節揃いテンカラ竿」
江戸和竿手法テンカラ竿畳み長さ65cm、全長3m30cm。
竹、絹糸、漆、リリアン糸



（写真14）工程7、8「泥棒掃除」
塗った漆の端を切り整える。



（写真17）「印籠作り」
江戸和竿手法テンカラ竿
折り畳み85cm 全長3m30cm
竹、絹糸、漆、リリアン糸、鉄パイプ



（写真15）工程7、8「塗り」「仕上げ」
最後に拭き漆で全体につやを出す。



（写真18）「並継ぎ」
江戸和竿手法テンカラ竿
折り畳み85cm 全長3m30cm
竹、絹糸、漆、リリアン糸



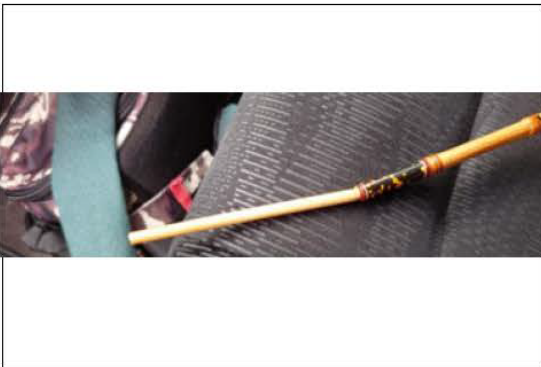
（写真19）「印籠作りの折損」

実際に竿を使って折損を経験したところ。印籠作りでは鉄芯のおかげで完全に折れ飛ぶ事はない。



（写真22）「印籠作りの修復」

印籠芯の中子はひと回り太くなるが、一見何も問題無く元通りとなる。一方並継ぎ（左端）は明らかに短くなっている。



（写真20）「印籠作りの折損」（詳細）

印籠作りの折損部分の拡大。
竹は完全に折れてしまっているが中の鉄芯でつながっていることがわかる。



（写真23）「並継ぎの修復」

並継ぎの破損は、思い切った切断修理が必要となる。



（写真21）「並継ぎの折損」

並継ぎの場合、完全に折れて継ぎ部分の中に残ってしまった。中で折損部位が水を吸ってしまい、漆の外塗も剥離している。



（写真24）「山本鍛冶師の竿」

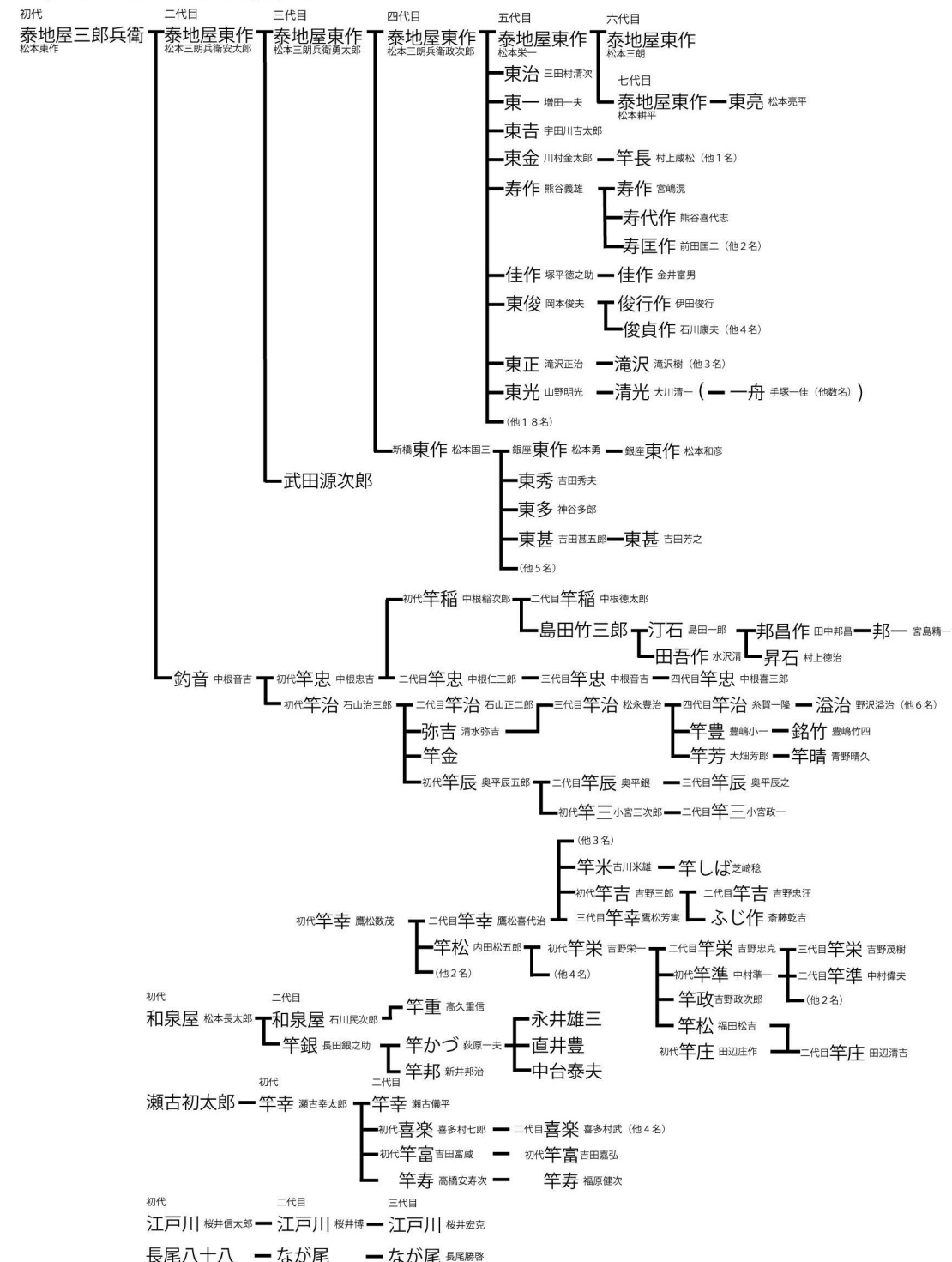
量み長さ95cm 全長3m50cm
竹、絹糸、漆、リリアン糸、カーボン繊維
（替え穂先部分のみ）



（写真25）「鳩野鍛冶師の竿」

畳み長さ110cm 全長2m10cm 竹、絹糸、漆、リリアン糸、カーボン繊維（補強箇所を使用）

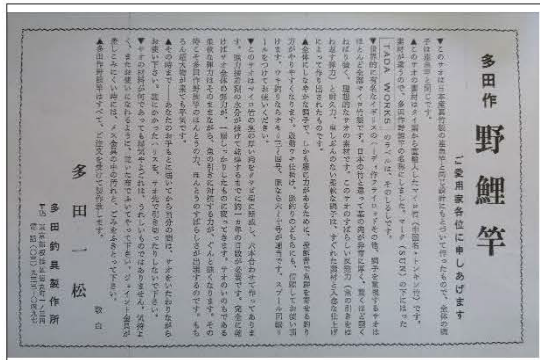
江戸和竿師系図



釣り文化資料館及び釣具の櫻井、大川ラボでの聞き取り調査を元にする。括弧内は筆者の系譜位置

(図表 1) 江戸和竿師系図 (筆者作成)

第2章 図版（撮影は全て筆者）



（写真1）多田釣具制作所六角竿添付文面（レオン所蔵）
トンキン竹は中国でしか産出されないため、タイ国産マ
イロ竹（中国名トンキン竹）という誤記があるが、多田の
六角竿は、輸入竹で作られたことを他と差別化している。



（写真4）早戸川国際マス釣り場
早戸川国際マス釣り場は川を石で区切ってマスを釣らせる
スタイルの管理釣り場だ。自然川そのままの養沢とはま
た違うスタイルといえる。



（写真2）養沢毛鉤専用釣り場
この事務所建物には2012年の放火後再建されたもの。看板
に「トーマス・ブレイクモア記念財団」の文字がある。



（写真5）早戸川国際マス釣り場新井健太
氏 早戸川国際マス釣り場・リヴアスポット
早戸 二代目オーナーの新井健太氏。



（写真3）養沢毛鉤専用釣り場ヤマメバッジ
養沢毛鉤専用釣り場では放流したヤマメの一定割合のア
ブリレに標識を入れ、放流効果の調査をしている。標識ヤ
マメをつり上げた報告に対してはバッジを渡している。



（写真6）蓼科東急フライフィッシング倶楽部
極めて限定的なプライベートポンドは、
内水面の釣りの新しい姿の一つだ。



(写真7) 櫻井釣漁具株式会社「神田釣り具の櫻井」
店内には和竿からカーボン製の現代竿まで、様々な同社製の竿が並ぶ。竿材料の竹や漆などもある。



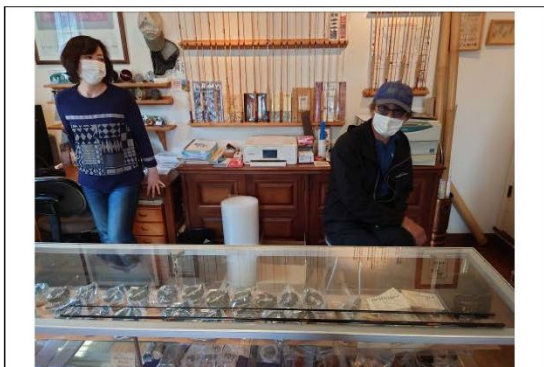
(写真10) 進駐軍向け「ゲイシャロッド」
お土産用途はいえ、急入りの漆塗りだ
(レオンからの譲渡により筆者所蔵)。



(写真8) 「SAKURA」ブランドの進駐軍土産用六角竿
「神田釣り具の櫻井」入り口に展示された。進駐軍土産用六角竿。国産真竹製。



(写真11) レオンフライロッドメイキングスクール
5日間のスクールでフライロッドを仕上げる。同スクール出身のプロも多い。



(写真9) レオン店内
壁面にはフライロッドの並ぶレオン店内
ガラスケースにはレオンリールが並ぶ。

第3章 図版（特記無い限り筆者撮影）



（写真1）「和式フライロッド」

畳み長さ78cm 全長2m20cm

真竹、絹糸、漆、コルク、ガイド、リールシート



（写真4）「六角野鯉竿」

作者不明だが、レオン三浦氏によると恐らく多田製作所製ではないかとのこと。



（写真2）六角竿の断面

筆者作品の切り捨てた断片を撮影。



（写真5）多田釣具制作所六角竿添付文面
（レオン所蔵）

トンキン竹は中国でしか産出されないため、タイ国産マイロ竹（中国名トンキン竹）という誤記があるが、多田の六角竿は、輸入竹で作られたことを他と差別化している。第2章写真1より再掲。



（写真3）進駐軍向け「ゲイシャロッド」

お土産用途はいえ、急入りな漆塗りだ（レオンからの譲渡により筆者所蔵）。

第2章写真10より再掲。



（写真6）中国から届いた2つのトンキンケーン



(写真7) トンキンケーン生産現地写真

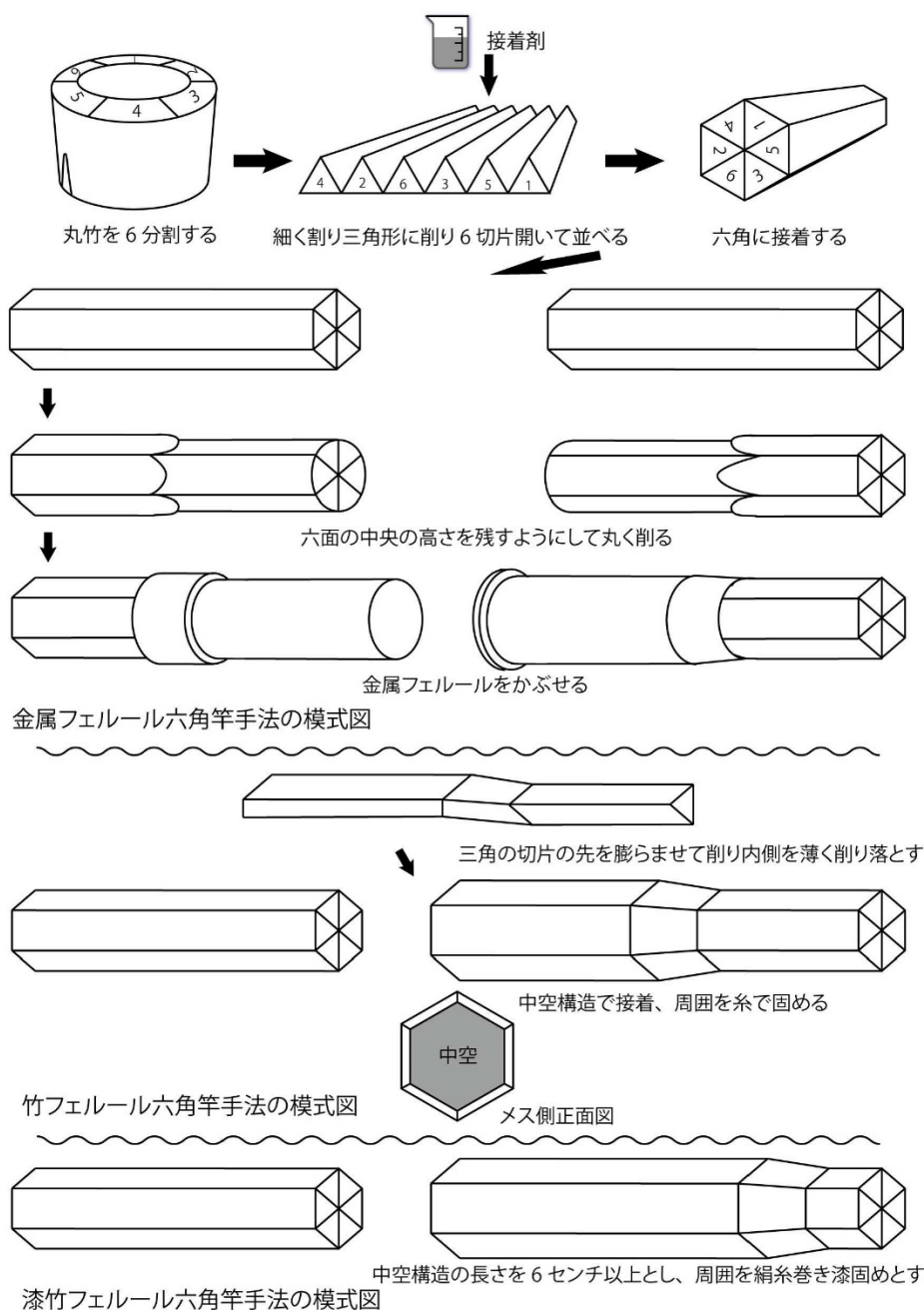
トンキンケーンの生産地、福建省山中の竹林の写真。

(株) レオン三浦洋一代表提供。



(写真8) 国産真竹による六角竿成功例 (京都芸術大学
博士課程公開展示「D#2021」展より 筆者作例)。

結論 図版（特記無い限り筆者撮影）



	金属フェルール手法	竹フェルール手法	漆竹フェルール手法
竿先重量	金属により重い	非常に軽量	非常に軽量
しなりと柔軟性	柔軟性に欠ける	フェルール部分も多少曲がる	フェルール部分まで柔軟に曲がる
耐久性	接合部は耐久性がある	薄い竹のため耐久性は劣る	竹を漆で補強してあるため耐久性はある
線維のつながり	表皮側に金属接合部の削り込みがある	表皮に近い強靱な線維を無切断で使える	表皮に近い強靱な線維を無切断で使える
見た目	金属の見た目のため接合部が目立つ	竹製のため目立たない接合部に出来る	漆により華やかな接合部に出来る

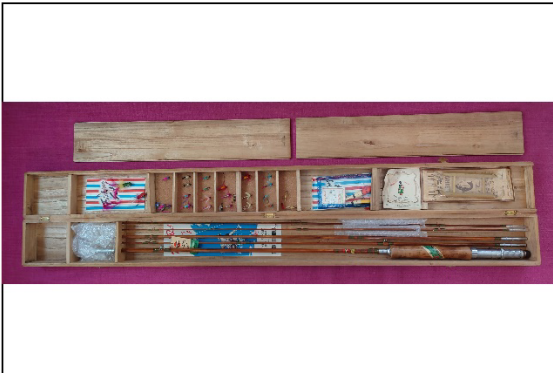
フェルール手法の比較表

(図表 1) フェルール製法比較 (筆者作成)

結論 図版（特記無い限り筆者撮影）



（写真1）「釣りの五感3」2022年。4m四方。釣竿、釣りゲーム、絨毯、石、糸。「アタラシイアタリマエノカタチU」展示。釣りゲームを利用した、実際の竿での釣りゲーム。食糧確保要素はないが、人気の作品だ。



（写真2）米軍向けお土産六角竿

「UENO」「TOSAKU」の文字がある米軍向けお土産六角竿。おそらく東作製と思われる。筆者所蔵。



（写真3）「六角和式テンカラ竿「姫神」」

畳み長さ114cm 全長2m22cm 孟宗竹、漆、絹糸、コルク、金箔、リリアン糸、金粉、水性2液性接着剤、2022年。孟宗竹を材料として六角竿を制作してみた。京都府舞鶴の池姫神社に保管されていた孟宗竹を用い、テンカラ竿を制作した。

発表論文リスト及び研究業績一覧

- ・2020 年 11 月 15 日～20 日「アタラシイアタリマエノカタチ 2020 展」(於：さいたま市
ノープラザ ギャラリー8)、グループ展示発表、2020 年、京都芸術大学 大学院研究制作
発表助成金事業
- ・2020 年 11 月 28 日「古仙台竿の調査及び復刻制作」芸術環境学会第 3 回全国大会 (於：
長野県茅野市 ワークラボハヶ岳)、研究発表、芸術環境学会
- ・「遊び仕事としての伝統釣法「テンカラ」ーその伝承と道具に関する研究及び制作ー」
『京都芸術大学大学院紀要』第 1 号、2021 年、京都芸術大学、pp. 488-530
- ・2021 年 8 月 21 日～29 日「アタラシイアタリマエノカタチ 2021 展」(於：蓼科東急リ
ゾートそよかぜ館)、グループ展示発表、2021 年京都芸術大学 大学院研究制作発表助成
金事業
- ・2021 年 8 月 22 日「近世日本の釣具の変化」日本民具学会 158 回研究会 (於：蓼科東急
リゾートそよかぜ館及びオンライン)、研究発表、日本民具学会
- ・2021 年 8 月 22 日「アタラシイアタリマエノカタチ 2021 展に関する口頭発表」(於：蓼
科東急リゾートそよかぜ館及びオンライン)、研究グループ発表、日本民具学会
- ・2021 年 9 月 11 日「六角竿手法による真竹竿製法」芸術環境学会第 4 回全国大会 (於：
広島県尾道市 ONOMICHI SHARE)、研究発表、芸術環境学会
- ・「近代日本における釣竿と生活ー敗戦などによる変化と、遊び仕事としての釣りー」『京
都芸術大学大学院紀要』第 2 号、2021 年、京都芸術大学、pp. 87-100
- ・2021 年 11 月 17～22 日「アタラシイアタリマエノカタチ井展」(於：京都芸術大学未来
館 2F)、グループ展示発表、2021 年京都芸術大学 大学院研究制作発表助成金事業
- ・2021 年 11 月 18～24 日「D#展 2021」(於：京都芸術大学ギャラリー・オーブ)、展覧会、
京都芸術大学大学院博士課程 1・2 年生制作展、京都芸術大学

- ・「和製六角竿から見た 20 世紀日本における釣竿と生活」『民具研究』164 号、日本民具学会、2022 年、pp. 37-52
- ・「日本における六角竿の製法と変遷一漆を使った新しい竹フェルール手法一」『京都芸術大学大学院紀要』第 3 号、2022 年、京都芸術大学
- ・2022 年 8 月 21 日～28 日「アタラシイアタリマエノカタチ U 展」（於：蓼科東急リゾートそよかぜ館）、グループ展示発表、京都芸術大学有志